

秋田県文化財調査報告書196集

諏訪台C遺跡発掘調査報告書

—积迦内地区農免農道整備事業—

秋田県埋蔵文化財センター

1990・3

秋田県教育委員会

諏訪台C遺跡発掘調査報告書

— 釧路内地区農免農道整備事業 —

1990・3

秋田県教育委員会

序

本報告書は、大館市釈迦内地区農免農道整備事業に先立ち発掘調査を実施した大館市大茂内にある諏訪台C遺跡の調査結果をまとめたものであります。

諏訪台C遺跡はこの農道路線の分布調査によって明らかになつたものです。調査の結果、繩文時代後期初頭を中心とした遺物、弥生時代初頭の住居跡、平安時代の住居跡とそれらに伴つて多くの遺物が発見されました。

中でも弥生時代初頭の住居跡は、秋田県北部でははじめて検出されたもので、それから出土した土器とともに注目されています。

今回発掘調査した地域は、広い遺跡の中で農道によって破壊された部分だけの調査であります。したがつて多くの貴重な埋蔵文化財はまだ、この道路の両側に保存されています。

この報告書が今後この遺跡の保護に利用されることはもちろん、さらに広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査に御協力をいただきました秋田県農政部北秋田農林事務所・大館市教育委員会をはじめ関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成2年3月15日

秋田県教育委員会

教育長 橋 本 顯 信

例　　言

1. 本報告書は、釧路内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書の執筆分担は、第1～3章・第4章第4節・まとめ2を利部修が、第4章第1節～3節・まとめ1は和泉昭一が担当した。
3. 本報告書の編集は利部・和泉が行なった。
4. 本報告書の作成にあたり以下の方々や機関から助言を得た。記して謝意を表する。
板橋範芳、工藤竹久、須藤 隆、高橋亜貴子、中野 寿、中村五郎、奈良昌毅、成田誠治、
林 謙作、弘前市教育委員会、藤田弘道、松本達造、村越 漢（敬省略、五十音順）
5. 第5章「自然科学的分析」のうち、第1節の熱残留磁気測定については秋田大学鉱山学部助教授、西谷忠師先生に執筆をお願いした。¹⁴C測定については学習院大学年代測定室に、火山灰測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。また、石質の鑑定を秋田県立博物館学芸事務佐々木厚氏にお願いした。
6. 土色および土器の表記は、農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に掲載した。

凡　　例

1. 遺構実測図は、1/50を基本としたが、それ以外のものもある。
2. 遺物の実測図は1/5・1/4を基本とし、1/4のものは（ ）付けて表記したものもある。
3. 遺構・遺物には以下のようないくつかの略記号を付してある。
S I…竪穴住居跡、S B…建物跡、S Z…炉跡、S N…焼土遺構、S R…土器埋設遺構、
S Q…集石、SKF…フラスコ状土坑、SK…土坑、SX…不明遺構、P…柱穴、S…疊、
K…鉄製品、S 1…石製品
4. 掲図中のスクリーントーン・シンボルマークは以下のように使用した。

スクリーントーン



地　山



十和田a降下火山灰



白頭山火山灰・磨面



焼土・ベンガラ

シンボルマーク



土　器・土製品



石　器・石製品



鉄製品

序
例言・凡例

目次

挿図目次

表目次

附録目次

目 次

第1章はじめに	1	7. 土坑	24
第1節 調査に至るまで	1	第2章 幼生時代の遺構と遺物	37
第2節 調査の組織と構成	1	1. 壁穴住居跡	37
第2章 遺跡の立地と構成	3	2. 地下道	46
第1節 遺跡の位置と立地	3	3. 磐石	50
第2節 歴史的環境	4	第3章 幼生時代の遺構と遺物	50
第3章 発掘調査の概要	7	1. 郷穴住居跡	50
第1節 遺跡の概観	7	2. 不明遺構	54
第2節 調査方法	11	第4章 出土遺物	58
第3節 調査経過	12	1. 上器・土製品	58
第4章 洞左の記述	13	2. 石器・石製品	72
第1節 魏晉時代の遺構と遺物	13	第5章 自然科学的分析	141
1. 壁穴住居跡	13	第1節 热液留滞気測定	141
2. 建物跡	16	第2節 ^{14}C 年代測定	145
3. 炉跡	16	第3節 火山灰分析	146
4. 焚土遺構	20	まとめ	149
5. 土器埋設遺構	21	1. 検出遺構について	149
6. フラスコ状土坑	21	2. IV群土器について	151

挿 図 目 次

第1図 離訪台C遺跡周辺の地形と路線計画図	2	第13図 S K土坑(4)	35
第2図 離訪台C遺跡の位置と周辺の遺跡	5	第14図 S K土坑(5)	36
第3図 遺跡基本土層図・土層と遺構の関係模式図	8	第15図 S I 28壁穴住居跡	38
第4図 遺構配図と時代別遺構・遺物分布図	9・10	第16図 S I 33壁穴住居跡	40
第5図 S I 68壁穴住居跡	14	第17図 S I 34壁穴住居跡	41
第6図 S I 76壁穴住居跡	15	第18図 S I 60壁穴住居跡	43・44
第7図 S B37建物跡・S N77廐土遺構	17	第19図 S I 61壁穴住居跡	47・48
第8図 S Z炉跡(1)・S N廐土遺構(1)	22	第20図 S N廐土遺構(2)	51・52
第9図 S Z炉跡(2)・S R土器埋設遺構	23	第21図 S Q磐石	53
第10図 S K Fフラスコ状土坑・S K土坑(1)	32	第22図 S I 18壁穴住居跡	55
第11図 S K土坑(2)	33	第23図 S I 18壁穴住居跡カマド	56
第12図 S K土坑(3)	34	第24図 S I 32壁穴住居跡・S X 51不明遺構	57

第25図	繩文土器分類模式図	59
第26図	W群土器分類模式図	63・64
第27図	遺構内出土遺物(1)	75
第28図	遺構内出土遺物(2)	76
第29図	遺構内出土遺物(3)	77
第30図	遺構内出土遺物(4)	78
第31図	遺構内出土遺物(5)	79
第32図	遺構内出土遺物(6)	80
第33図	遺構内出土遺物(7)	81
第34図	遺構内出土遺物(8)	82
第35図	遺構内出土遺物(9)	83
第36図	遺構内出土遺物(10)	84
第37図	遺構内出土遺物(11)	85
第38図	遺構内出土遺物(12)	86
第39図	遺構内出土遺物(13)	87
第40図	遺構内出土遺物(14)	88
第41図	遺構内出土遺物(15)	89
第42図	遺構内出土遺物(16)	90
第43図	遺構内出土遺物(17)	91
第44図	遺構内出土遺物(18)	92
第45図	遺構外出土土器(1)	93
第46図	遺構外出土土器(2)	94
第47図	遺構外出土土器(3)	95
第48図	遺構外出土土器(4)	96
第49図	遺構外出土土器(5)	97
第50図	遺構外出土土器(6)	98
第51図	遺構外出土土器(7)	99
第52図	遺構外出土土器(8)	100
第53図	遺構外出土土器(9)	101
第54図	遺構外出土土器(10)	102
第55図	遺構外出土土器(11)	103
第56図	遺構外出土土器(12)	104
第57図	遺構外出土土器(13)	105
第58図	遺構外出土土器(14)	106
第59図	遺構外出土土器(15)	107
第60図	遺構外出土土器(16)	108
第61図	遺構外出土土器(17)	109
第62図	遺構外出土土器(18)	110
第63図	遺構外出土石器(1)	111
第64図	遺構外出土石器(2)	112
第65図	遺構外出土石器(3)	113
第66図	遺構外出土石器(4)	114
第67図	遺構外出土石器(5)	115
第68図	遺構外出土石器(6)	116
第69図	遺構外出土石器(7)	117
第70図	遺構外出土石器(8)	118
第71図	諏訪台C遺跡遺構配置略図	144
第72図	交流洞延による残留磁化強度の変化	144
第73図	交流消磁による磁化方位の変化	144
第74図	諏訪台C遺跡の測定結果	144
第75図	諏訪台C遺跡出土物組成ダイアグラム	148
第76図	弥生時代の竪穴住跡配図	151

表 目 次

第1表	諏訪台C遺跡と周辺の遺跡一覧表	6
第2表	土器觀察表(1)	119
第3表	土器觀察表(2)	120
第4表	土器觀察表(3)	121
第5表	土器觀察表(4)	122
第6表	土器觀察表(5)	123
第7表	土器觀察表(6)	124
第8表	土器觀察表(7)	125
第9表	土器觀察表(8)	126
第10表	土器觀察表(9)	127
第11表	土器觀察表(10)	128
第12表	土器觀察表(11)	129
第13表	土器觀察表(12)	130
第14表	土器觀察表(13)	131
第15表	土器觀察表(14)	132
第16表	土器觀察表(15)	133
第17表	土器觀察表(16)	134
第18表	土器觀察表(17)	135
第19表	土器觀察表(18)	136
第20表	石器觀察表(1)	137
第21表	石器觀察表(2)	138
第22表	石器觀察表(3)	139
第23表	石器觀察表(4)	140
第24表	諏訪台C遺跡古地磁気測定結果	143
第25表	諏訪台C遺跡出土物組成	148

図版目次

- 図版1. 1 S K23先端 (南東>北西)
2 調査後近景 (南東>北西)
- 図版2. 1 S I 68先端 (東>西)
2 S I 76先端 (北西>南東)
- 図版3. 1 S B 37先端 (東>西)
2 S B 37・ピット5先端 (北東>南西)
3 S B 37・ピット3土層断面 (北>南)
- 図版4. 1 S Z 02先端 (南西>北東)
2 S Z 02先端 (西>東)
3 S N 06種類 (西>東)
4 S Z 19土層断面・遺物出土状況 (南>北)
5 S Z 19先端 (南>北)
6 S N 22土層断面 (南>北)
7 S Z 27土層断面 (南>北)
8 S Z 41遺物出土状況・先端 (南西>北東)
- 図版5. 1 S Z 48遺物出土状況 (北東>南西)
2 S Z 48先端 (北西>南東)
3 S Z 53先端 (北>南)
4 S N 57土層断面 (北西>南東)
5 S N 59(右)・S K 58(左)確認 (北西>南東)
6 S Z 62先端 (北>南)
7 S N 65土層断面 (北東>南西)
8 S Z 75土層断面・先端 (北東>南西)
- 図版6. 1 S K F 42先端 (北東>南西)
2 S K F 44先端 (東>西)
3 S K F 67土層断面・先端 (北東>南西)
- 図版7. 1 S R 05土層断面 (南西>北東)
2 S K 01(左)・S K 17(右)先端 (西>東)
3 S K 04確認・遺物出土状況 (南>北)
4 S K 04先端 (西>東)
5 S K 07先端 (東>西)
6 S K 08先端 (南西>北東)
7 S K 09(右)・S K 10(左)先端 (東>西)
8 S K 11先端 (南西>北東)
- 図版8. 1 S K 12(奥)・S K 13(手前)先端 (南西>北東)
2 S K 14先端 (北>南)
3 S K 15先端 (南西>北東)
4 S K 16先端 (西>東)
5 S K 20遺物出土状況・先端 (東>西)
6 S K 21先端 (北東>南西)
7 S K 23遺物出土状況 (南西>北東)
- 図版9. 1 S K 24先端 (北東>南西)
2 S K 25遺物出土状況・先端 (南>北)
3 S K 26先端 (南>北)
4 S K 29遺物出土状況・先端 (東>西)
5 S K 30先端 (南>北)
6 S K 31先端 (北西>南東)
7 S K 35先端 (南西>北東)
8 S K 36遺物出土状況 (南西>北東)
- 図版10. 1 S K 38遺物出土状況 (南>北)
2 S K 39(右)・S K 40(左)先端 (南西>北東)
3 S K 54先端 (北西>南東)
4 S K 55先端 (北>南)
5 S K 55遺物出土状況 (北西>南東)
6 S K 63先端 (北東>南西)
7 S K 64先端 (北東>南西)
8 S K 66土層断面・先端 (北東>南西)
- 図版11. 1 S K 69遺物出土状況 (南>北)
2 S K 69先端 (北東>南西)
3 S K 70土層断面・遺物出土状況 (南西>北東)
4 S K 71先端 (西>東)
5 S K 72先端 (北東>南西)
6 S K 73先端 (西>東)
7 S K 74先端 (南東>北西)
8 S K 79先端 (西>東)
- 図版12. 1 S I 28先端 (西>東)
2 S I 28遺物出土状況1 (西>東)
3 S I 28遺物出土状況2 (南西>北東)
- 図版13. 1 S I 33先端 (南西>北東)
2 S I 33先端 (北東>南西)
- 図版14. 1 S I 33土層断面 (南>北)
2 S I 33堆設・土器積立状況 (南東>北西)
3 S I 33右側伊土層断面・先端 (東>西)
- 図版15. 1 S I 60先端 (南西>北東)
2 S I 60遺物出土状況1 (南西>北東)
3 S I 60遺物出土状況2 (南東>北西)
4 S I 60土器埋設堆積断面 (西>東)
5 S I 60土器埋設堆積方先端 (西>東)
- 図版16. 1 S I 61先端 (北東>南西)
2 S I 61土器埋設伊土層断面 (南西>北東)
3 S I 61石圓錐先端 (北西>南東)

4	S I 61遺物・ベンガラ土層断面(西ノ東)	図版37. 1 遺構外出土土器(1)
5	S I 61遺物出土状況(1)(北西↔南東)	2 遺構外出土土器(2)
図版17. 1	S I 61遺物出土状況(2)(南東↔北西)	図版38. 1 遺構外出土土器(3)
2	S I 61遺物出土状況(3)(南東↔北西)	2 遺構外出土土器(4)
3	S I 61遺物出土状況(4)・	図版39. 1 遺構外出土土器(5)
4	灰白色黏土検出状況(北↔南)	2 遺構外出土土器(6)
図版18. 1	S N 45確認(南東↔北西)	図版40. 1 遺構外出土土器(7)
2	S N 47(左)・S N 56(右)土層断面(東↔西)	2 遺構外出土土器(8)
3	S N 52遺物出土状況(東↔西)	図版41. 1 遺構外出土土器(9)
4	S N 56炭化稲出土状況(1)(東↔西)	2 遺構外出土土器(10)
5	S N 56炭化稲出土状況(2)(北東↔南西)	図版42. 1 遺構外出土土器(11)
6	S Q 43完壺(西ノ東)	2 遺構外出土土器(12)
7	S Q 49完壺(南西↔北東)	図版43. 1 遺構外出土土器(13)
8	S Q 50完壺(北東↔南西)	2 遺構外出土土器(14)
図版19. 1	S I 18完壺(西ノ東)	図版44. 1 遺構外出土土器(15)
2	S I 32完壺(西ノ東)	2 遺構外出土土器(16)
図版20. 1	S I 18アマド内遺物出土状況(西ノ東)	図版45. 1 遺構外出土土器(17)
2	S I 32白崩山火山灰検出状況(東↔西)	2 遺構外出土土器(18)
3	S X 51遺物出土状況(南東↔北西)	図版46. 1 遺構外出土土器(19)
図版21.	出土遺物(1)	2 遺構外出土土器(20)
図版22.	出土遺物(2)	図版47. 1 遺構外出土土器(21)
図版23.	出土遺物(3)	2 遺構外出土土器(22)
図版24.	出土遺物(4)	図版48. 1 遺構外出土土器(23)
図版25.	出土遺物(5)	2 遺構外出土土器(24)
図版26.	出土遺物(6)	図版49. 1 遺構外出土土器(25)
図版27.	出土遺物(7)	2 遺構外出土土器(26)
図版28.	出土遺物(8)	図版50. 1 遺構外出土土器(27)
図版29. 1	遺構内出土遺物(1)	2 遺構外出土土器(28)
2	遺構内出土遺物(2)	図版51. 1 遺構外出土土器(29)
図版30. 1	遺構内出土遺物(3)	2 遺構外出土土石器(1)
2	遺構内出土遺物(4)	図版52. 1 遺構外出土石器(2)
図版31. 1	遺構内出土遺物(5)	2 遺構外出土石器(3)
2	遺構内出土遺物(6)	図版53. 1 遺構外出土石器(4)
図版32. 1	遺構内出土遺物(7)	2 遺構外出土石器(5)
2	遺構内出土遺物(8)	図版54. 1 遺構外出土石器(6)
図版33. 1	遺構内出土遺物(9)	2 遺構外出土石器(7)
2	遺構内出土遺物(10)	図版55. 1 遺構外出土石器(8)
図版34. 1	遺構内出土遺物(11)	2 遺構外出土石器(9)
2	遺構内出土遺物(12)	図版56. 1 遺構外出土石器(10)
図版35. 1	遺構内出土遺物(13)	2 遺構外出土石器(11)
2	遺構内出土遺物(14)	図版57. 文様・調整技法
図版36. 1	遺構内出土遺物(15)	図版58. 1 成形・削製技法
2	遺構内出土遺物(16)	2 S N 36出土炭化稲

第1章 はじめに

第1節 調査に至るまで

釧路内地区農道整備事業は、大館市釧路内地区周辺の地域活性化のために昭和62年4月に計画が策定され、平成3年3月完成を目指し実施されている。工事区域は、市街地北東の大茂内字上宿木台から北西方向に延び商人留字清水沢に至る、幅約10m総延長2,641mの路線である。

この工事に先立って北秋田農林事務所土地改良課では、昭和63年2月秋田県教育委員会教育長あてに、路線内における埋蔵文化財の有無の調査を依頼した。調査の結果、新しく諏訪台C遺跡を確認。そこで秋田県教育委員会では、同年10月大茂内地区的台地を中心に範囲確認調査を行なった結果、台地の縁から中央までの約130mの範囲にたくさんの遺構や遺物が検出されたのである。そして、農政部と秋田県教育委員会とで協議し、平成元年5月諏訪台C遺跡の埋蔵文化財発掘調査を実施することになった。

平成元年4月、土地改良課の阿部・森両氏と調査担当が現地で発掘調査区の現状把握と調査に関しての打ち合わせを行った。そこでは、狭い路線内における排土処理の問題等、全面的な協力を約束していただき、本調査を実施したのである。

第2節 調査の組織と構成

所 在 地 秋田県大館市大茂内字諏訪台33外

調 査 期 間 平成元年5月8日～6月30日

調 査 面 積 1,300m²

調 査 主 体 者 秋田県教育委員会

調 査 担 当 者 利 部 修(秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事)

和 泉 昭 一(同 非常勤職員)

調査事務担当者 佐 田 茂(同 主査)

高 橋 忠太郎(同 主事)

調査協力機関 秋田県農政部北秋田農林事務所

大館市教育委員会



第1図 築防台C遭跡周辺の地形と路線計画図

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置と立地（第1回）

大館市は秋田県の北部中央にあり、青森県と県境を画している十和田からは鹿角郡を挟んで南西に位置している。大館盆地は北の白神山地と奥羽脊梁山脈の西側を縦走している出羽丘陵の北端にある山々に囲まれた地域で、沖積低地や沖積段丘となっている。

大館市街地は米代川で分断された沖積地の北東に発達し、さらに市街地は東西に流れる長木川によって南北に二分されている。市街地の西側ではこの長木川に北東から流れ込む下内川があり、これらの3つの河川が市街地を含む大館盆地の開発に大きく関わっている。遺跡が所在する大館盆地北東部の通称長木地区は、沖積地の北東端沖積段丘にあり同時にそこは、長木川、その北の茂内沢、さらに北側の大茂内沢谷口から発達した扇状地ともなっている。この地域の北・東・南側にかけてはそれぞれ高森山・鍋越山・鳳凰山などの山塊が連なり、西側には大館市街地に続く水田が広がっている。遺跡は、小坂鉄道小坂線東代野駅北に接する大茂内集落のさらに北側にあるほぼ平坦な舌状台地上に立地している。

北東部を除く三方が沖積地となっている台地は、遺跡から北東約5kmの高倉山から南西に延びる高倉山山地の裾野にあたり、広さは約400m×250m標高100~110mである。遺跡はこの台地の北西縁に沿って広範な広がりを示すと考えられるが、調査区ではこの台地の中央から北西縁の中央部に至る幅約10m長さ約130mの範囲である。この調査区を含む台地は杉の植林化が進み、その仕事のために利用する山道が調査区のほぼ中央を横断している。調査初期の段階ではたくさんの抜根跡を確認したので、ある程度継続した植林地であることが判る。この台地は南西方向に極めて緩やかな傾斜を示すが、絶じて北西・南東側では4~5mの高さで次の沖積段丘に急傾斜で移行し、南側では徐々に緩やかな傾斜を示しながら大茂内集落に移行している。

一方、この台地の地山層は第4紀完新世に形成されたもので、礫を含む扇状地堆積物である。地山上方の土壤は大茂内2統aとされている褐色の森林土壤であり、泥岩・凝灰岩を母材とした植質で比較的の安定した土である。また、大館盆地を含む秋田県北東部では、十和田湖に起源をもつ十和田aが広範に分布しており、大茂内2統aの内上層に堆積している。

以上、遺跡の立地を大まかに見れば、その位置は安定した土壤である台地の縁辺にあり、同時に、沖積地の末端に選地していると言える。このことは沖積地での生業と無関係ではないであろう。このように各時代の内容は、上述した地理的環境と深く関わっている。

第2節 歴史的環境（第2図、第1表）

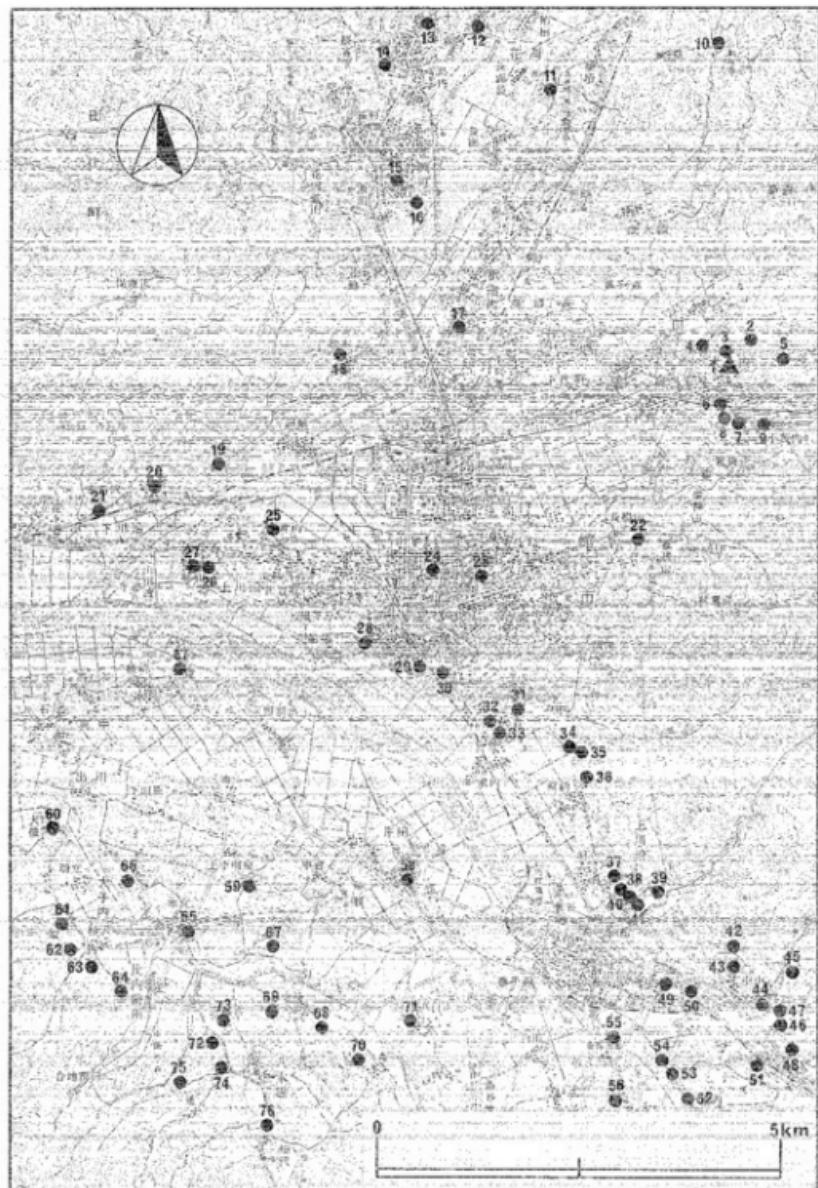
米代川とそれに合流する長木川を中心として形成された大館盆地には、流域ごとに遺跡の分布が認められる。遺跡分布の状況は、大館市街地南側の米代川右岸にある縄文時代中心の地域（26～28・30・31・33・37・39～43・45～48）、その西にある犀川に挟まれた平安時代以降の遺跡（52～56）、さらにその西に晩期の広範な遺跡（67～73・75・76）や中世館跡（60・61・63～65・74）が連なる引欠川左岸の地域がある。また、市街地の北には平安時代以降の遺跡（14～15・19・20）が点在している下内川右岸地域、そして諫訪台C遺跡（1）のある、市街地東側の長木川とそれに注ぐ大茂内沢の河川に挟まれた地域とがある。市街地の北には、白沢地区にある平安時代の大集落大館野遺跡や松原地区にある中世矢立庵寺^(註1)が含まれている。

諫訪台C遺跡周辺は、縄文時代前期では茂内遺跡（9）、中期では、諫訪台A遺跡（2）がある。後期では、十腰内土器様式とともに目にアスファルトを使用した土偶が出土した塚の下遺跡（6）や塚の下A遺跡（7）・B遺跡（8）があり、諫訪台C遺跡のある古台地南側沖積段丘に立地している。晩期では大茂内沢河川右岸沖積地にある大茂内遺跡があげられ、諫訪台C遺跡晩期出土遺物との関連が考えられる。

諫訪台C遺跡からは、縄文・弥生・平安の各時代の土器が出土しているが、特に本遺跡を特徴づけている遺物に弥生時代初頭の土器をあげることができる。弥生時代の遺跡は、大館市輕井沢の鳩ヶ巣^(註2)遺跡から出土した小坂X式土器があり、隣接する田代町山田の柏木遺跡からも同期の土壙墓が検出されている。また、諫訪台C遺跡の近郊に目を移せば、大館市花岡町の粕田遺跡からは砂沢式・二枚橋式期に関わる土器が出土しているほか、米代川右岸川口の鳴滝^(註3)遺跡からは、諫訪台C遺跡出土土器と類似する弥生初頭と考えられる土器が出土している。

参考文献

- 註1 関喜四郎他「大館」「土地分類基本調査」秋田県 1986（昭和61年）
- 註2 秋田県教育委員会『国道103号大館南バイパス建設事業による埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第173集 1988（昭和63年）
- 註3 大館市教育委員会『矢立庵寺発掘調査報告書』 1987（昭和62年）
- 註4 秋田県教育委員会『塚の下遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第61集 1979（昭和54年）
- 註5 大館市史編さん委員会『大館市史』第一巻 大館市 1979（昭和54年）
- 註6 1979年発行の鳴滝遺跡出土の弥生時代土器は、『大館市史』の中で大館市孤森出土土器として写真で紹介されているが、遺跡名については板橋範芳氏の教示を得ている。



第2図 諏訪台C遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 講訪台C遺跡と周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	講訪台C遺跡	縄文(前・後・晚期)・弥生・平安	3 9	山館遺跡	縄文(前・晚期)
2	講訪台A遺跡	縄文(中期)	4 0	上ノ山I遺跡	縄文(前・晚期)
3	講訪台B遺跡	古代	4 1	上ノ山II遺跡	縄文(後・晚期)
4	大森内遺跡	縄文(晚期)	4 2	近沢遺跡	縄文(後期)
5	小茂内沢遺跡	縄文	4 3	竜毛岱遺跡	縄文(中・後期)・中世
6	塚の下遺跡	縄文(後期)・古代	4 4	中山遺跡	古代
7	塚の下A遺跡	縄文(後期)	4 5	長殿遺跡	縄文(中期)
8	塚の下B遺跡	縄文(後期)	4 6	野沢岱C遺跡	縄文(早・前期)
9	茂内遺跡	縄文(前期)	4 7	野沢岱D遺跡	縄文(前期)
10	帆瀬原底遺跡	縄文(前・中・後・晚期)	4 8	下塙II遺跡	縄文(前削)
11	福留・鶴居野遺跡	縄文(前・中期)	4 9	市川遺跡	古代
12	大森遺跡	縄文(前期)	5 0	本道端遺跡	縄文(前・中期)
13	本郷下遺跡	縄文(晚期)	5 1	横沢遺跡	縄文(前削)
14	七ツ館	中世	5 2	袖ノ沢遺跡	縄文・平安
15	花岡城	中世	5 3	横沢遺跡	縄文(早・中・後期)・平安
16	女日館	中世	5 4	大岱遺跡	縄文(前削)・平安
17	帆瀬内館	中世	5 5	長岡城	中世
18	松木遺跡	縄文(前削)	5 6	箕ヶ原	中世
19	沼館	中世	5 7	檜崎越	中世
20	赤石沢遺跡	縄文(中・後・晚期)	5 8	新田館	平安末～中世
21	押館	中世	5 9	中台遺跡	縄文(中期)
22	長根山公園遺跡	縄文(晚期)	6 0	大波館	中世
23	大館城	中世～近世	6 1	太子内館	中世
24	土飛山遺跡	中世	6 2	裏子袋遺跡	古代
25	片山館遺跡	中世	6 3	杉沢館	中世
26	芋堀沢遺跡	縄文(前・中期)	6 4	前田館	中世
27	新田屋敷派遺跡	縄文(前削)	6 5	本宮館・本宮I遺跡	中世・縄文(中期)
28	太平山遺跡	縄文(晚期)	6 6	本宮II遺跡	縄文(前・中期)
29	小館花館	中世	6 7	本宮遺跡	縄文(晚期)
30	小館花遺跡	縄文(後・晚期)	6 8	寺崎I遺跡	縄文(晚期)
31	萩の台遺跡	縄文(中期)	6 9	寺崎II遺跡	縄文(晚期)
32	池内A遺跡	古代	7 0	二ツ森遺跡	縄文(晚期)
33	池内B遺跡	縄文(前・中・後期)	7 1	片見遺跡	縄文(晚期)
34	鰐釣館	中世	7 2	五輪台I遺跡	縄文(晚期)
35	山王岱遺跡	縄文・平安・中世	7 3	五輪台II遺跡	縄文(晚期)
36	鰐釣遺跡	縄文	7 4	八木橋場	中世
37	羽立遺跡	縄文(晚期)	7 5	一通遺跡	縄文(晚期)
38	山館	中世	7 6	畠沢遺跡	縄文(晚期)

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観（第3・4図、図版1）

諏訪台C遺跡では、その調査面積が少ないにもかかわらず79の遺構と多量の遺物を検出した。時代は縄文時代で前期（織維を含む）、後期前葉、晩期全般、弥生時代では初頭、平安時代では、前半代が主体である。時代ごとの内容を概観し基本土層の説明を行う。

縄文時代では、竪穴住居跡2軒・建物跡1棟・炉跡9基・焼土遺構7基・土器埋設遺構1基・プラスコ状土坑3基・土坑40基を検出した。住居跡は周溝をもち、建物跡は不正形の6本柱である。建物跡からは後期の小破片を検出している。石圓炉は7基あり、拳大の石を円くめぐらすものと大型の石をコ状に組んだものがある。この7基の石圓炉のうち3基には後期の遺物が伴う。土坑は、前期SK40晩期SK23・29と遺物の伴わない21基を除くすべてに後期の遺物を含んでいる。繩文土器は、調査区全般から出土し、前期・晩期の土器は中央から北側にかけて多く認められているが、後期の遺物は調査区全域からまんべんなく出土しており、前期、晩期の遺物に比べて数多く分布している。また、後期と判明した遺構も、調査区の中央から北側にかけて多い分布を示している。30cm前後の石が黒色土中に広く認められたのは、これら後期の遺構・遺物の有り方と関係していると思われる。後期の土器は、初頭から十腰内I式期のものである。

弥生時代では、竪穴住居跡5軒・焼土遺構5基・集石3基を検出した。竪穴住居跡は、調査区の中央に切り合いをもたないで集中する大型の住居跡4軒と北側の端に位置する小型の住居跡がある。全掘もしくはほぼ全掘できたのはSI28とSI60であり、他は約半分の調査である。住居跡の特色は、炉の不明なSI33を除く4軒の住居跡に堀溝が認められること、4軒から検出された炉には、地床炉・石圓炉・土器埋設炉の種類が認められることである。5基検出された焼土遺構は、LT・MA52区に集中している。これらは、ほぼ同一レベルにあり、まとまりのある遺物や炭化物が同一平面で重なり、後述するが住居跡の可能性がある。したがって、焼土遺構のそれぞれは、竪穴住居跡内の焼土としてとらえられる。集石は拳大の石を敷きつめている2基と、20cm前後の石を立て並べてあるものと二種ある。弥生時代の遺物は遺構の密集している調査区中央に集中しているが、その北側と南側にも若干分布している。土器は所謂砂沢式期とその前後の時期である。縄文時代から弥生時代にかけての石器は、定型的な各種の石器以外にアスファルトの付着している剥片石器・スクレイバーなどが出土している。また、土

偶をはじめとする土製品も検出されている。

平安時代以降では、竪穴住居跡2軒・性格不明遺構1基を検出した。住居跡は2軒とも十和田aを切り込んでおり、S.I.32の埋土には別の火山灰が堆積していた。性格不明遺構は、炭化材を十和田aの直下に検出したものである。遺物は、住居跡とその付近から少量出土している。

次に遺跡の層位について述べることにする。浦本層位は調査区西側のMB42ポイント付近の層を基にして述べる。基本層はI～VI層まで分けることができる。

I層 黒褐色土(10YR^{2/4})表土。粘性は少なく軟らかい。十和田aを少量含む。層厚約10cm。

II層 黒色土(7.5YR^{2/4}) 粘性・締まり普通。十和田aを少量含む。層厚約15cm。

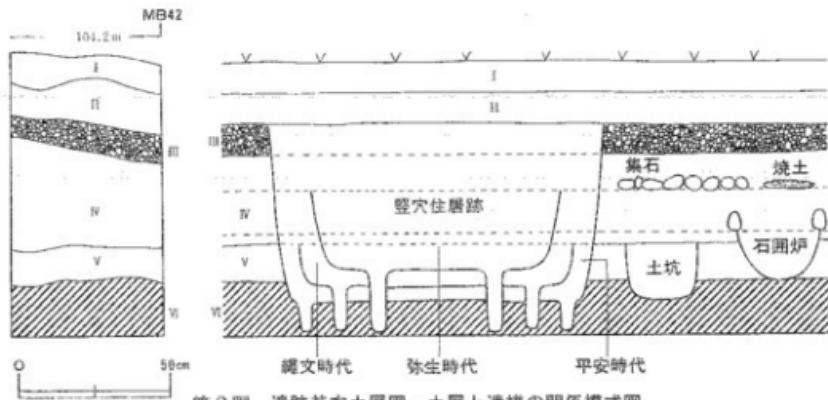
III層 十和田a。表面は黄褐色、断面は灰白色。粘性はないが締まっている。層厚約10cm。

IV層 黒色土(7.5YR^{2/4}) 粘性は普通でやや締まる。1cm前後の小石を少量含む。弥生・縄文時代の遺物包含層。層厚約30～40cm。

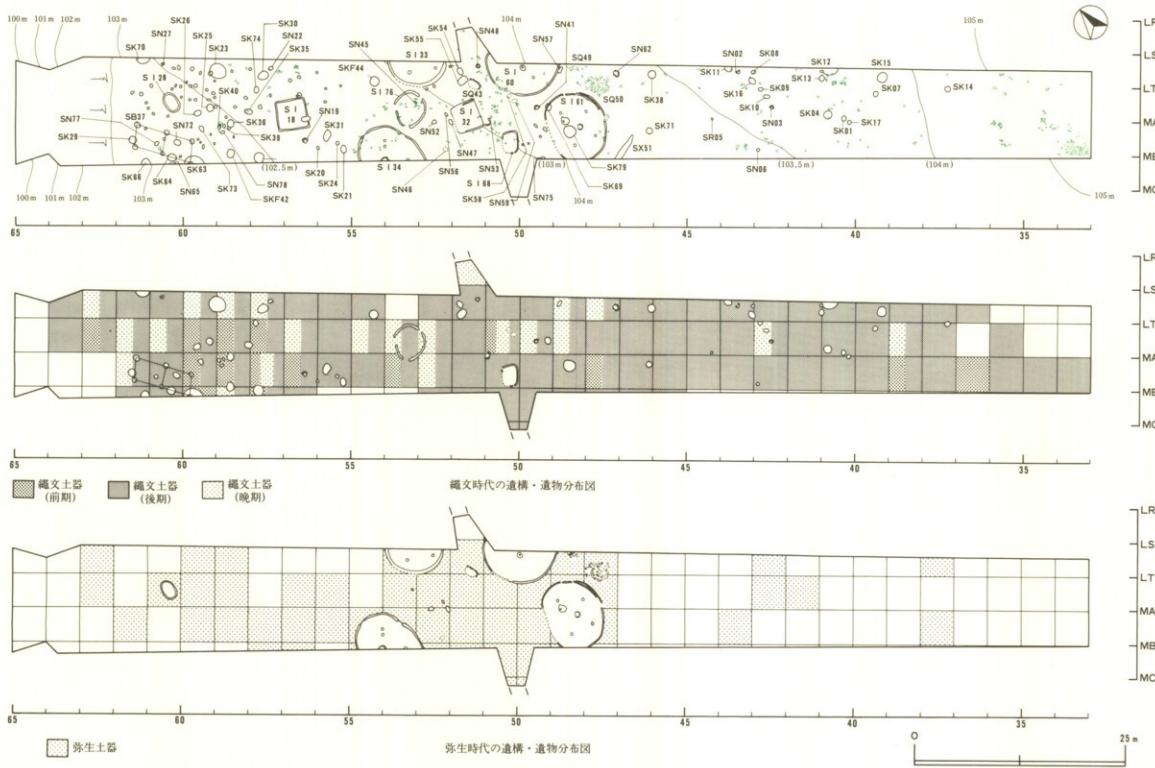
V層 褐色土(10YR^{4/4}) 漸移層。粘性は普通でやや軟らかい。層厚約10cm。

VI層 黄褐色土(10YR^{5/4}) 砂を多量に含んだ地山土。礫を少量含む。

調査区における地表面から地山面までの厚さはほぼ60～80cmの厚さがあり、MBラインでは33～62にかけて緩やかな傾斜を示している。また、特に調査区中央からその北側の調査区にかけては、東側から西側にかけて地山面が比較的顕著な傾斜を示している。このことは、S.I.61の床面において、その東側から西側の床面がVI層上面・V層・VI層下位と推移していくことでも良く判る。一方、調査区内における十和田aは比較的全域にあるものの、調査区南側では安定し、中央部から北側にかけては弥生時代の住居跡を除いて、厚く堆積しているまばらな有り方を示す傾向にある。この状況は耕作土による影響もあるが、先の地形傾斜の有り方と深く関わっていると考えられる。



第3図 遺跡基本土層図・土層と遺構の関係模式図



第4図 遺構配置図と時代別遺構・遺物分布図

第2節 調査方法（第4回）

発掘調査は、調査区全域を網羅するように4mの格子を組むグリッド方式を用いた。基準線は調査区が細長いため方位方向を採用せず、調査区の長軸方向（北西～南東）とそれに直交する方向の各線を利用した。すなわち、調査区の中央に仮原点となるMA50の点を設定し、長軸方向では北の方へ…20→80…と算用数字を用い、西の方へは…LA→LT、MA→MT…とアルファベットを用いている。このうちアルファベットの二桁目は、一区画ごとに記号を変える1桁目のアルファベットであるA→Tまでをまとめた、大区画を意味している。グリッドの呼称は、これらの組合せによる南東隅の交点の記号で表記した。

遺構名は検出された順番に01、02…と算用数字を付けたが、その遺構の性格が判明した時点でアルファベットによるS-I（竪穴住居跡）などの種類別略記号を冠した。つまり、遺構略号と検出番号の組み合わせが各々の遺構名となる。これらの中には調査の進行にしたがって、その遺構の性格が変わり略記号を変更したもの、また、自然にできた窪地などと判明して番号を抹消したものもある。

遺構の調査にあたっては、掘込み面における平面プラン確認の後、土層観察用の壁を残して掘込み、土層断面図終了後完掘する手順を踏んだ。完掘後は遺構平面図を作成したが、途中で遺物が出土した時はなるべく平面図をつくるように心がけた。また遺構内における遺物と遺構外であっても大きな破片は、実測後、遺構名・グリッド名・出土層位・年月日を記入し、取りあげた。

記録は図面・写真・野帳を必要に応じてその都度活用したが、図面は、平面図・断面図・エレベーション図など基本的には $1/20$ で作図することにした。ただし、カマドや集石など細部の表現が必要とされる場合は $1/10$ で作図し、さらに、大きな縮尺を必要とする場合はその都度大縮尺を変えてある。

写真撮影は、基本的には35mmのモノクロとリバーサルフィルムを用い、必要に応じてネガカラーフィルムを使用した。また、遺跡の近景や大型住居跡ではプロニ版を用いた。撮影に際してはなるべく三脚を用い、高所を得るためにローリングタワーを用いている。

野帳では必要事項をメモ取り、日誌に集約することにした。その際に、平面図や断面図が正式に作図されるものであっても、なるべく略図を豊富につくることに留意して日誌を整理した。

最後に調査全般に関わることとして、本調査の排土置場は、調査区の両端に限られるという不便さがあった。そのため頭初からベルトコンベアを駆使したが、結局、調査を半分づつ行ない調査済の区域の一部を排土置場とした。そのために、調査区全域を一環した流れの調査とはなっていない。

第3節 調査経過

諏訪台C遺跡の発掘調査は、平成元年4月13日の現場観察の後、5月8日から同年6月30日まで、その間発掘調査に要した日数は延べ43日間である。調査は排土置場の関係から45ライン南側（以下ここでは仮の方位で説明していく）の調査終了後、北側の調査という手順を踏んだ。以下調査の進行にしたがって、調査内容の概略を記することにする。

- 5月8日 現地で発掘作業の説明を行う。作業員の数は16名、プレハブ内外の整備と調査区の清掃を行い、調査前の撮影を完了する。
- 5月9日 ベルトコンベアー設置後、45ラインから南側にかけて黒色土中までの粗掘りを開始。河原石や縄文時代後期の土器片と石器などが検出される。
- 5月11日 MBラインで基本層序を決定する。黒色土中に石組遺構や焼土遺構が確認される。
- 5月15日 LT40区北西コーナーに集中する箇所を確認する。
- 5月17日 黒色土中に点在している大型河原石や、石臼炉、焼土遺構などの全景を撮影する。
- 5月19日 現在までに土器埋設遺構・焼土・石臼炉・土坑など7遺構が調査されたが、遺構を除く地山面までの掘り下げを開始した。
- 5月22日 45ライン南側の遺構調査と同時に、北側の粗掘りを開始した。焼土・土坑を数基確認するとともに、縄文時代後期・弥生時代前葉の遺物を検出する。
- 5月26日 45ライン南側の調査で17遺構が終了し全景写真を撮る。45ライン北側では大湯浮石が半月状に広がる部分2ヶ所と、方形を示す部分一ヶ所が確認された。
- 5月29日 S I 18確認写真終了後掘り進めた結果、平安時代の竪穴住居跡と確認できた。
- 6月2日 長木保育園の園児約20名が見学。
- 6月5日 十和田aの広がりをもつ遺構が弥生時代の竪穴であることが判明し、北壁際から壹棺が検出される。同様にS I 34も同時代の竪穴であることが示唆された。
- 6月7日 58ライン北側の地山面精査の結果、多くの柱穴と土坑が検出される。
- 6月13日 47～51ラインにかけて新たに弥生時代の竪穴住居跡を2軒検出する。2軒ともに炉・壁溝が確認されたほかにS I 61では南東壁際に遺物の集中部分を検出する。
- 6月19日 雨の晴れ間をぬって北西部の粗掘りや土留めの整備を行う。
- 6月20日 調査区北端で大型柱穴6本を検出する。
- 6月27日 45ラインより北側の全景写真を撮影する。
- 6月29日 長木小学校の生徒約60名が見学。
- 6月30日 現地説明を実施し、約40名が参加した。秋田大学西谷忠師先生によって熱残留磁気のサンプル採取を実施する。本日をもって全調査を終了した。

第4章 調査の記録

第1節 繩文時代の遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

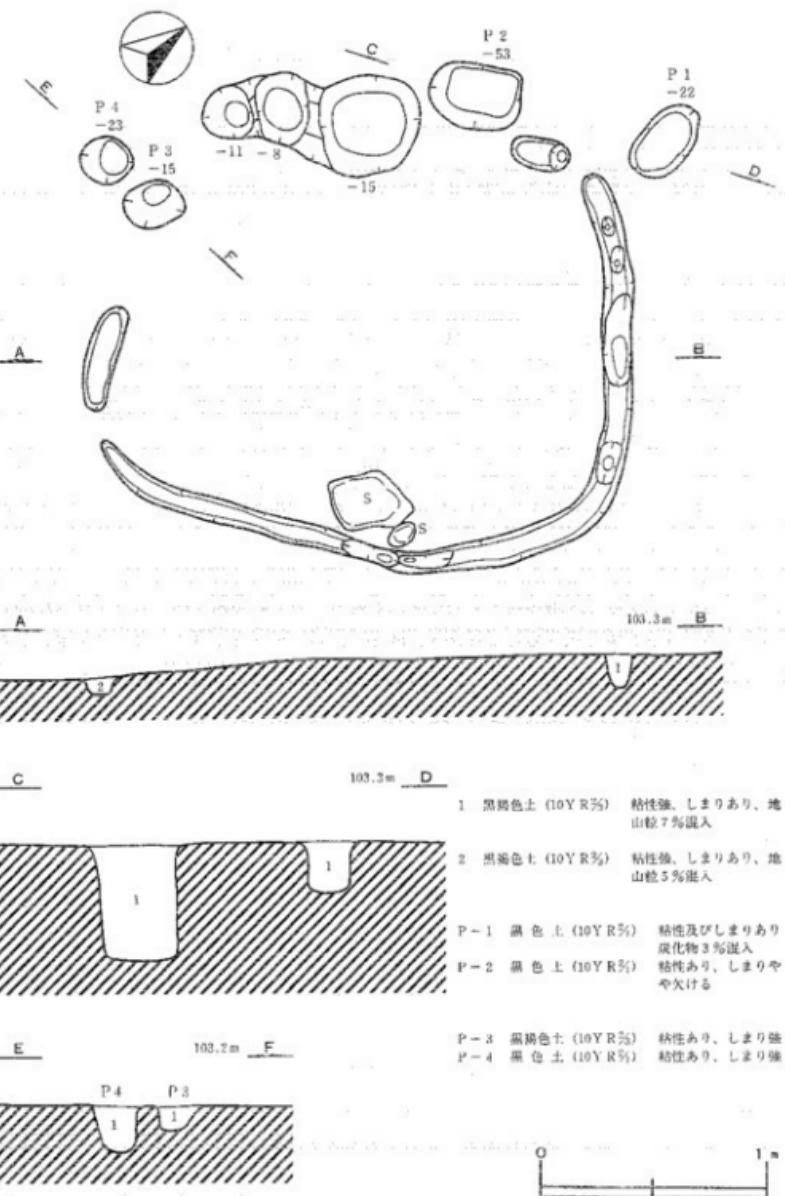
S 168 (第5・27図、第2表、図版2・29)

MA50グリッドに位置する。V層上面で焼土の散布・壁溝と思われる黒褐色土の落ち込みを検出したが、その後の精査過程でVI層（地山）まで掘り下げてしまったため、壁溝と柱穴状のピットを残すのみとなった。実際の床面は地山から8cm程上面にあり、炉も遺存していたものと考えられる。現存する状況から平面形は長軸2.38m、短軸1.87mの不整形を呈し、長軸方位はN-33°-Eである。壁溝は東側に見られ、上面幅10cm~14cm、底面幅6cm~9cm、深さ4cm~8cmを測る。底面には径8cm~30cmの円形・長楕円形の落ち込みがあり深さ10cm~20cmを測る。西側にも断続的にあるものの、径24cm~40cm、深さ11cm~15cmの円形の落ち込みが巡る。壁溝・落ち込みの埋土は黒褐色土で地山粒を少量混入するが、西側の落ち込みでは炭化物も若干混入する。床面は掘り過ぎてしまったが、軟弱であった可能性が高く、推定床面積4m²である。柱穴はプラン内では検出されず、北西隅部・南西隅部のプラン外に隣接する位置で4本検出した。それらは径20cm~37cm、深さ22cm~53cmの円形・楕円形を呈し、埋土は黑色土・黒褐色土である。P3は埋土・位置から西側に巡る落ち込みに帰属し、P2は形態・埋土から後世のものと思われる。P1・4は隅部に隣接する位置にあり、形態・埋土も類似点が多いが、本遺構に伴う柱穴であるかは不明である。

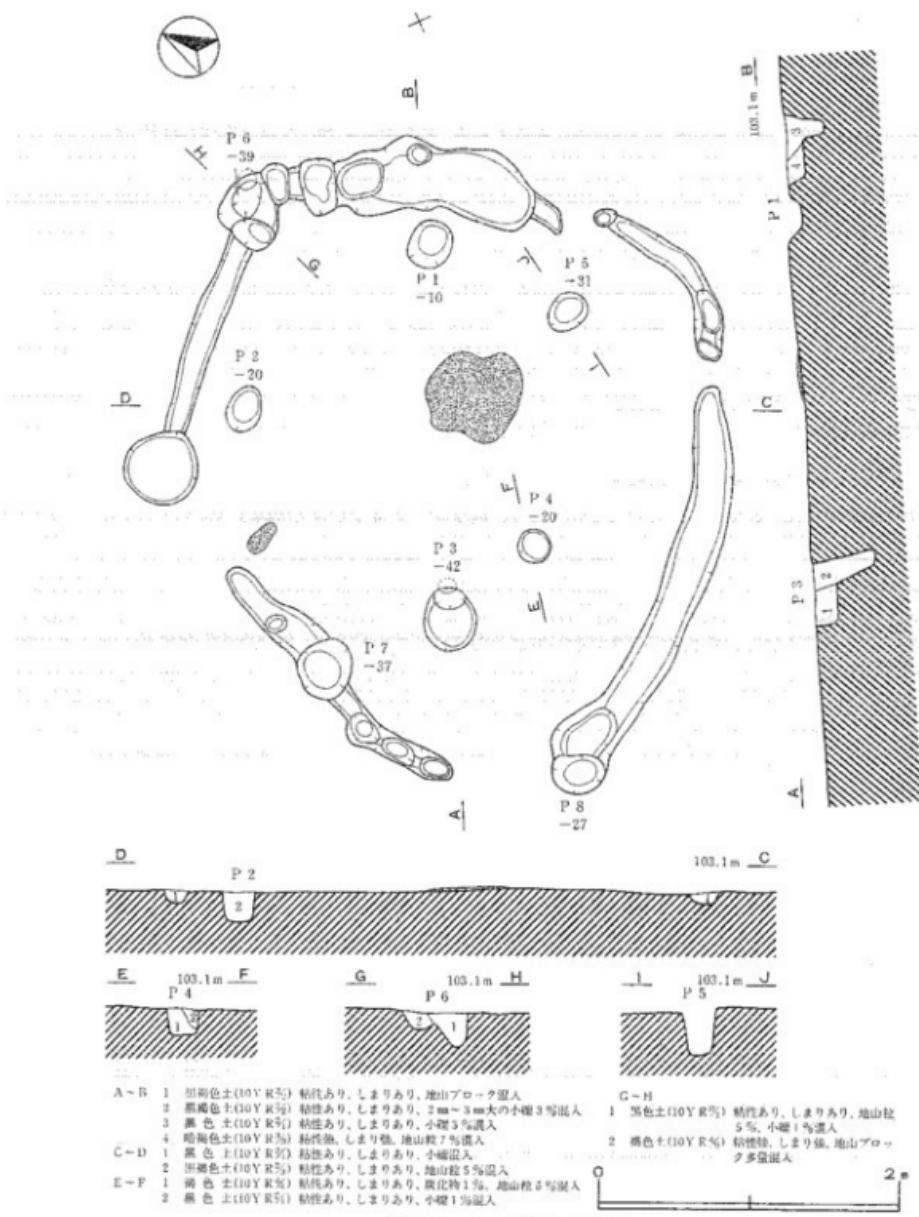
遺物はP1の埋土から繩文土器片（II・III群土器）が出土したが、直接本遺構に伴う出土状況は見られなかった。第27図1・2は深鉢形土器の胴部破片で、1は原体LRを縦位、2は原体RLを斜位に施文されている。3は鉢形土器の口縁部破片で無文地に範状工具による平行沈線が3条施され、その後丁寧なナデ整形が施されている。

S 176 (第6・27図、第2表、図版2・29)

LT・MA52・53グリッドに位置する。確認面はVI層上面で、壁は検出されなかったが、壁溝と地床炉をもつ竪穴住居跡である。平面形は長軸4.6m、短軸3.7mの不整形を呈し、長軸方位はN-35°-Eである。壁溝は南東・北西・南西側で途切れるが、ほぼ全周していたものと思われる。上面幅14cm~30cm、底面幅8cm~22cm、深さ5cm~12cmを測り、底面はほぼ平坦で、径12cm~20cm、深さ17cm~33cmの円形の落ち込みを伴う。埋土は黒褐色土・暗褐色土で地山粒



第5図 S168竪穴住居跡



第6図 S-176縦穴住居跡

を多く混入する。床面は平坦で堅緻であるが、壁溝周辺はやや軟弱である。床面積は12.5m²を測る。炉は中央やや東寄りに位置し、掘り込みや礫を用いない地床炉である。平面形は径60cm～70cmの不整形を呈し、厚いところで床面下3cmまで赤変している。北西隅部で20cm×10cmの焼土を検出したが、炉の機能はなかったと考えられる。柱穴は8本検出した。主柱穴はP 1～5で、他は壁柱穴である。P 1～5は炉を取り囲むように配置され、全体的には北東側に寄っている。規模は径20cm～33cm、深さ10cm～31cmを測り、埋土は黒色土・黒褐色土の單一層で地山粒・小礫を少量混入する。P 6～8も形態・埋土はP 1～5に類似する。

遺物は壁溝・柱穴の埋土から繩文土器片(II・III群土器)が出土した。第27図4は深鉢形土器の胴部破片で縦条体R燃が施されている。5・6は第55図506と同一個体である。5は無文地に入組み状の沈線文が浅目に施され、その後研磨されている。6は推定底径8.0cmで、底面には成形段階のササ葉状圧痕が見られる。

2. 建物跡

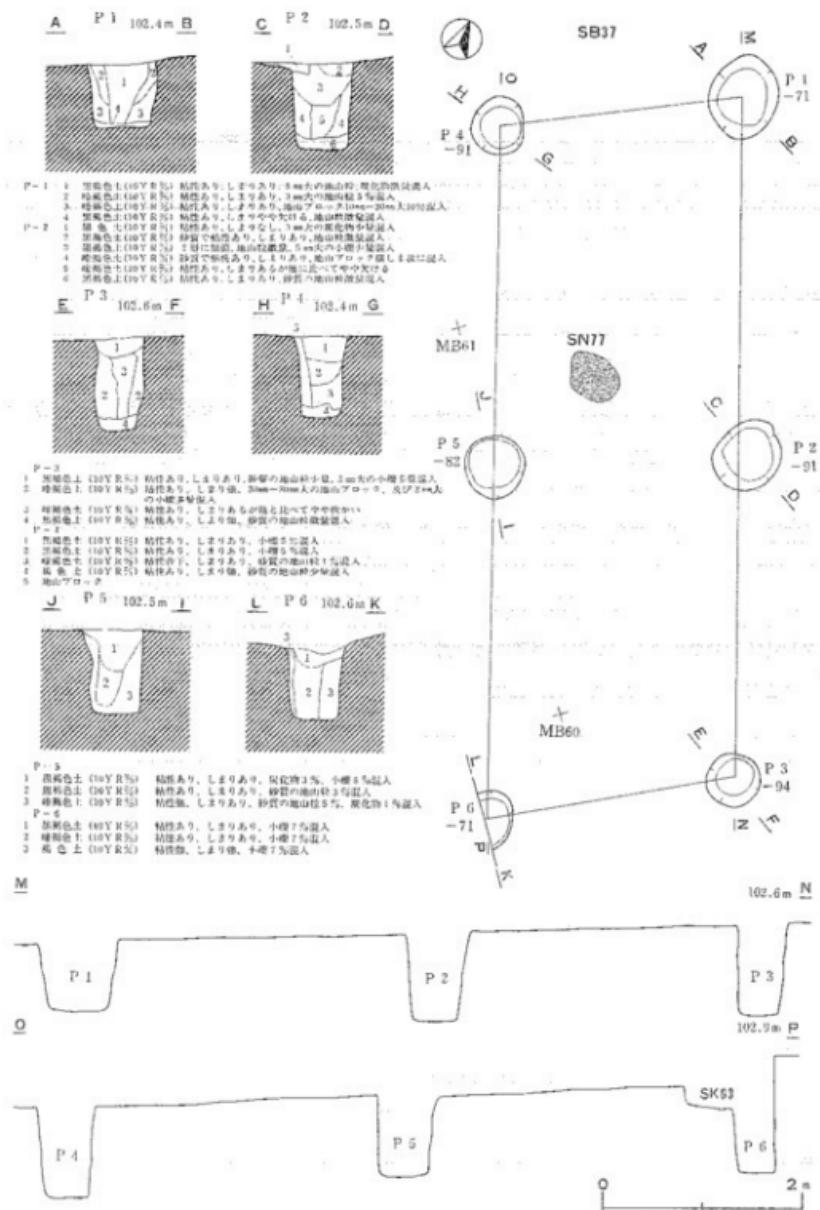
S B37・S N77(第7図、図版3)

調査区北西端、MA・MB59～61グリッドに位置する。1間×2間の建物跡である。P 6はSK63と重複するが本遺構が古い。確認面はVI層上面で、規模は1間(北西)2.50m～2.55m×2間(北東)6.95m～7.05m、長軸方位はN-32°-Wである。6本の柱穴は平面形が径55cm～80cmの略円形を呈し、断面形が深さ71cm～94cmを測る円筒状を呈する。柱穴間の距離はP 1・4とP 3・6間2.55m、P 2・5間2.50m、P 1・2とP 5・6間3.68m、P 2・3間3.27m、P 4・5間3.37mを測り、全体的配置はほぼ平行四辺形を呈する。埋土は3～6層に細分した。埋土の堆積状況から柱痕を看取ることができ、柱痕に相当する部分では黒褐色土・暗褐色土を呈し、他は地山粒・地山ブロックを多く混入する黒褐色土～褐色土を呈する。また、P 6以外の柱痕は掘り方の底面までは達しておらず、標高101.55m～101.47mを測る比高差8cm内の位置にある。平面的には掘り方の中央からズレている。P 2・5間からやや西寄りに径45cm～60cmの略円形を呈する焼土(S N77)を検出した。本遺構に伴う地床炉としての機能を想定できるが、積極的根拠はない。遺物は出土しなかった。

3. 炉跡

S Z02(第8図、図版4)

L S43グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。径20cm～25cm、深さ5cm程円形に浅く掘り込んだ後、縁辺に25cm～30cm大の垂角礫を2個用いて、掘り込みを持たずに「L」字状に立て掘えた石組炉である。礫は加熱により赤変が著しく、火床面は硬化している。埋土は観察できなかったが、礫の底面レベルから構築面はV層上面である。後述するS N03、19、41、53と類似点が多いことから、本遺構東側の擾乱部分に礫を1個配した「コ」の字状を呈する石組



第7圖 SB37建物跡・SN77燒土遺構

炉の可能性が高い。遺物は出土しなかった。

S Z03 (第8図、図版4)

L T42グリッドに位置し、確認面はⅥ層上面である。15cm～26cm大の亜角礫を3個用いて「コ」の字状に立て据えた石組炉である。相面する二辺間は25cmを測り、開口部は南西側を向く。主軸はN-70°-Eである。礫は加熱により赤変し、特に上面から内側10cm程までが著しい。埋土は3層に細分した。黒色土・黒褐色土で焼土粒・焼土ブロックを混入する。火床面は検出できなかったが、埋土の堆積状況からⅤ層上面と考えられる。また、構築面はⅤ層上面からⅣ層下部と思われる。遺物は出土しなかった。

S Z19 (第8・27図、第2表、図版4・29)

MA56グリッドに位置し、確認面はⅦ層上面である。径32cm～40cm、深さ4cm程円形に浅く掘り込んだ後、縁辺に12cm～27cm大の亜角礫を4個用いて、「コ」の字状に立て据えた石組炉である。相面する二辺間は36cm～48cmを測り、やや「ハ」の字を呈する。開口部は南西側にあり、主軸はN-6°-Eである。礫は加熱により赤変が著しく、火床面は硬化している。埋土は5層に細分した。1層はⅣ層に相当し、他は焼土粒・焼土ブロックを混入する暗褐色土を主体とする。遺物は埋土上面から第27図10が出土した。口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、胴部から底部にかけて直線的に移行する粗製の深鉢形土器である。口縁部から胴部にかけて原体L R 単節繩文が縦位回転施文されている。II群土器に相当する。

S Z27 (第8・27図、第2表、図版4・21)

L S60グリッドに位置し、確認面はⅦ層上面であるが、北東側で一部攪乱を受けているため全容は不明である。本遺構は土器埋設炉であるが、土器埋設時の掘り方は看取できなかった。検出時の土器の最大径が約15cmであるため、ほぼその径で掘り込まれたものと考えられる。埋設土器の南西側に径16cm～20cmの不整形を呈する焼土を検出したが、土器を全周する広がりは見られない。焼土を含めて埋土は3層に細分した。2層は焼土粒を少量混入し、締まりが強いことから火床面は2層上面と考えられる。3層は炭化物を多量に含む黒色土である。埋設土器は第27図12であるが、遺存状況が不良であったため底部は復原できなかった。地文に絡条体R燃が縦方向に回転施文され、内面には煤状炭化物が多量に付着している。II群土器に相当する。

S Z41 (第8・27図、第20表、図版4・29)

L T49グリッドに位置し、確認面はⅧ層上面である。20cm～30cm大の亜角礫を3個用いて、「コ」の字状に立て据えた石組炉である。相面する二辺間は24cmを測り、開口部は南西側を向く。主軸はN-23°-Eである。火床面は掘り込みを持たず、焼土が厚い部分で7cm程堆積している。礫は加熱のため著しく赤変し、脆弱なものもある。北東側の1個のみ掘り込みを持つと考えられるが、掘り方を看取することはできなかった。遺物は円盤状石製品（第27図S I）が1点出

土した。

S Z48 (第9・28図、第2表、図版5・21・29)

L S48グリッドに位置し、確認面はV層上面である。長軸61cm、短軸50cmの横円形に深さ7cm～10cm程掘り込んだ後、10cm～40cm大の円礫・亜角礫を掘り込みの縁辺に配置した石囲炉である。長軸方位はN-42°-Eである。底面は緩い起伏があり、加熱による赤変・硬化が著しい。壁は南西側が緩く、北東側はほぼ垂直に立ち上がる。礫は掘り込みを持たずに配置され、やや馬蹄形を呈し、加熱による赤変と脆弱が著しい。埋土は2層に細分した。焼土粒・炭化物を混入する暗褐色土・褐色土で3・4層は底面下の赤変範囲である。遺物は確認面のやや上面から横転し押し潰された一括土器（第28図13）とフレイク8点が出土した。13は折り返し口縁をもつ粗製の深鉢形土器で、4単位の山形突起が付されている。器形は底面から直線的に立ち上がり、同上部で緩くくびれ、口縁部にかけて直線的に外傾する。口縁部から胴上部は無文で、胴下部に原体R L 単節繩文が縦位回転施文されている。また、煤状炭化物が口縁から胴下部にかけて付着している。14は別個体であるが出土地点は同一である。地文に原体R L 単節繩文が施され、棒状工具による太目の曲線文が施文される。II群土器に相当する。

S Z53 (第8・28図、第2表、図版5・29)

L T・MA50グリッドに位置し、確認面はIV層上面である。北西側が後世の擾乱を受けているため全容は不明である。径50cmの略円形に深さ20cm～23cm掘り込んだ後、20cm～38cm大の亜角礫3個を用いて掘り込みの縁辺部に「コ」の字状に立て据えた石組炉である。相面する二辺間は30cm～55cmを測り、やや「ハ」の字状を呈する。開口部は北西側を向き、主軸はN-13°-Wである。礫は加熱により若干赤変している。掘り込みの底面は平坦で、火床面としての痕跡を留めない。壁は直線的に開きながら立ち上がる。埋土は3層に細分した。焼土粒・炭化物を混入する黒褐色土が主体であるが、2層は焼土ブロックを多量に混入する褐色土であることから、3層上面が火床面の可能性が高い。遺物は埋土の1層から繩文土器片とフレイク1点が出土した。第28図15～19が出土遺物で、15以外は同一個体である。15は山形突起をもつ口縁部破片で原体R L 単節繩文が施され、16～18は胴部破片で原体L 横無節繩文が施文されている。19は底部破片で底面が丁寧に研磨され、推定径8.6cmを測る。II群土器に相当する。

S Z62 (第9図、図版5)

L T47グリッドに位置し、確認面はV層上面である。径55cmの円形に深さ15cm程掘り込んだ後、6cm～39cm大の円礫・亜角礫を掘り込みの縁辺に配置した石囲炉である。底面は緩い起伏があり、加熱により赤変している。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、加熱による赤変は見られない。礫は掘り込みをもたずに2cm～3cm間隔で配置されるが、北側では配置されずに開口部を呈する。埋土は3層に細分した。2層は焼土粒を多量に混入する暗褐色土、1・3層は焼土粒

を少量混入する黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

S Z75 (第9図、図版5)

MB49グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。一部調査区外にあたり、また、南東側が後世の擾乱を受けているため全容は不明である。平面形は略円形を呈し、断面形は上鍋状を呈すると思われる。現存する規模は径35cm、深さ8cm～12cmを測る。底面は起伏があり、加熱により赤変・硬化している。赤変範囲は掘り込みの上面にも見られ、10cm～14cm幅で全周すると考えられる。埋土は3層に細分した。1層は炭化物を少量混入する褐色土、2層は焼土で5cmの層厚を測る。3層は混入物の少ない暗褐色土である。掘り込みの北西部縁辺に幅7cm、長さ12cm以上の亜角隕1個を検出したが、SN62に類似する東側に開口部をもつ石闇炉の可能性がある。遺物は出土しなかった。

4. 焼土遺構

S N06 (第4・27図、第2表、図版4・21・29)

MA42グリッドに位置し、確認面はIV層中であるが、後世の擾乱を受けているため全容は不明である。焼土を多量に混入する擾乱土から第27図7～9の繩文土器片（II群土器）が出土した。7は9の口縁部破片で、他に同一個体の口縁部破片が7点出土している。7・9は口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、直線的に底部まで移行する粗製の深鉢形土器である。口縁部から胴部下半まで原体L R 単節繩文を何かに巻き付けて斜方向に回転施文している。胴部下半は横位のナデ整形が施され、底面には網代圧痕が見られる。底径は10.6cmを測る。8は深鉢形土器の胴部破片で地文に原体R L 単節繩文を縦方向に回転施文してから、棒状工具による曲線文が施されている。沈線はやや太く、深く描かれている。

S N22 (第4・27図、第2表、図版4・21)

LS57グリッドに位置し、確認面はIV層中であるが、後世の擾乱を受けているため全容は不明である。焼土ブロックを多量に混入する擾乱土から第27図11の繩文土器片とフレイク4点が出土した。11は胴上部から底部まで復原できたが、口縁部は不明である。胴部から底部にかけて直線的に移行する器形を呈し、胴部最大径23cm、底径9.6cmを測る粗製の深鉢形土器と思われる。地文に絡条体L撓が斜方向に回転施文されている。胴部下半には斜位・横位のナデ整形が施され、底面の中央部に網代圧痕が見られる。II群土器に相当する。

S N57 (第8図、図版5)

LS48グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。北西側がS I 60に切られているため全容は不明である。平面形は不整形を呈し、断面形は浅皿形を呈すると思われる。現存する規模は径47cm～67cm、深さ8cmを測る。埋土は4層に細分した。1層は焼土で、他は焼土粒を少量混入する暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

S N59 (第4・28図、第2表、図版5・29)

L T50グリッドに位置し、確認面はV層上面である。後世の擾乱を受けているため全容は不明である。焼土ブロックを混入する擾乱土から第28図20の縄文土器片が出土した。20は折り返し口縁を呈する深鉢形土器の口縁部破片で、山形突起が付されている。折り返し口縁部は無文で、口縁部下は原体L R单節縄文を地文とし、棒状工具による区画文を描いたのち磨消が施されている。磨消は丁寧に行われておらず、部分的に地文を残している。II群土器に相当する。

S N65 (第4図、図版5)

調査区北西端、MB60グリッドに位置する。大部分が調査区外となっているため全容は不明であるが、調査区外との境界にあたる部分で土層を観察した結果、VI層上面から焼上の堆積が見られた。一部擾乱を受けているが厚い部分で6cmの堆積があり、幅50cmを測る。遺物は出土しなかった。

S N78 (第4図)

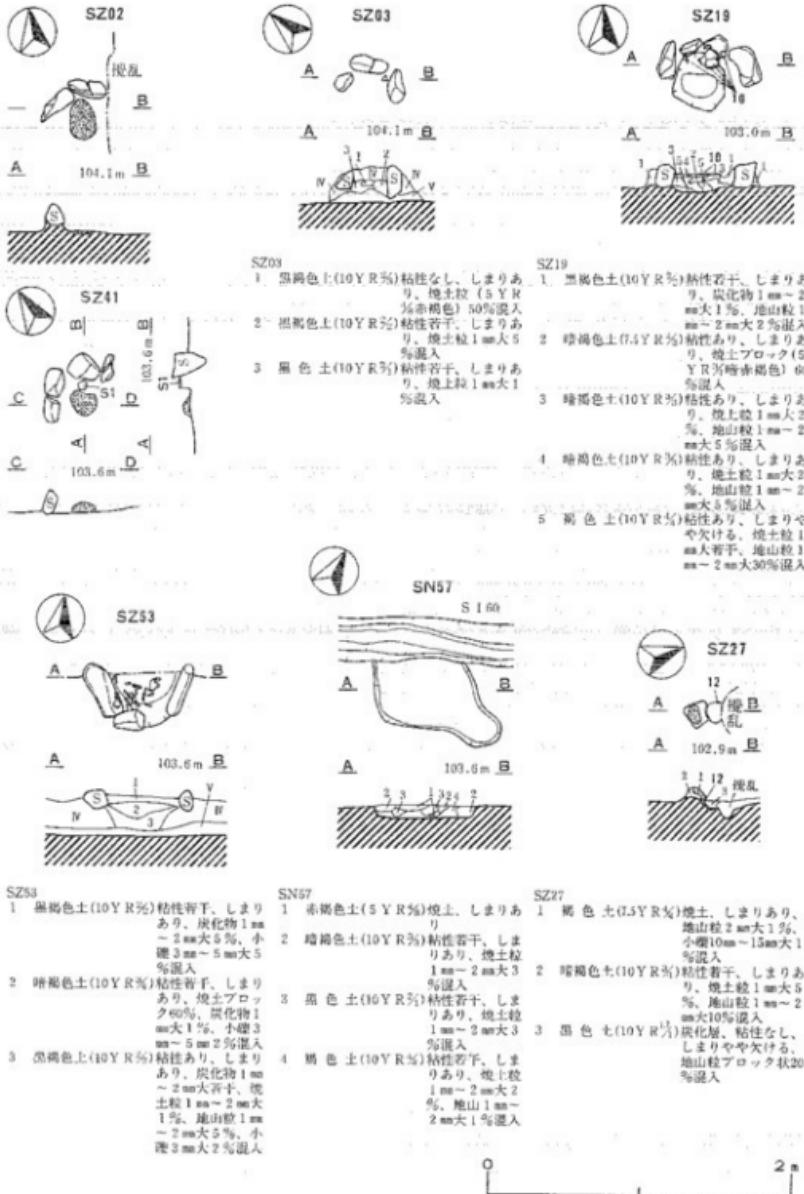
MA58グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。平面形は径40cm~50cmの略円形を呈し、焼土の堆積は厚い部分で2cmを測る。遺物は出土しなかった。

5. 土器埋設遺構**S R05 (第9・28図、第2表、図版7・21)**

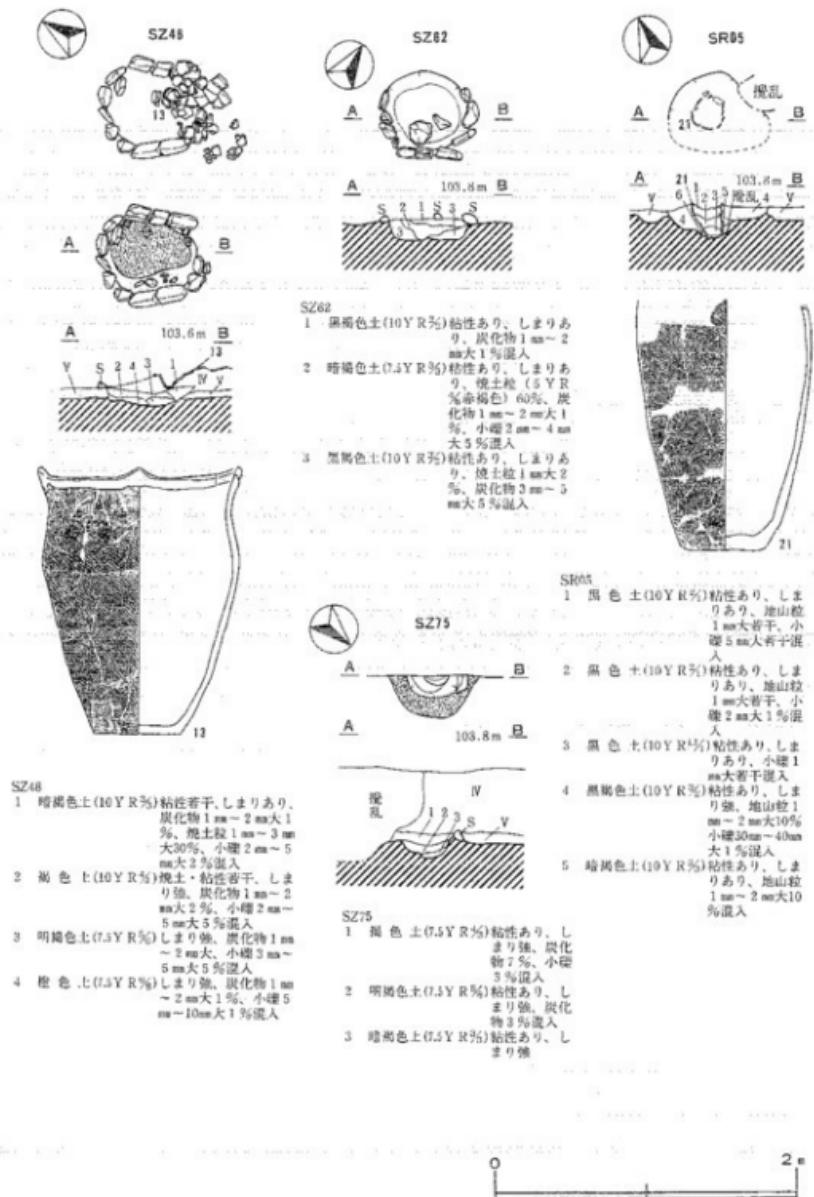
L T44グリッドに位置し、確認面はV層上面である。東側の一部は擾乱を受けているが、掘り方の平面形は不整円形を呈すると思われる。規模は径55cm~66cm、深さ9cm~22cmを測り、土器を据える部分が径22cmのピット状に凹んでいる。壁は緩く立ち上がり、底面は起伏がある。土器は確認時で径20cm~22cmを測り、底部が掘り方底面に接する正位に据えられている。復原後の現存高が32.3cmあるため本遺構の構築面は確認面から少なくとも10cm程上面のIV層中と考えられる。埋土は5層に細分した。土器外周の4・5層は地山粒・小礫を混入し、締まりがかなりある。第28図21が復原した土器である。口縁部形態は不明であるが、胴上部に緩いふくらみをもつ粗製の深鉢形土器である。縄軸絡条体R燃が斜方向から施文され、軸の原体はL R单節縄文である。胴下部は横位のナデ整形、底面は研磨が施されている。II群土器に相当する。

6. フラスコ状土坑**S K F42 (第10・28・29図、第2・20表、図版6・21・29・30)**

MA・MB58グリッドに位置し、確認面はV層上面である。平面形は円形を呈し、底面から頸部まではふくらみをもち、頸部からほぼ直線的に坑口部へ移行するフラスコ状土坑である。規模は坑口部径93cm、頸部径88cm、坑底部径90cm、最大幅110cm、深さ80cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は起伏がある。埋土は4層に細分した。黒色土・黒褐色土を主体とし、層厚のある4層は地山ブロックを多量に混入する。他は炭化物を少量混入し、埋土の堆積状況から人為堆



第8図 SZ炉跡(1)・SN焼土遺構(1)



第9図 S Z 炉跡(2)・S R 土器埋設遺構

積を呈する。遺物は4層から繩文土器片、石器、フレイクが出土した。第28・29図22~33は大部分がII群土器に相当するが、24~26の3点のみ胎土に纖維を含むI群土器である。第29図S2はスクレイバーである。

S K F 44 (第10・29図、第2・3表、図版6・30)

L S54グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。平面形は円形を呈し、底面から頸部までは緩くふくらみをもち、頸部からやや外反しながら坑口部へ移行するフラスコ状土坑である。規模は坑口部径95cm~103cm、頸部径98cm、坑底部径105cm~110cm、最大幅110cm、深さ50cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は北西側で緩い起伏がある。埋土は5層に細分した。5層は擾乱で、他は埋土の堆積状況から自然堆積を呈する。遺物は繩文土器片・フレイクが埋土上層から多く出土した。第29図34~40で、II群土器に相当する。

S K F 67 (第10図、図版6)

MA・MB57グリッドに位置し、確認面はV層上面である。南西側が一部調査区外にかかっているため全容は不明である。平面形は円形を呈し、底面から頸部までは直線的に内傾し、頸部からほぼ垂直に坑口部へ移行するフラスコ状土坑である。規模は口坑部・頸部径107cm、坑底部径120cm、深さ40cm~45cmを測り、最大幅は底面にある。底面は緩い起伏があり、壁は北東側に起伏がある。埋土は4層に細分した。黒色土を主体とし、全体的に混入物は少ない。埋土の堆積状況から自然堆積を呈する。遺物は出土しなかった。

7. 土坑

S K 01 (第10図、図版7)

L T40グリッドに位置し、SK17の北側に隣接している。確認面はVI層上面である。径50cmの円形を呈し、深さ10cm~18cmを測る。底面は北西部に凹みがあり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は3層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は出土しなかった。

S K 04 (第10・29図、第3・20表、図版7・21・30)

L T40グリッドに位置し、確認面はIV層下部である。径75cm~80cmの円形を呈し、深さ23cmを測る。底面は中央にある最大深部に向かって緩く傾斜する。壁は緩い弧状を呈して立ち上がる。埋土は5層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は埋土から繩文土器片、フレイク、凹石が出土した(第29図42~49・S 3)。また、第29図41は確認面の東側で一括出土した粗製の深鉢形土器である。II群土器に相当する。

S K 07 (第10図、図版7)

L T39グリッドに位置し、確認面はV層上面である。径60cmの略円形を呈し、深さ20cm~24cmを測る。底面は起伏があり、北部に径18cm、深さ5cmの凹みがある。壁は南西側で緩く立ち上がり、他はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は3層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は出土

しなかったが、埋土上層で13cm～25cm大の円疊・亜角疊3個を検出した。

SK08 (第10図、図版7)

L S43グリッドに位置し、確認面はV層上面である。長軸45cm、短軸30cmの橢円形を呈し、深さ12cmを測る。長軸方位はN-37°-Wである。底面は平坦であるが南部で狭まる傾向にある。壁は東側で緩く、他はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は自然堆積を呈するが、3層は掘り過ぎに相当する。遺物は出土しなかった。

SK09 (第10図、図版7)

L T42グリッドに位置し、SK10の北東側に隣接している。確認面はVI層上面である。長軸65cm、短軸48cmの橢円形を呈し、深さ37cmを測る。長軸方位はN-11°-Eである。底面は緩い起伏があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は3層に細分でき、堆積状況は柱穴状を呈する。遺物は出土しなかった。

SK10 (第10図、図版7)

L T42グリッドに位置し、SK09の南西側に隣接している。確認面はVI層上面である。長軸78cm、短軸52cmの橢円形を呈し、深さ15cm～22cmを測る。長軸方位はN-11°-Eである。底面は、中央にある最大深部に向って傾斜する。壁は北東側で垂直に立ち上がり、他は緩い弧状を呈する。埋土は3層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土上層から3cm～18cm大の円疊・亜角疊を検出した。

SK11 (第11図、図版7)

L S43グリッドに位置し、確認面はV層上面である。北東側が調査区外にかかっているため全容は不明である。現存する形態から径80cmの不整形を呈し、深さ21cm～28cmを測る。底面は南東側から北西側に緩く傾斜し、最大深部は北西壁下にある。西側に径15cm～29cm大、深さ6cm～14cmを測るピット状の凹みがある。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は3層に細分でき自然堆積を呈する。遺物は出土しなかった。

SK12 (第11図・30図、第3表、図版8・30)

L S40グリッドに位置し、SK13の東側に隣接している。確認面はVI層上面であるが、埋土の堆積状況から構築面はV層上面まで捉えられた。北東側が調査区外にかかっているため全容は不明である。現存する形態から南東-北西に長軸をもつ橢円形を呈すると思われる。長軸2m、深さ30cmを測り、底面はかなり起伏がある。壁は南東側でほぼ垂直に、他は緩く立ち上がる。北西部に径42cm、深さ55cmのピットを検出したが、埋土の堆積状況から本遺構より古いピットである。埋土はピットも含めて4層に細分でき、人為堆積を呈する。埋土1層から5cm～28cm大の円疊・亜角疊が多量に、また、繩文土器片、フレイクが少量出土した(第30図50・51)。50は深鉢形土器の腹部破片、51は円盤状土製品で、いずれもII群土器に相当する。

S K13 (第11・30図、第3表、図版8・30)

L S 40・41グリッドに位置し、S K12の西側に隣接している。確認面はVI層上面である。径73cmの円形を呈し、深さ6cm～8cmを測る。底面は平坦で、ほぼ中央に径20cm×25cm、深さ7cmの凹みがある。壁は西側で垂直に、他は緩く立ち上がる。埋土は3層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は埋土から第30図52～54のII群土器が出土した。54はS K14出土土器との接合資料である。

S K14 (第11・30図、第3表、図版8・30)

L S・L T 37グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。長軸72cm、短軸57cmの橢円形を呈し、深さ10cm～13cmを測る。長軸方位はN-83°-Eである。底面は中央に向かって緩く傾斜し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は3層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は第30図54が埋土から出土した。

S K15 (第11図、図版8)

L S 39グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。北西側が攪乱を受けているため全容は不明である。現存する形態から径1.0m～1.2mの略円形を呈し、深さ40cmを測る。底面は弧状を呈し、最大深部は北部にある。壁は底面の形状からそのまま移行するが、北側では垂直に立ち上がる。埋土は4層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は出土しなかったが、底面中央部の最下層から10cm大の亜角礫を2個検出した。

S K16 (第11図、図版8)

L S 43グリッドに位置し、S K08の西側に近接している。確認面はVI層上面である。長軸85cm、短軸70cmの橢円形を呈し、深さ10cm～18cmを測る。長軸方位はN-11°-Wである。底面は緩い起伏があり、南部に最大深部をもつ。壁は北側で垂直に立ち上がり、南側では緩い弧状を呈する。埋土は3層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は埋土から繩文土器片1点が出土したが、遺存状態が不良であったため図示できなかった。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通、無文土器と思われる。

S K17 (第10図、図版7)

L T 40グリッドに位置し、S K01の南側に隣接している。確認面はVI層上面である。径52cmの円形を呈し、深さ8cm～14cmを測る。底面は西北部分で緩く凹んでいる。壁は南側で垂直に立ち上がり、北側では緩い弧状を呈する。埋土は2層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は出土しなかった。

S K20 (第12・30図、第3表、図版8・31)

MA55・56グリッドに位置し、確認面はV層上面である。長軸56cm、短軸40cmの橢円形を呈し、深さ9cmを測る。長軸方位はN-5°-Wである。底面は平坦で、壁は緩く立ち上がる。埋

土は黒褐色土の単1層で焼土粒を少量混入する。遺物は確認面の北西部から同一個体の繩文土器片が出土した(第30図55~58)。II群土器に相当する。

S K21 (第12・30図、第3表、図版8・31)

MA55グリッドに位置し、確認面はV層上面である。長軸90cm、短軸75cmの梢円形を呈し、深さ10cm~29cmを測る。長軸方位はN-41°-Eである。底面は起伏が著しく、南東にある最大深部に向かって傾斜する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は4層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は北西側底面から繩文土器片2点が出土した。第30図59は2点の接合資料で、折り返し口縁をもつ粗製の深鉢形土器である。II群土器に相当する。

S K23 (第11・30・31図、第3・4・20表、図版8・21・31・32)

L S58・59グリッドに位置し、確認面はV層上面である。径1.8m~2.0mの円形を呈し、深さ38cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩い弧状に立ち上がるが、南西側では起伏が見られる。底面のはば中央と西壁直下で、それぞれ径38cm・30cm、深さ13cm・18cmの円形を呈するピットを検出した。西壁直下のピットは埋土の堆積状況から本遺構より古いか、中央のピットは不明である。埋土は7層に細分した。5~7層は西壁側のピットの埋土で自然堆積を呈し、他は遺物を多量に含む、人為的堆積を呈する。遺物は埋土の1層・2層上部から繩文土器片・弥生土器片・石器・フレイクが出土した(第30・31図60~76、S 4・5)。また、5cm~30cm大の亜角礫も多量に含まれていた。75がIV群土器で、他はII・III群土器に相当する。

S K24 (第11・31図、第4表、図版9・21)

MA55グリッドに位置し、確認面はV層上面である。径45cmの円形を呈し、深さ5cm~12cmを測る。底面は起伏が著しく、北側に向かって緩く傾斜する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北西側は緩い起伏がある。埋土は4層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は確認面よりやや高いレベルで第31図77の一括土器が出土した。口縁部形態は不明であるが、粗製の深鉢形土器で地文に原体R L単節繩文が施されている。II群土器に相当する。埋土及び遺物の出土状況から構築面は少なくともIV層中と考えられる。

S K25 (第12・31図、第4表、図版9・21・32)

L T59グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。径82cmの円形を呈し、深さ12cm~19cmを測る。底面は起伏が著しく、西壁直下に最大深部がある。壁は垂直に立ち上がる。埋土は2層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は確認面の南東部で第31図79が出土した。また埋土1層から繩文土器片(78)とフレイクが数点出土し、II群土器に相当する。

S K26 (第12図、図版9)

L T59グリッドに位置し、SK25の西側に近接している。確認面はVI層上面である。長軸81cm、短軸56cmの梢円形を呈し、深さ23cm~27cmを測る。長軸方位はN-74°-Wである。底面は

起伏が著しく、北東側から南西側に緩く傾斜する。壁は南西側で垂直に立ち上がり、他は若干外反する。埋土は4層に細分でき、人為堆積を呈する。遺物は出土しなかつたが、北東壁南東寄りに並行する位置で、長さ45cm、幅15cmの角碟1個検出した。レベル的にIV層中であること、また、埋土の堆積状況から構築面は少なくともIV層中と考えられる。

SK29 (第12・31図、第4表、図版9・21)

調査区南西端、MA61グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。径1m～1.1mの円形を呈し、深さ20cm～32cmを測る。底面は緩い起伏があり、南側から北側へ傾斜する。壁は緩く外反し、東側で弧状を呈する。埋土は3層に細分でき、人為堆積を呈する。遺物は北東壁寄りから完形に近い壺形土器1個体が出土した(第31図80)。出土状況は口縁側が壁に向くやや横倒しの状況を呈し、底面からは9cm程浮いている。III群土器に相当する。

SK30 (第12・31図、第4表、図版9・32)

L S57グリッドに位置し、確認面はV層上面である。長軸140cm、短軸95cmの橢円形を呈し、深さ20cm～34cmを測る。長軸方位はN-73°-Wである。底面は中央に向かって傾斜するが、西側からの傾斜角が大きい。壁は南西側で垂直に立ち上がり、他は緩く外傾する。埋土は4層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は埋土の2層中からII群土器に相当する縄文土器片(第31図81～86)とフレイク数点が出土した。

SK31 (第13図、図版9)

MA55グリッドに位置し、確認面はV層上面である。長軸1.47m、短軸1.07mの橢円形を呈し、深さ26cm～32cmを測る。長軸方位はN-58°-Eである。底面は北西側に片寄り、起伏が著しい。壁はほぼ垂直に立ち上がる。南西隅部で径30cm、深さ10cmの円形を呈するビットを検出した。埋土の堆積状況から本遺構が新しい。埋土は5層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は埋土の1層から縄文土器片とフレイクが数点出土した。図示できなかつたがII群土器に相当する。

SK35 (第12図、図版9)

L T57・58グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。長軸91cm、短軸70cmの橢円形を呈し、深さ5cm～12cmを測る。長軸方位N-52°-Wである。底面は起伏が著しく、北西側に最大深部がある。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に細分でき、人為堆積を呈する。遺物は出土しなかつたが、確認面・埋土から5cm～40cm大の亜角碟を多数検出した。

SK36 (第12・32図、第4表、図版9・21・32)

MA58グリッドに位置し、北東側のSK39・40と隣接する。確認面はVI層上面である。径85cm～95cmの略円形を呈し、深さ11cm～45cmを測る。底面は中央部に向かって緩く傾斜し、径50cm～60cmの凹みに移行する。凹みの底面は起伏が著しい。壁は凹みの底面から垂直に立ち上が

った後、開口部に向かって大きく開く。埋土は4層に細分でき、人為堆積を呈する。遺物は埋土1層から縄文土器片・フレイクが多数出土した(第32図87~93)。すべてII群土器に相当する。

S K38 (第13・32図、第4表、図版10・21・22・32)

L S 45・46グリッドに位置し、確認面はV層上面である。径1.1mの円形を呈し、深さ11cm~25cmを測る。東側は若干張り出しているが、埋土の堆積状況から壁の崩壊と考えられる。底面は中央に向って起伏をもちらながら傾斜する。最大深部は中央やや南寄りにある。壁は南側から南西側にかけて垂直に立ち上がり、他は緩く外傾する。埋土は2層に細分でき、人為堆積を呈する。遺物は埋土1層から縄文土器片・フレイクが多数出土した(第32図94~104)。また、3cm~16cm大の円礫・亜角礫も多く含まれ、遺物は中央から南西側にかけて分布する。II群土器に相当する。

S K39 (第12図、図版10)

MA58グリッドに位置し、S K36の北西側、S K40の南東側に隣接する。確認面はVI層上面である。径47cm~52cmの略円形を呈し、深さ12cmを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は3層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は出土しなかった。

S K40 (第12・32図、第4表、図版10・32)

MA58グリッドに位置し、北東側のS K36・39と隣接する。確認面はVI層上面である。長軸58cm、短軸47cmの横円形を呈し、深さ13cm~17cmを測る。長軸方位はN-45°-Eである。底面は緩い起伏があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は3層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は埋土2層から第32図105の胴部破片1点が出土した。胎土に纖維を含み、原体L R Lの複節縄文が施文されている。

S K54 (第13図、図版10)

L S 51グリッドに位置し、南側のS K55に隣接している。確認面はV層上面である。長軸90cm、短軸75cmの横円形を呈し、深さ12cm~15cmを測る。長軸方位はN-5°-Wである。底面は南側に向かって緩く傾斜し、径55cm、深さ26cmを測るピット状の凹みに移行する。壁は全般に緩く外反するが、門みの北壁は垂直に立ち上がったのち弧状を呈しながら開いている。埋土は5層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は出土しなかった。

S K55 (第13図、図版10)

L S 51グリッドに位置し、北側のS K54に隣接している。確認面はV層上面である。長軸1.3m、短軸85cmの横円形を呈し、深さ18cm~22cmを測る。長軸方位はN-82°-Wである。底面は緩い起伏があり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は出土しなかった。

S K58 (第4・33図、第4表、図版5・10・22)

L T50グリッドに位置し、南側のS K59に隣接している。確認面はV層上面であるが後世の擾乱を受けていたため全容は不明である。擾乱土から第33図111が出土した。口縁部形態は不明であるが、地文に縦条体R捺が施された胴上部にくびれをもつ粗製の深鉢形土器である。II群土器に相当する。

SK63 (第13図、図版10)

MB59グリッドに位置し、確認面はV層上面である。南西側が調査区外であるため全容は不明である。現存する規模は最大径2.4m、深さ10cm～30cmを測り、平面形は不整円形を呈するとと思われる。底面は中央に向かって傾斜し、南東側は起伏が著しい。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面中央部南西寄りでS B37のP 6と重複するが埋土の堆積状況から本遺構が新しい。埋土は暗褐色土の單一層である。遺物は埋土から繩文土器片1点が出土した。図示できなかったが縦条体L捺を施した深鉢形土器の胴部破片で、II群土器に相当する。

SK64 (第13図、図版10)

MB60グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。S B37のP 5・6間を結ぶ線上にあり、P 5に隣接しているが、新旧関係は不明である。長軸98cm、短軸80cmの楕円形を呈し、深さ12cm～20cmを測る。長軸方位はN-52°-Wである。底面は中央に向って緩く傾斜し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は埋土1層からフレイク2点が出土した。

SK66 (第13図、図版10)

調査区北西端、MB61グリッドに位置し、確認面はV層上面である。南西側が調査区外であるため全容は不明である。現存する形態から径105cm、深さ22cmの円形を呈すると思われる。底面はほぼ平坦、壁は垂直に立ち上がる。埋土は2層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は出土しなかった。

SK69 (第14・32・33図、第4表、図版11・22・33)

L T49グリッドに位置する。S I 61の北側壁溝に切られているため全容は不明である。確認面はS I 61の床面V層上面である。径80cm～85cmの円形を呈し、深さ7cm～10cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩く外傾する。底面北西側にはS I 61の壁溝が残存し、本遺構底面との比高差は2cm～4cmを測る。埋土は2層に細分でき、人為堆積を呈する。遺物は確認面・埋土から繩文土器片3個体が出土した(第32・33図106～110)。遺物出土状況から北側の破壊を受けた部分にも広がりがあった可能性が高い。106～110はII群土器に相当する。

SK70 (第14・33図、第4・5表、図版11・33)

調査区北西端、L S 61グリッドに位置し、確認面はV層上面である。北東側が調査区外であるため全容は不明である。現存する規模は最大径1.6m、深さ8cm～17cmを測り、平面形は円形

を呈すると思われる。底面は起伏が著しく、中央に最大深部がある。壁は開口部に向かって直線的に開く。埋土は6層に細分でき、人為堆積を呈する。また、埋土の堆積状況から本遺構は少なくともⅣ層中で構築されたと考えられる。遺物は埋土5層の最下層から縄文土器片・フレイクが出土した。また、5層上面の2・3層からは15cm大以上の亜角礫石を4個検出した。第33図112・113は同一個体で、深鉢形土器の胴部破片である。114は異個体であるが、同器種の胴部破片である。II群土器に相当する。

S K71 (第14図、図版11)

MA46グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。径80cmの不整円形を呈し、深さ56cmを測る。底面は丸底を呈し、壁は北東側でオーバーハング、南西側で緩く外傾し、確認面下12cm～20cmの位置から開口部に向かって強く外反する。埋土は2層に細分でき、自然堆積を呈する。遺物は出土しなかった。

S K72 (第14図、図版11)

MA60グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。S B37のプラン内南東部に位置するが、新旧関係は不明である。長軸85cm、短軸58cmの楕円形を呈し、深さ20cm～32cmを測る。主軸はN-31°-Wである。底面は南東部で丸底状に凹み、最大深部となる。壁は緩く外傾する。埋土は6層に細分でき、人為堆積を呈する。遺物は図示できなかったが、埋土から縄文土器片（II群土器相当）、フレイクが出土した。

S K73 (第14図、図版11)

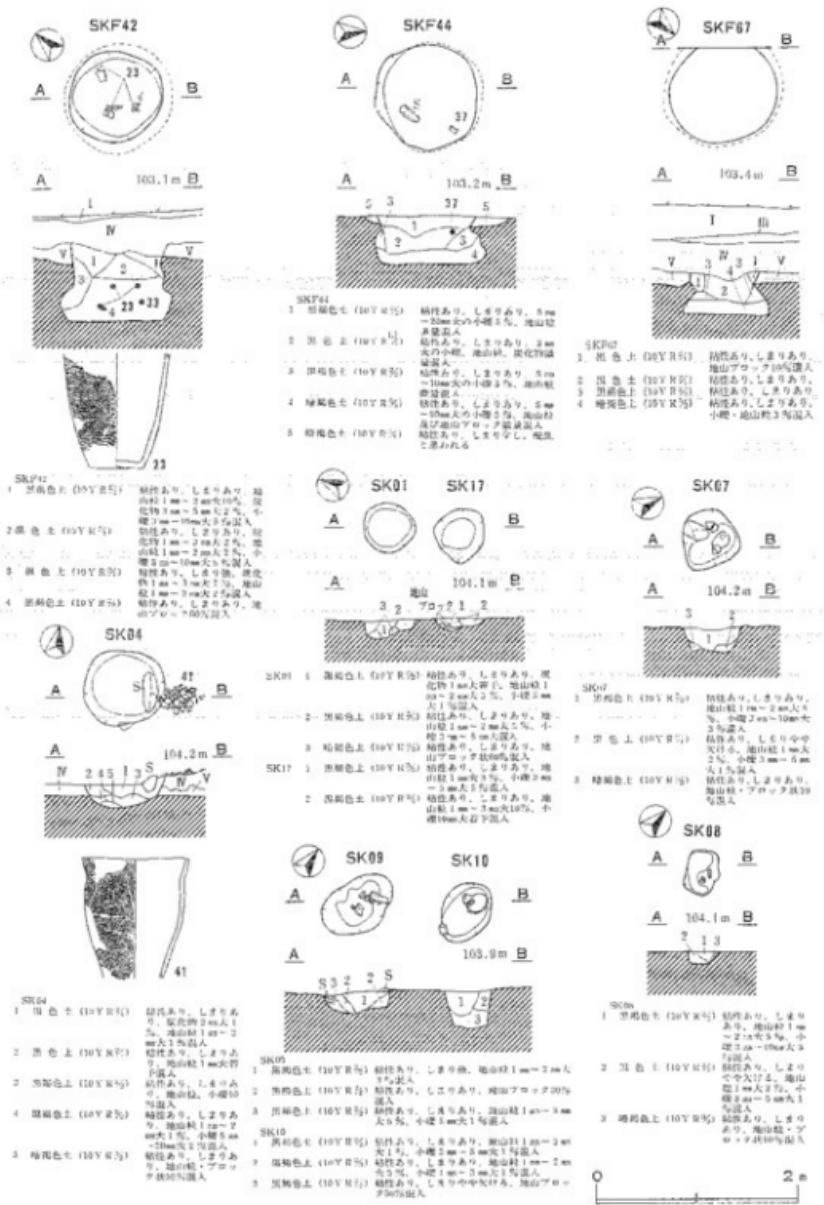
MA59グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。長軸65cm、短軸42cm～58cmの不整橭円形を呈し、深さ12cmを測る。長軸方位はN-21°-Eである。底面は平坦で、壁は緩く外傾する。埋土は自然堆積を呈し、3層に細分したが1・3層は同じと考えられる。遺物は出土しなかった。

S K74 (第14図、図版11)

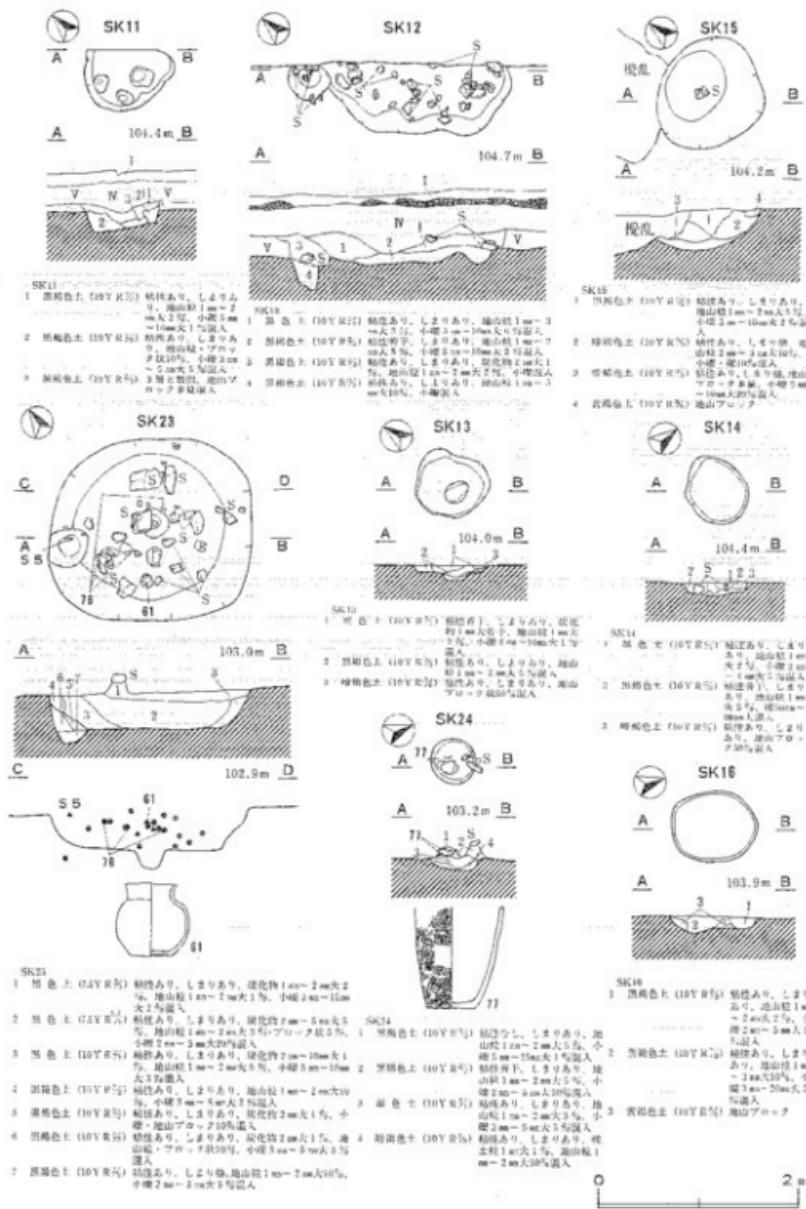
L T57グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。径52cm～56cmの略円形を呈し、深さ3cm～10cmを測る。底面は緩い起伏があり、南西側の最大深部に向かって傾斜する。壁は緩い起伏をもちながら外傾する。埋土は黒色土の單一層である。遺物は出土しなかった。

S K79 (第14・33図、第5・20表、図版11・33)

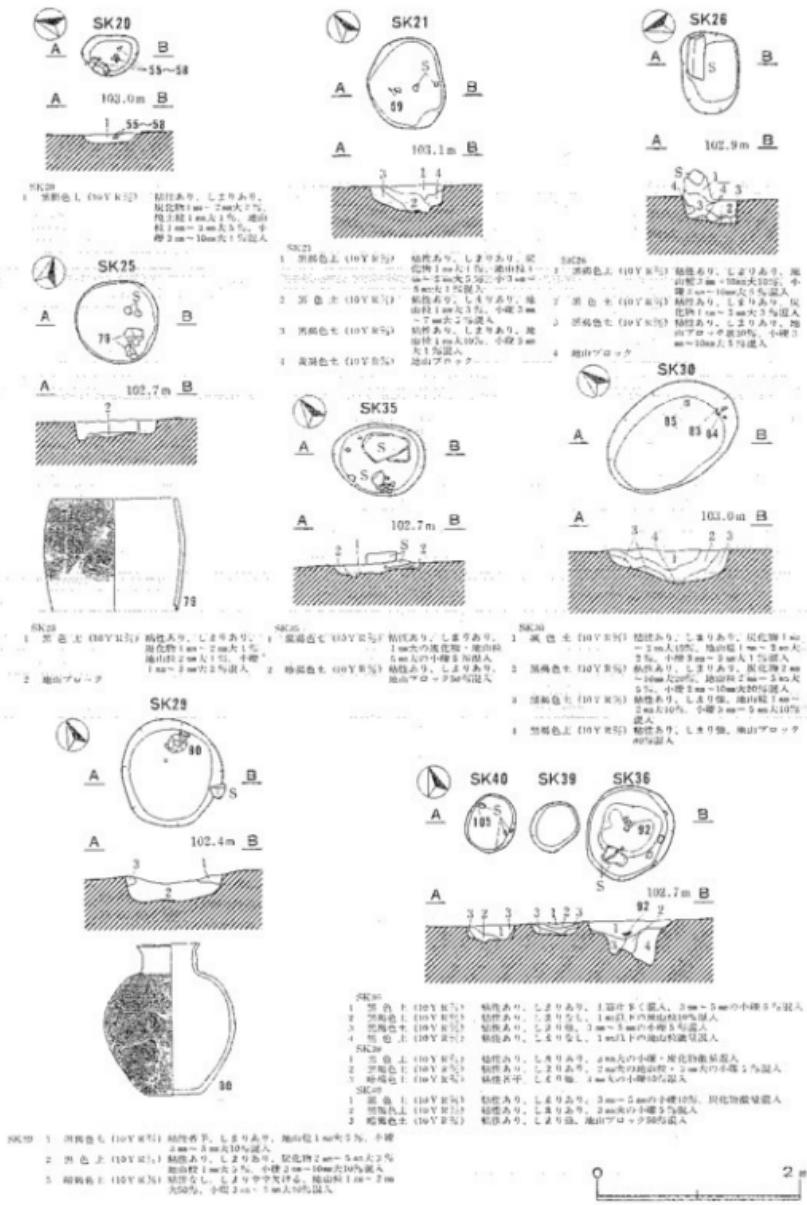
MA48グリッドに位置し、S I 61石囲炉の西側に隣接している。確認面はS I 61の床面で、V層上面に相当する。径1.5mの略円形を呈し、深さ18cmを測る。底面は緩い起伏があり、壁は緩く外傾する。底面中央で径18cm～22cmの略円形を呈するベンガラを検出した。底面からは3cm程度浮いている。埋土は2層に細分したが、1層はS I 61の埋土である。2層は炭化物・小礫を混入し、締まりがかなり強い人為堆積を呈する。遺物は埋土2層から縄文土器片と石器4点



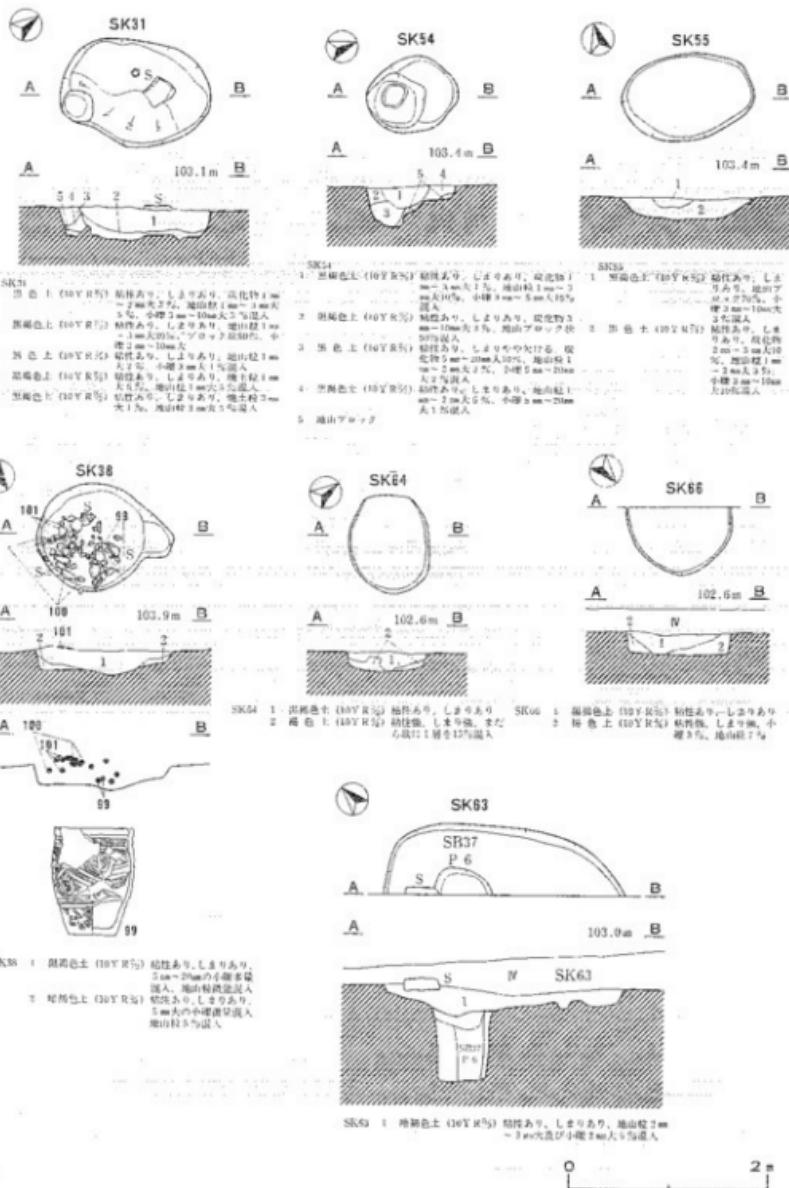
第10図 SKF フラスコ状土坑・SK土坑(1)



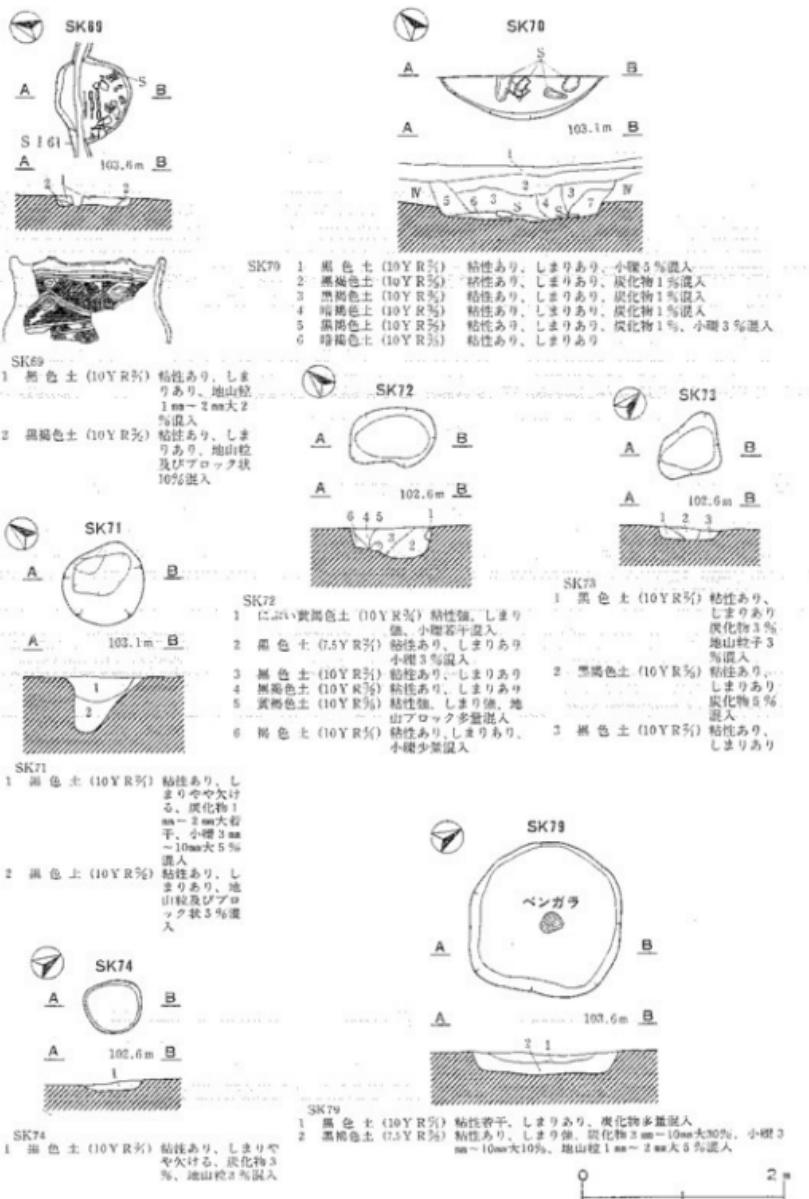
第11図 SK土坑(2)



第12図 SK土坑(3)



第13圖 S六土坑(4)



第14図 SK土坑(5)

が出土した（第33図115～117、S 6～S 9）。II群土器に相当する。

第2節 弥生時代の遺構と遺物

1. 壁穴住居跡

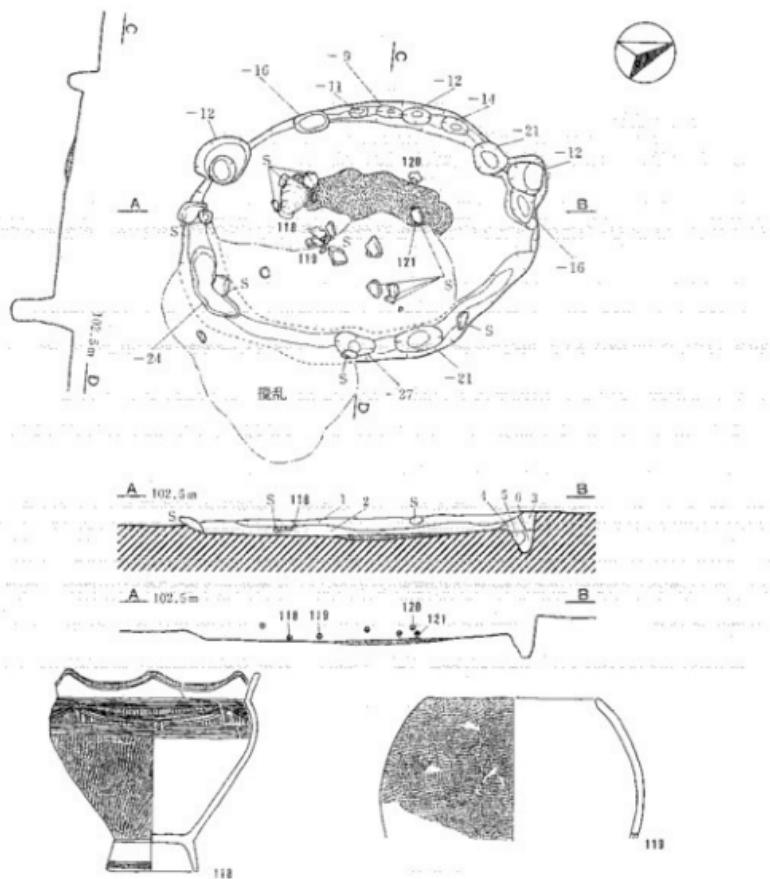
S 128（第15・34図、第5表、図版12・22・34）

調査区北西端L T60グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。南東側が後世の攢乱を受けているため全容は不明であるが、平面形は横円形を呈し、壁溝・壁柱穴・地床炉を有する壁穴住居跡である。規模は長軸2.3m、短軸1.7m、推定床面積2.3m²を測り、長軸方位はN 16° - Eである。壁高は10cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁直下には上面幅9cm～18cm、底面幅3cm～10cm、深さ6cm～21cmを測る溝が巡るが、北東側と南西側で一部途切れている。床面は平坦で堅緻である。床面のほぼ中央部に地床炉が設けられ、長軸1m、短軸32cmの長横円形を呈し、床面下3cm程まで赤変・硬化している。柱穴は壁溝内に穿たれ、全部で12本検出した。径10cm～30cmの円形・楕円形を呈し、深さ9cm～27cmを測る。埋土は6層に細分でき、自然堆積を呈する。3～6層は壁柱穴の埋土である。黒色土・黒褐色土を主体とし、炭化物、焼土粒を混入する。特に壁溝・壁柱穴の埋土に顕著であったことから本遺構は焼失家屋の可能性が高い。その場合、住居の規模に比べて形態がやや大きいと思われる地床炉の一部は、焼失の痕跡と考えられる。

遺物は第34図118～121の他に埋土から繩文土器片（II群土器）、フレイクが出土した。120以外は炉周辺の床面から出土し、横転し、押し潰された状況を呈する。118は二次焼成の痕跡が著しい台付鉢である。120がII群土器、他はIV群土器に相当する。

S 133（第16・34図、第5・20表、図版13・14・22・34）

調査区中央L S52・53グリッドに位置し、確認面はIV層上面である。北東側の約半分が調査区外にかかっているため全容は不明であるが、平面形は円形を呈し、北西壁下に土器埋設遺構を有する壁穴住居跡である。本遺構はIV層上面でIII層（十和田a火山灰）の半円状を呈するプランを検出したため、その存在を予想することができた。現存する規模は長径6.9m、短径3.0m、壁高30cm～40cmを測る。壁は緩い弧状を呈し、特に南西側は著しい。床面は緩い起伏をもちらながら中央に向かって傾斜し、最大深部で確認面から55cmを測る。柱穴は全部で4本検出した。径33cm～45cmの円形を呈し、深さ11cm～59cmを測る。P 1・2とP 3・4がそれぞれ形態が類似し、主柱穴はP 1・2、他は支柱穴である。P 2は径36cm、深さ26cmを測るピット状の凹みと重複するが、埋土の堆積状況からP 2が新しい。埋土はP 3を含めて8層に細分した。自然堆積を呈し、1～3層は基本層序のI～III層に相当する。4層以下は黒色土・黒褐色土を



S 128

- 1 黒褐色土 (10Y R 5%) 粘性若干、しまりあり、炭化物 1mm~5mm 大 5%、地山粒 1mm~2mm 大 10%、小礫 5mm~20mm 大 5% 混入
 2 黒色土 (10Y R 5%) 粘性若干、しまりあり、炭化物 10mm~30mm 大 10%、地山粒 1mm~2mm 大 5%、焼土粒 1mm 大 2%、小礫 3mm~5mm 大 3% 混入
 3 黒褐色土 (10Y R 5%) 粘性若干、しまりあり、炭化物 3mm 大 1%、地山粒 1mm~2mm 大 10% 混入
 4 黒褐色土 (10Y R 5%) 粘性若干、しまりあり、焼土粒 3mm 大 2%、地山粒 2mm 大 3% 混入
 5 黒褐色土 (10Y R 5%) 粘性若干、しまりあり、炭化物・焼土粒 30% 混入
 6 黒褐色土 (10Y R 5%) 粘性若干、しまり欠ける、焼土粒 2mm 大 10%、炭化物 1mm 大 5%、地山粒 3mm 大 10% 混入



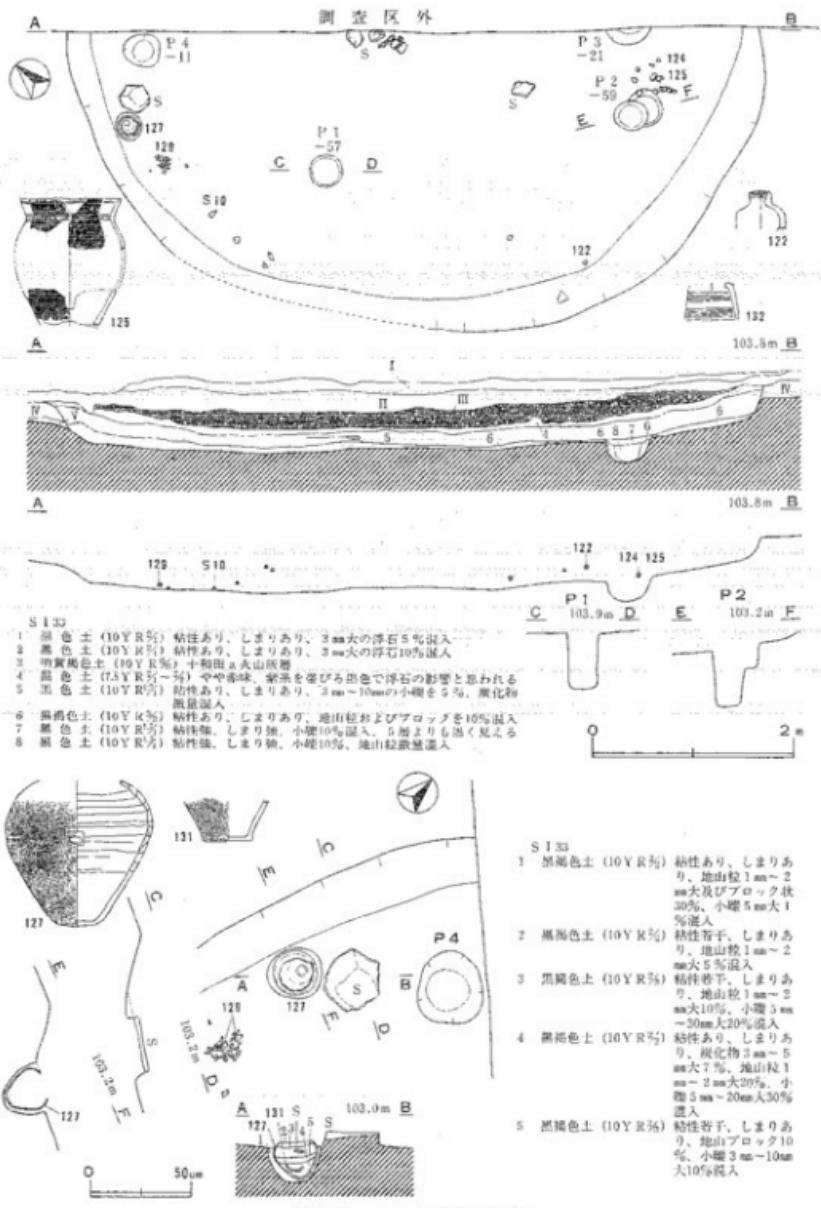
第15図 S 128 壺穴住居跡

主体とするが、床面直上の6層は堆積状況から掘り方の痕跡を留めたものと考えられる。また、埋土の観察から本遺構はIV層上面で構築され、VI層（地山）を10cm～30cm程掘り下げていることが窺える。付属施設として炉は検出しなかったが、北西壁下に土器埋設遺構を検出した。平面形は径25cm～28cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。埋設土器は口頸部を欠損する菱形土器で底部は丸底を呈し、掘り方底面からは2cm程浮いている。土器の北東側に隣接して径30cm、厚さ1.5cm～4cmの亜角跡1点を検出した。跡の底面と埋設土器の上面のレベルが一致すること、両者の形態・検出状況などから礫は蓋の機能を果していたと考えられる。埋設土器の埋土は黒褐色土で自然堆積を呈し、最下層から變形あるいは深鉢形土器の底部破片が出土した。

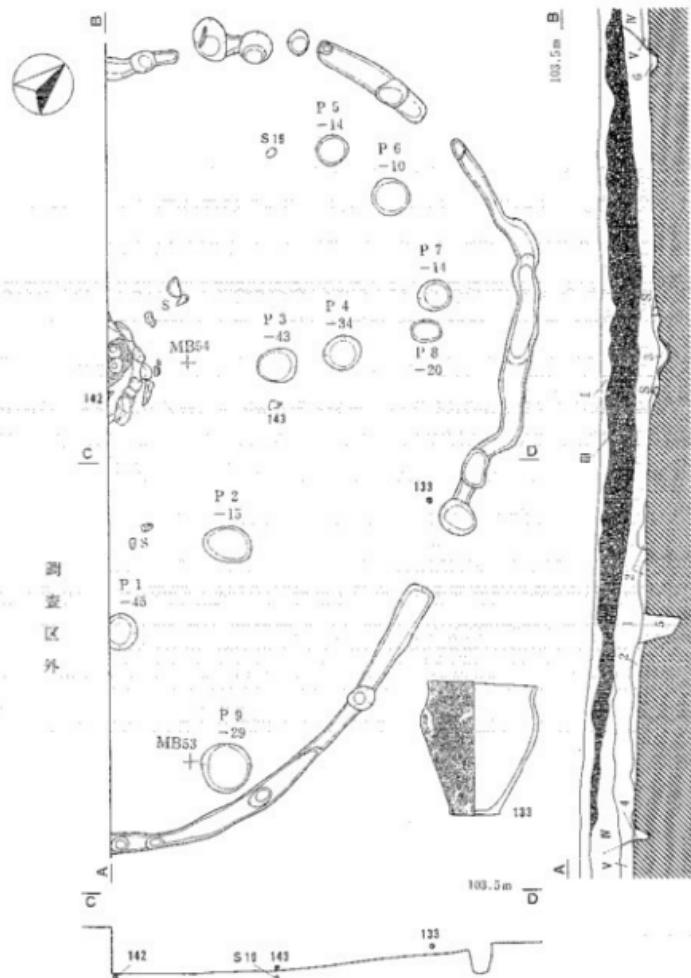
遺物は埋土及び床面から織文土器片（II群土器）、弥生土器片（IV群土器）、石器、フレイク、チップが出土した（第34図122～132、S 10・11）。122、124、125、129、S 10は床面、127は埋設土器、131は127の埋土から出土している。また、埋設土器の南側で出土した129の周辺にはフレイク・チップが155点散在していた。遺物は全般的に壁際から柱穴までの床面および埋土から出土した。

S I 34（第17・35図、第5・20表、図版13・14・22・34）

調査区中央MA・MB52～54グリッドに位置し、S I 33の西側5.5mに近接している。南西側の約半分が調査区外にかかっているため全容は不明であるが、平面形は稍円形を呈し、壁溝と石圍炉を有する堅穴住居跡である。S I 33と同様、IV層上面でIII層の半円状を呈するプランを検出したため、その存在を予想することはできたが、明瞭な形態を把握することが困難であったためVI層上面まで掘り下げて精査を行った。現存する規模は長径7.9m、短径4.3m、壁高13cm～26cmを測り、推定長軸方位はN-90°-Wである。壁は南東側で緩く外傾し、北西側ではかなり緩く立ち上がる。壁直下には上面幅13cm～28cm、底面幅5cm～21cm、深さ5cm～16cmを測る溝が巡るが、北西側から北東側にかけて部分的に途切れる。底面及び途切れる部分には径12cm～36cm、深さ6cm～28cmを測る円形の落ち込みを伴う。床面はほぼ平坦であるが、中央に向かって緩く傾斜し、特に東側・南東側からの傾斜が著しい。柱穴は全部で9本検出した。径30cm～50cmの円形を呈し、深さ10cm～45cmを測る。主柱穴はP 1・3で、他は支柱穴であるが、P 9は埋土の堆積状況から本遺構より古いピットである。本遺構の最大深部である床面中央やや西寄りに石围炉が付設されている。現存する形態から径1.0m、深さ6cm～16cmの円形を呈する掘り込みの縁辺に16cm～27cm大の亜角跡を配置した石围炉である。底面中央部は径28cmの丸底状に凹み、加熱のため赤変、硬化している。また礫も赤変が著しく脆弱である。埋土は石围炉も含めて6層に細分した。自然堆積を呈する黑色土・黒褐色土であるが床面直上の2層はS I 33の6層と同様、掘り方の痕跡を留めたものと考えられる。埋土の観察から本遺構はIV層上面・IV層上部で構築され、VI層（地山）を10cm程掘り下げていることが窺える。



第16圖 S I 33豎穴性居跡



S I 34

- 1 黒色土 (10Y R 11) 粘性あり、しまりあり、3mm大の炭化物少々、3mm大の小礫少量、地山較少量混入
- 2 黒褐色土 (10Y R 5) 粘性あり、しまりあり、5mm大の地山粒及びブロックを多量、炭化物を微量混入
- 3 黑褐色土 (10Y R 5) 粘性有り、しまりあり、暗褐色 (7.5Y R 5) 焙土粒 1mm~2mm大10%、炭化物 1mm~2mm大 1%、小礫 2mm~5mm大 2%混入
- 4 黑褐色土 (10Y R 5) 粘性あり、しまりあり、地山較 3%混入
- 5 黑褐色土 (10Y R 5) 粘性あり、しまりやや欠ける、地山較 7%、小礫 3%混入
- 6 黑褐色土 (10Y R 5) 粘性あり、しまりあり、地山較 5%、小礫 3%混入



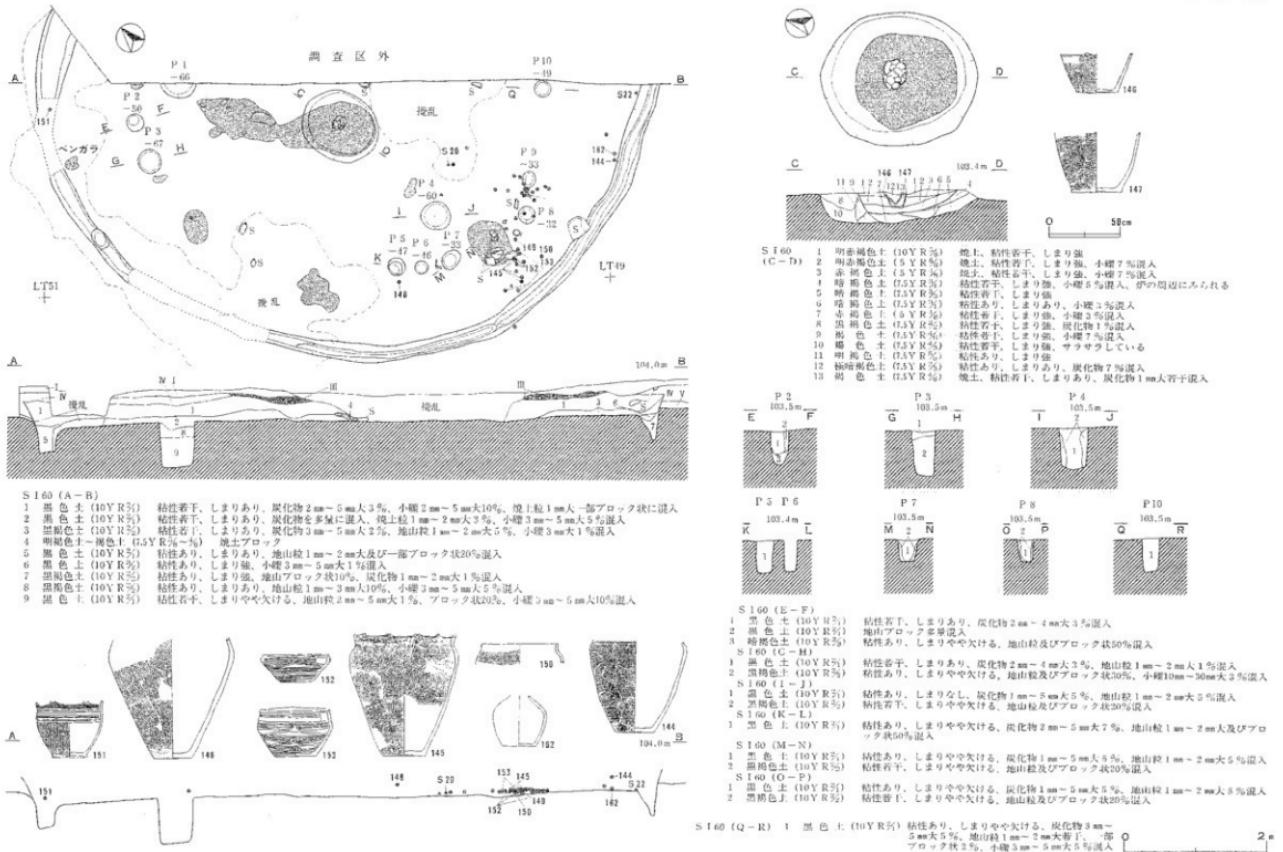
第17図 S I 34 穴住居跡

遺物は埋土及び床面から繩文土器片（II群土器）、弥生土器片（IV群土器）、石器、フレイクが出土した（第35図、134～143、S 12～19）。特にフレイクの出土が多く62点を数える。133は完形の卵形土器で、北東壁際に横転し、若干押し潰された出土状況を呈する。133、143、S 19は床面、他は埋土から出土している。

S 160（第18・35～37図、第5・6・20表、図版15・22・23・35）

調査区中央L S 48～50、L T 49・50グリッドに位置し、S 133の南東側4.8m、S 161の北側1.4mに近接している。確認面は北西側でV層上面、南東側でVI層上面である。北東側の約半分が調査区外にかかり、また、西壁側と中央南部が後世の擾乱を受けているため全容は不明であるが、平面形は不整橢円形を呈し、壁溝と土器埋設炉を有する竪穴住居跡である。また、埋土及び床面上から焼土・炭化物を多量に検出したことから焼失家屋と判断した。現存する規模は長径8.8m、短径4.0m、壁高30cm～38cmを測り、推定長軸方位はN-32°-Wである。壁は緩く外傾し、直下に上面幅20cm～30cm、底面幅5cm～10cm、深さ23cm～32cmを測る溝が巡る。断面形は漏斗状を呈し、底面は起伏が著しく、極端に狭くなる部分がある。西壁部分が擾乱を受けているため不明ではあるが、西壁やや南寄りの部分では、床面から深さ5cmと一段高くなっている。埋め戻しは行われておらず、構築時にすでに設計されていたと考えられる。床面はほぼ平坦であり、焼失のため部分的に赤変・硬化している。特に炉の周辺は顕著で、炭化物・焼土が厚く堆積していた。柱穴は全部で10本検出した。径20cm～50cmの円形を呈し、深さ32cm～66cmを測る。主柱穴はP 1・4で、他は支柱穴であり、主柱の外側に数本の支柱を配置する構造が窺える。埋土はP 1・基本層を含めて12層に細分でき、自然堆積を呈する。黒色土・黒褐色土を主体とし、1～3は炭化物・焼上粒・焼土ブロックを多量に混入する。壁溝及び柱穴の埋土は、炭化物を混入するものの焼土の混入は少なく全般的に締まりがない。また、埋土の観察から本遺構はIV層上部で構築され、VI層（地山）を10cm程掘り下げていることが窺える。床面中央やや南西寄りで土器埋設炉を検出した。構造は径94cm～110cm、深さ15cm～22cmの略円形に床面を掘り下げ、地山粒を混入した暗褐色土を充填する。その後、径65cm～72cm、深さ14cmの略円形に再度掘り下げ、中央から北寄りに土器を立て据え、地山土を充填する。土器は壊か深鉢の底部から胴下半部まで、底面からは10cm浮いている。埋土は13層に細分した。2・3層が地山土の充填層で、赤変・硬化が著しい。4～11層は暗褐色土の充填層で、全般的ににぶい色調を呈し、加熱の影響があまり着取できない。1・12・13層は焼失時の痕跡を留める堆積土である。

遺物は埋土・床面から弥生土器片、石器（IV群土器）、フレイクが多数出土した（第35～37図、144～161、S 20～22）。大部分は床面に横転し、押し潰された状況を呈し、特に南壁側P 7～9付近に集中する（145、149、150、152、153、162）。また、この部分の床面直上の2層中から炭



第18図 S I 60堅穴住居跡

化葉が数箇出土している。147は炉の埋設土器で、146は147に半ば埋まる状況で出土している。144・148は床面から18cm程浮いているため、本遺構焼失後に流入したものと考えられる。151・162は北西壁溝内から出土したが、攪乱部分であるため、原位置から動いている可能性がある。また、北西壁側で径15cmを測るベンガラを検出したが、攪乱を受けているため遺存状況は極めて不良であった。

S I 61 (第19・38~41図、第6・7・20表、図版16・17・23~25・35) ………………

調査区中央LT・MA47~49、MB47・48グリッドに位置し、S I 60の南側1.4mに隣接している。確認面は北東側がVI層上面、他はV層上面である。南西側が後世の攪乱を受けており、一部調査区外にあたるため全容は不明であるが、現存する形態から一回建て替えが行われ、また、床面から焼土・焼土ブロック・炭化物を多量に検出したことから、最終的に焼失した竪穴住居跡である。以下、形態・規模について二時期に分けて記述する。

1期 壁構が北東部で内側を巡り、P 9・10・2を径由し、P 11・3の外側を通る不整構円形を呈する。長軸7.5m、短軸6.3mを測り、長軸方位N-26°-Wである。推定床面積36m²である。壁溝は北東から北西にかけて残存し、部分的に5cm~20cmの幅で途切れる。南側では検出できなかったが、ほぼ全周すると考えられる。現存する規模は上面幅13cm~20cm、底面幅7cm~16cm、深さ6cm~10cmを測る。柱穴はP 3・5・6・11の4本柱で、径25cm~42cmの円形を呈し、深さ26cm~51cmを測る。P 5・11は壁際に、P 3・6は壁際から50cm~90cm内側に穿たれ、台形状の配置を呈する。

2期 壁構が北部で1期と共有し、北東から南北方向に拡張した不整構円形を呈する。長軸8.5m、短軸7.4mを測り、長軸方向はN-17°-Eである。推定床面積50m²である。壁溝は西側が攪乱のため不明であるが、部分的に途切れながら、ほぼ全周すると考えられる。現存では1期との共有部分と東部で途切れ、特に東部では幅50cmの間隔がある。上面幅13cm~23cm、底面幅5cm~13cm、深さ8cm~17cmを測る。柱穴はP 1~4の4本柱で、径27cm~45cmの円形を呈し、深さ33cm~52cmを測る。壁際から2.6m~3.4m内に穿たれ、台形状の配置を呈する。柱穴の配置形態は1期と同様であるが、西に90度回転させた配置を呈し、拡張にもかかわらず、規模は若干縮小している。基本土層用トレンチで肢期の堆土と礫を観察できた。堆土は基本層を含めて5層に細分でき、炭化物を多量に混入する自然堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は23cmを測る。堆上の観察から構築面はIV層上面・IV層上部で、床面はV層上面であることが窺える。

1・2期とも北東部分はVI層上面(地山)、他はV層上面が床面で、中央に向かってわずかに傾斜する。中央からやや北東寄りで焼土・炭化物を多量に検出した。その部分では床面の赤変・硬化が著しく、特に炉の周辺は顕著である。炉は2基検出し、中央やや北東寄りに石門炉、

その北西側2.2mに土器埋設炉が付設されている。両者の構築時期が1・2期どちらに帰属するかは不明であるが、遺存状況から少なくとも2期には2基のが存在していたと考えられる。石皿炉は径68cm~75cm、深さ12cm~17cmの円形に床面を掘り下げて構築し、掘り込みの縁辺に13cm~21cm大の亜角礫を配置している。礫は全周せず、北西側で開口を呈するが、抜き取りの痕跡は見られない。甕は緩い弧状を呈し、底面は起伏がある。加熱による赤変・硬化が著しく、赤変は底面下5cm程まで達している。埋土は5層に細分した。4層は焼土で厚いところで5cmの堆積がある。1~3層は焼失時の堆積土で、焼土ブロック（3層）・炭化物（1・2層）である。土器埋設炉の構造はS I 60と類似する。径90cm、深さ10cm~15cmの略円形に床面を掘り下げ、黒色土を充填する。その後、径45cm~55cm、深さ16cmの略円形に再度掘り込み、中央部に土器を立て据え、地山土を充填する。土器は甕か深鉢の底部から胴下半部まで、底部は底面から5cm浮いている。埋土は5層に細分した。5層は黒色土の充填層で、2・4は地山土の充填層である。2・4層は加熱による赤変・硬化が著しいが、5層は加熱の影響が看取できない。1・3層及び5層上面の焼土・炭化物は、焼失時の堆積土である。

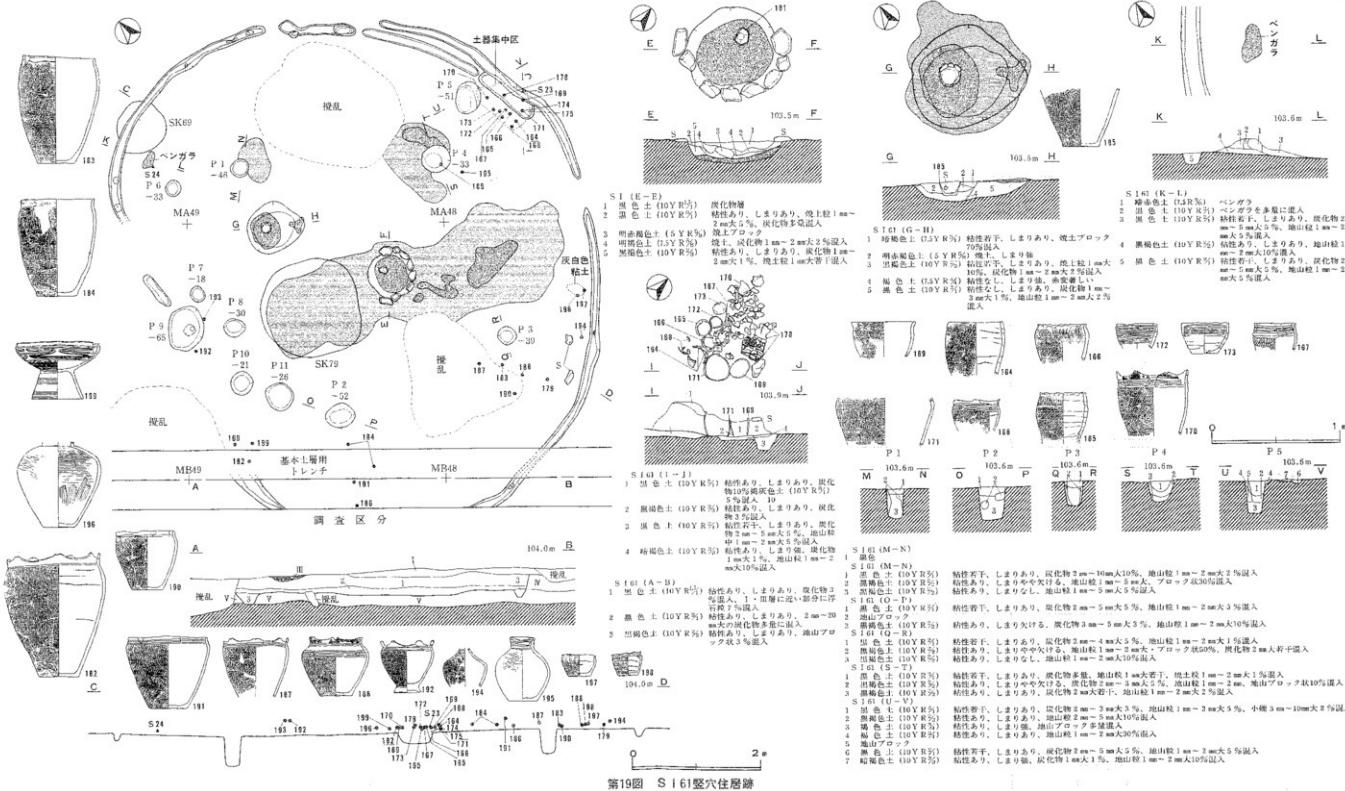
遺物は埋土、床面から繩文土器片（II群土器）、弥生土器片（IV群土器）、石器、フレイクが多数出土した（第38~41図）。特に南部から南西部の壁際から1.8m内の床面で、復原可能なもの土器が出土している（179・182~184、186~190、195~199）。大部分は床面に横転し、押し潰された状況を呈し、焼土・炭化物を混入する黒色土に覆われていた。197・198は南東壁際の床面から出土したミニチュア土器で、周辺及び土器内には灰白色粘質土が充填され、P 3南西側から出土した遺物周辺には、炭化栗が数個散在していた。また、P 6の北壁側床面では、幅15cm×30cm、厚さ8cmを測るベンガラを検出したが、この検出状況はS I 60に類似するものである。出土土器の中で、特異な状況を呈する一群がある。東部の1期壁溝及びP 5・2期壁溝に若干またがる状況で、成形・胎土・焼成が共通する土器13個体が出土した（第38図164~178）。1個体（173）以外は全て底部を欠損し、床面に正位・倒位し、わずかに3個体（176~178）のみ押し潰された状況で、炭化物・焼土・黒灰状粒子を混入する黒色土に覆われていた。住居跡検出時にはすでに床面に達しており、詳細な分析を行なえる状況ではなかったが、出土位置・埋土の状況から、調査時には本遺構（焼失時）に伴う土器群と判断した。一方、他の出土土器に比べて焼失時の遺存状況が良好であること、底部を故意に欠損した可能性があること、粗製・半精製土器であるが、土器本来の機能を果した痕跡が見られないことを考慮すれば、本遺構焼失後、東部壁際に意識的に安置した可能性も考えられる。

2. 焼土遺構

S N45（第20図、図版18）

L T53グリッドに位置し、確認面はIV層中である。径29cm~32cmの円形を呈し、掘り込みを

第2節 弥生時代の遺構と遺物



もない。焼土は厚いところで3cmを測り、焼土下は焼土粒を少量混入する暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

S N46 (第20・42図、第20表、図版25)

MA52グリッドに位置し、確認面はⅣ層上面である。後世の攪乱を受けているため全容は全く不明である。焼土ブロック・炭化物を多量に混入する擾乱土から弥生土器片が多く出土し、また、パンガラが付着している石頭を2点出土した(第42図S 25・26)。

S N47 (第20・42図、第7表、図版18・25)

L T・MA51・52グリッドに位置し、確認面はⅣ層中である。東側がS I 32に切られているため全容は不明である。現存する形態は径55cm～70cmの不整形を呈し、掘り込みをもたない。焼土は厚いところで10cmを測る。遺物は焼土下及び周辺の炭化物を多量に混入する黒褐色土から復原可能な弥生土器3個体が出土した。第42図206～208は押し潰された出土状況を呈し、炭化物、炭化栗が周辺に散在していた。

S N52 (第20・42・43図、第7表、図版18・25・36)

L T・MA52グリッドに位置し、S N47の北西側に近接している。確認面はⅣ層中である。径45cm～56cmの不整形を呈し、掘り込みをもたない。焼土は厚いところで5cmの堆積を測り、焼土下は炭化物を多量に混入する黒色土である。炭化物は周辺でも多く検出している。遺物は弥生土器片の他に、復原可能な弥生土器2個体が出土した(第42・43図209～212)。本遺構の北西側に隣接し、横軸して押し潰された出土状況を呈する。また、口縁部付近から炭化栗を数個検出した。

S N56 (第20・43図、第7表、図版18・36・58)

L T52グリッドに位置し、S N47の北側に隣接している。確認面はⅣ層中で、径30cmの不整形を呈し、掘り込みをもたない。焼土は3cmの堆積で、焼土下から炭化栗を多数検出した。遺物は第43図213が炭化栗と一緒に出土し、S N47の206とは同一個体である。

上記の焼土遺構はS I 34の東側、径8.0m内に分布し、検出状況に類似点が多い。また、復原可能な弥生土器が周辺から多く出土している。遺構外出土土器として扱ったⅣ群土器の中にも本遺構群に近接する位置から同様な出土状況を呈するものが含まれている(516・530・531・604・606・627・658・662)。この焼土群と遺物を一連の関係とするならば、前述のS I 60・61の床面で検出した焼土及び出土遺物に共通し、焼土群は焼失時の痕跡と考えられる。仮に住居跡と想定した場合、基本土層用トレンチで、本遺構の床面・壁溝・柱穴と考えられる土層堆積が採取できる。遺構外出土土器として扱ったⅣ群土器を含めた遺物は、床面と想定するレベルにはほぼ一致し、分布域は南東側から南西側に集中する傾向が窺える。また、西側に隣接するS I 34とは重複関係を持つと考えられ、土層堆積の観察からは、本遺構が古いと判断される。炉・壁

溝・柱穴は不明であるが、床面（確認面）からVI層一地山面まで掘り下げた時点（浅い部分で15cm～20cmを測る）で痕跡を留めないことから、特に柱穴は浅い掘り方を呈したものと考えられる。このような焼土群の検出状況及び遺物の出土状況から、上記の想定が許されるならば、焼失した住居跡の可能性を強く示唆するものとして捉えられる。

3. 集石

S Q43（第21・43図、第20表、図版18・25）

L S・L T51グリッドに位置する。S I 33とS I 60のほぼ中間にあり、確認面はIV層上面である。13cm～33cm大の亜角礫10個が径1.85mを測る緩い弧状に立てて捉えられ、西側に開口している。周辺に4個の礫が散在しているが、本遺構に伴うものかは不明である。弧の内側で径50cm、深さ2cm～10cmを測る不整形の落ち込みを検出したが、埋土の堆積状況から自然的凹みと判断した。遺物は出土しなかったが、集石に石皿が1点含まれていた（第43図S 27）。

S Q49（第21・43図、第7表、図版18・25・36）

L S 48グリッドに位置し、S I 60の南東側に近接している。確認面はIV層上面からIV層上部である。北東側が調査区外にかかっているため全容は不明であるが、5cm～50cm大以上の円礫・亜角礫が径1.8m内に密集している。遺物は繩文土器片（II群土器）、フレイクが数点、礫と同レベルで出土した（第43図214～216）。

S Q50（第21・43図、第7・20表、図版18・36）

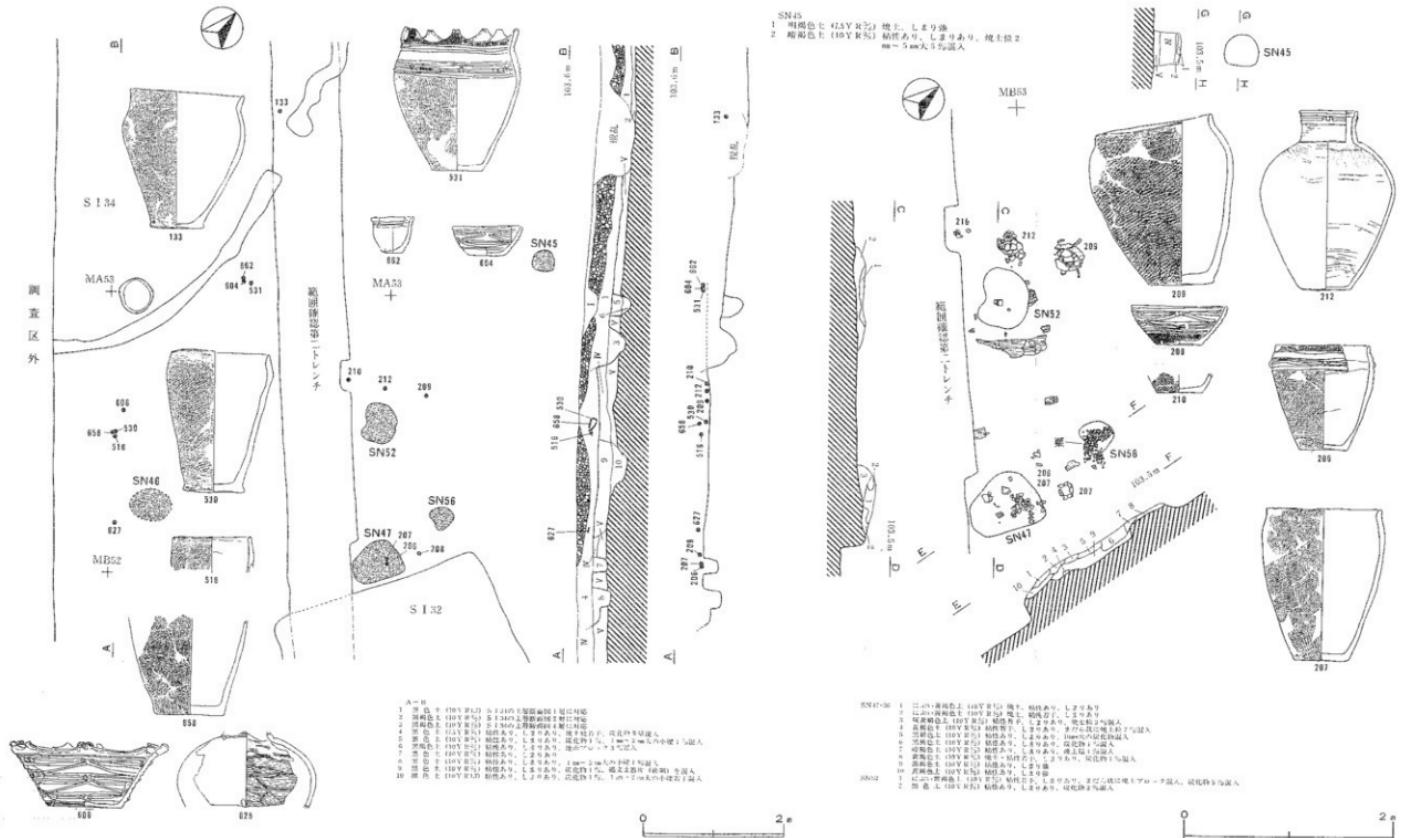
L S・L T47グリッドに位置し、S Q43の南側に近接している。確認面はIV層上部である。径2.0mの略円形を呈し、北側と東側では帶状に若干張り出している。5cm～25cm大の円礫・亜角礫が密集し、部分的に重量・空白のところがある。遺物は礫間に嵌入する状況で弥生土器片数点が出土した（第43図217）。

第3節 平安時代の遺構と遺物

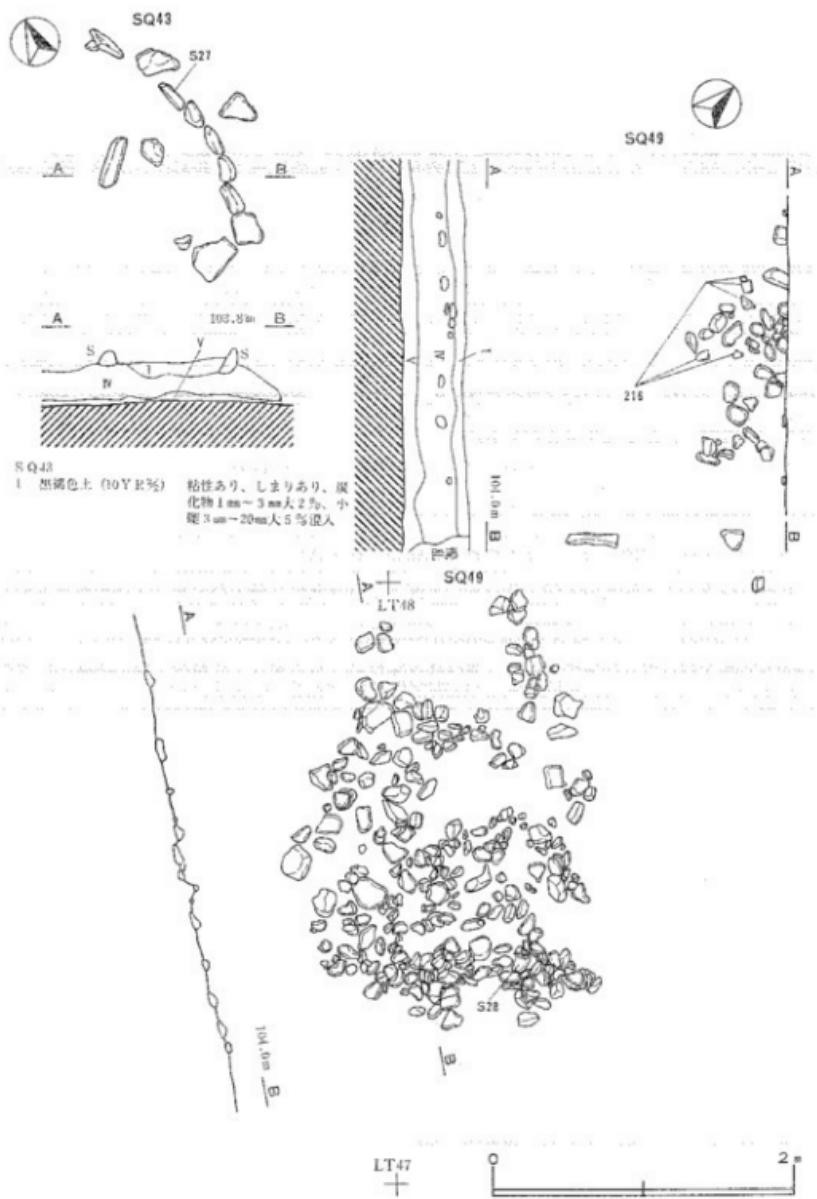
1. 壁穴住居跡

S I 18（第22・23・44図、第7表、図版19・20・26・36）

L T・MA 56・57グリッドに位置し、確認面はVI層上面である。平面形は方形を呈し、南東壁長3.56m、北東壁長3.50m、北西壁長3.65m、南西壁長3.41m、床面からの壁高4cm～14cmを測る壁穴住居跡である。主軸方位はN-120°-Eを向く。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁底下には溝が構築されている。カマドが付設される部分を除いて全周し、上面幅13cm～30cm、底面幅9cm～18cm、深さ5cm～12cmを測る。底面は緩い起伏があり、部分的に径15cm～30cm、深さ10cm～20cmの円形・横円形を呈するヒットが穿たれている。床面は平坦で堅緻である。カマド



第20図 SN境土遺構(2)



第21図 SQ集石

周辺は長軸1.7m、短軸1.3m、深さ6cmの方形状に一段低くなり、良く踏み固められている。床面積は14m²を測る。柱穴は各隅部の壁溝内に計4本穿たれ、径22cm~30cmの円形を呈する。深さはP1・2が23cm、P3・4が30cmである。埋土は7層に細分でき、炭化物・浮石粒を混入する自然堆積を呈する。2層は混入物を含まない明黄褐色土で、調査段階では浮石粒と異なる火山灰と判断した。カマド周辺及び東側隅部に分布し、加熱により脆弱した5cm~30cm大の亜角礫が多く共伴している。カマドは南東壁南寄りに付設されている。長軸1.2m、短軸45cmの橢円形を呈し、床面から10cm程掘り込まれている。長軸方位はN-125°-Eを向く。底面は燃焼部がほぼ平坦で、赤変・硬化が著しく、煙道部は緩い起伏があり、15°の勾配で立ち上がる。袖部は浮石粒・火山灰を混入する地山土と8cm~25cm大の亜角礫で構築され、加熱により赤変・脆弱が著しい。支脚は検出されなかった。埋土は12層に細分できる。大部分は天井部・袖部の崩壊土で、浮石粒・火山灰をブロック状に混入している。東側隅部で検出した火山灰・礫は、カマド崩壊時に散乱した可能性がある。

遺物はカマド周辺及びカマドの埋土から土師器甕1個体（第44図218）と、南西壁西寄りの床面から釘状鉄製品3点（第44図K1）が出土した。

S132（第24・44図、第7・8・20表、図版19・20・36）

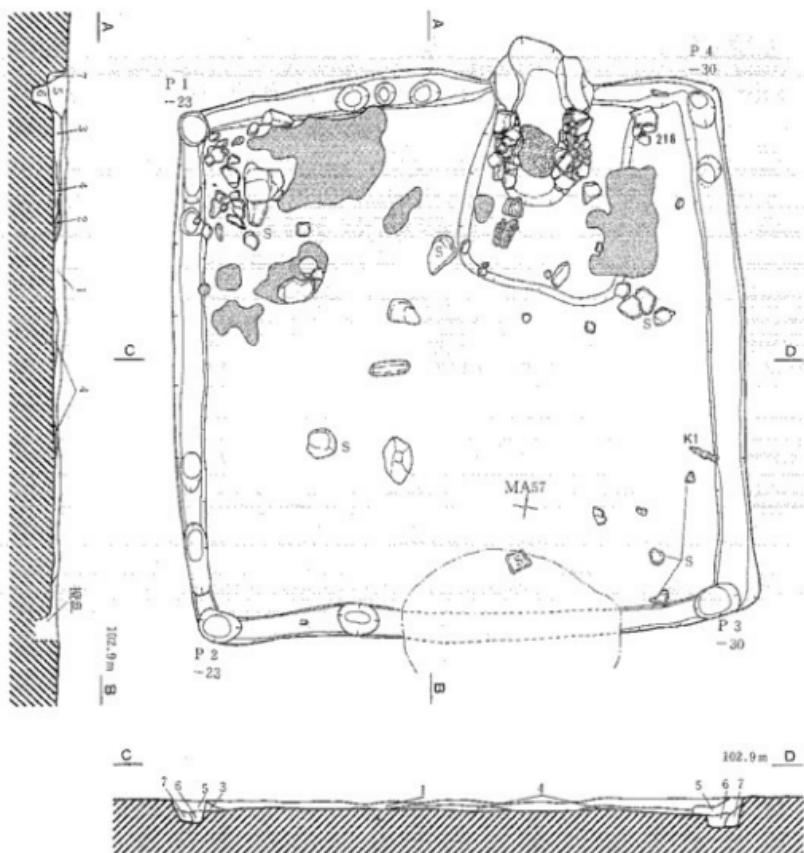
調査区中央LT・MA51・52グリッドに位置し、確認面はIV層上面である。平面形は方形を呈し、北東壁長3.30m、北西壁長2.95m、南西壁長3.05m、南東壁長3.35m、床面からの壁高25cm~35cmを測る竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北東壁・南西壁直下に壁溝が構築されている。上面幅10cm~15cm、底面幅4cm~8cm、深さ3cm~14cmを測り、底面は起伏が著しい。床面はほぼ平坦であるが、それほど堅緻ではなく、床面積は11m²を割る。柱穴は各隅部に計4本穿たれている。径20cm~25cmの円形を呈し、深さ26cm~55cmを測る。カマドは検出されなかった。埋土は4層に細分でき、浮石粒・炭化物を少量混入する黒褐色土の自然堆積を呈する。2層は混入物を含まない明黄褐色土で、S118の火山灰と同じであると判断した。北西壁側・東側隅部で検出され、厚いところで10cmの堆積がある。

遺物は埋土3層から繩文土器片（II群土器）、弥生土器片（IV群土器）、石器、フレイクが大量に出土したが（第44図219~226、S29~S31）、土師器片等（V群土器）は1点も出土していない。本遺構は、前述した弥生時代の焼土群を切って構築しているため、出土遺物の大部分（IV群土器）は、焼土群に関連するものと思われる。

2. 不明遺構

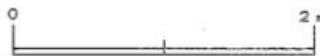
SX51（第24・44図、第8表、図版20・36）

MA・MB46・47グリッドに位置し、確認面はIV層上面である。一部調査区外にあたるため全容は不明であるが、長さ3.0m、幅50cmの溝状を呈する浮石留りである。埋土から同規模の炭

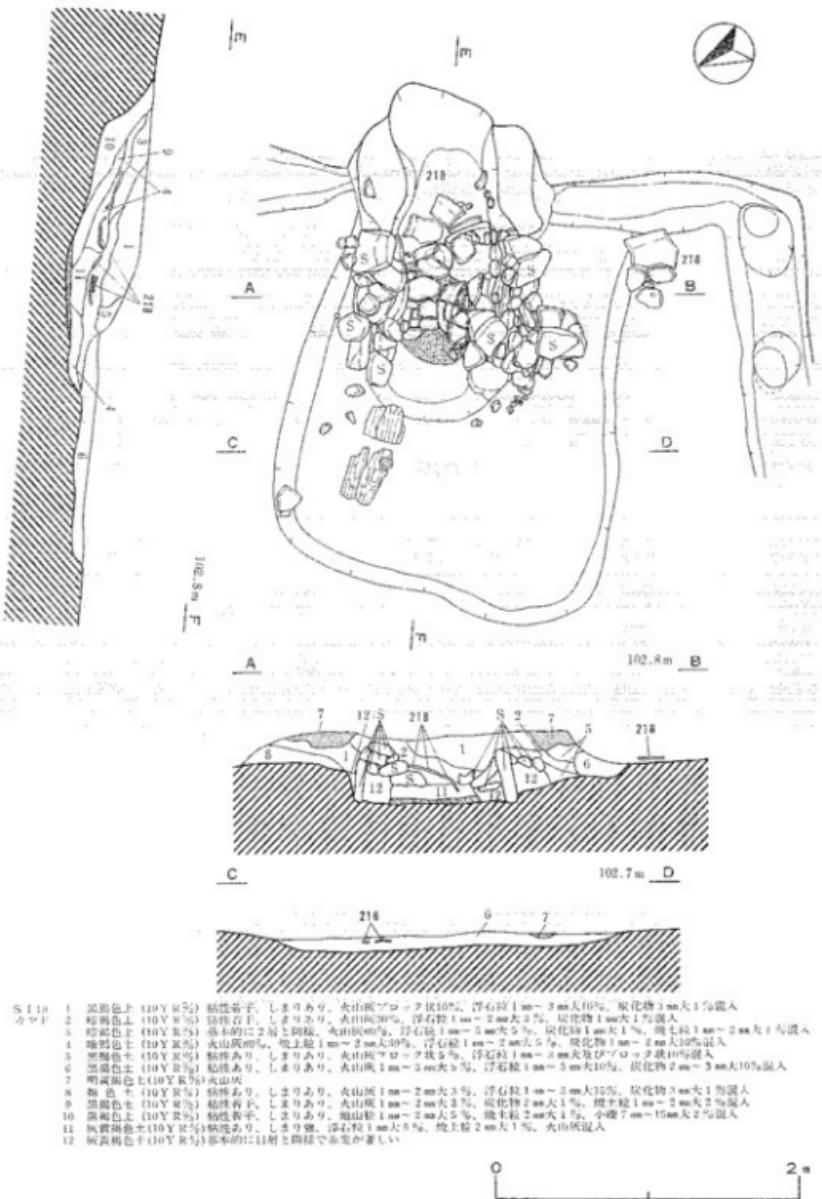


S I 18

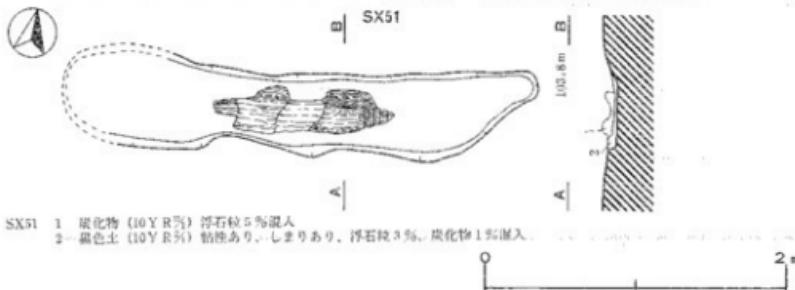
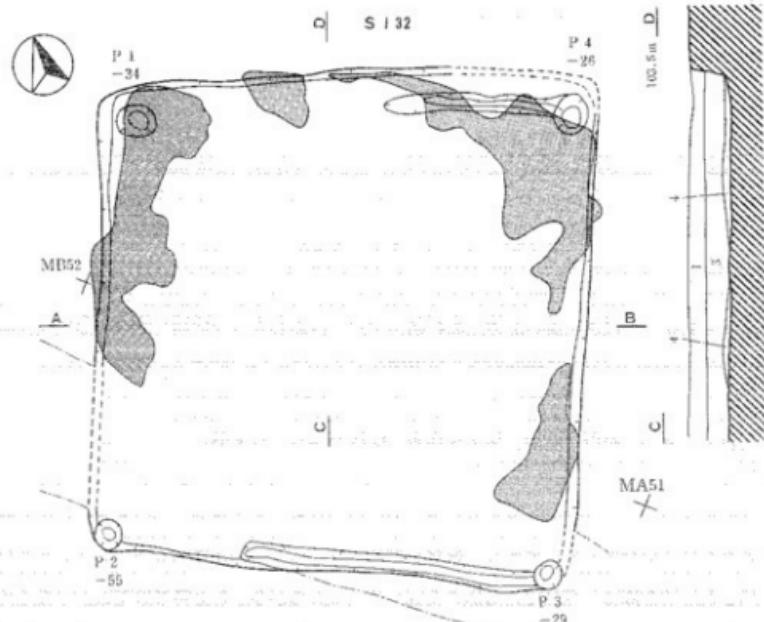
- 1 黒褐色土 (10YR 5%) 粘性あり、しまり強、浮石粒 1mm~2mm 大シモフリ状 40%混入
- 2 同黒褐色土 (10YR 5%) 地山灰、しまりあり、炭化物 2mm 大若干混入
- 3 黑褐色土 (10YR 5%) 粘性あり、しまり強、炭化物 1mm~2mm 大 10%、浮石粒 1mm~2mm 大 10%混入
- 4 黒色土 (10YR 5%) 粘性あり、しまりあり、炭化物 2mm~5mm 大 10%、浮石粒 1mm 大 5%混入
- 5 黑褐色土 (10YR 5%) 粘性あり、しまりあり、浮石粒 1mm~3mm 大 5%、地山粒 1mm~2mm 大 5%、小礫 3mm~5mm 大 2%混入
- 6 黒色土 (10YR 5%) 粘性あり、しまりあり、浮石粒 1mm 大 5%、地山ブロック 20%、小礫 5mm~10mm 大 1%混入
- 7 黄褐色土 (10YR 5%) 地山ブロック



第22図 S I 18 聖穴住居跡



第23図 S118堅穴住跡カマド



第24図 S I 32竪穴住居跡・SX51不明遺構

化木を検出したため、倒木後、二次的に浮石粒が混入したものと考えられる。遺物は底面から繩文土器片数点が出土した（第44図228～230）。II群土器に相当する。

第4節 出土遺物

諏訪台C遺跡では繩文時代前期、後期、晩期、弥生時代前半、平安時代の遺物が出土している。特にこの遺跡では繩文・弥生時代の遺物が多く、本遺跡を特色づけている。この意味からこれら2時期の遺物についてだけ詳細な分類を検討すべきかもしれないが、ここでは諏訪台C遺跡の全体を把握する意図から、土器・土製品については上記5つの時期に照点を合せた分類を行う。また、石器については時期の特定が困難なので、一括し、器種ごとの説明を行う。

1. 土器・土製品（第27～62図、第2～19表、図版21～51・57・58）

分類は大別を時期（群）、類別を器種、細別を文様・技法と表現し、それぞれローマ数字、大文字のアルファベット、小文字のアルファベットで表記した。さらに個々の器種において形態の異なる場合は算用数字を添えてあり、器形の把握できないものは共通項目でとらえられる仲間を一括した。この際に、IV群では器形の全容の分かるものが多いがII群ではそれが少なく大部分が破片である。そのために、分類はII群では折り返し口縁の有無と口縁部文様帶の相違に主眼をおきIV群では形態の変化と文様の有り方に主眼をおいた。また、ミニチュア土器・土製品についても類別分類として一括し、細別分類で形態変化を説明した。以上の基準で分類を進めるが、個々の遺物の説明は、基準となったものや特に説明を必要とするものに限りおこない、個々の破片については遺物観察表によることにした。I群からV群はそれぞれ、繩文時代前期、後期、晩期、弥生時代、平安時代を表している。

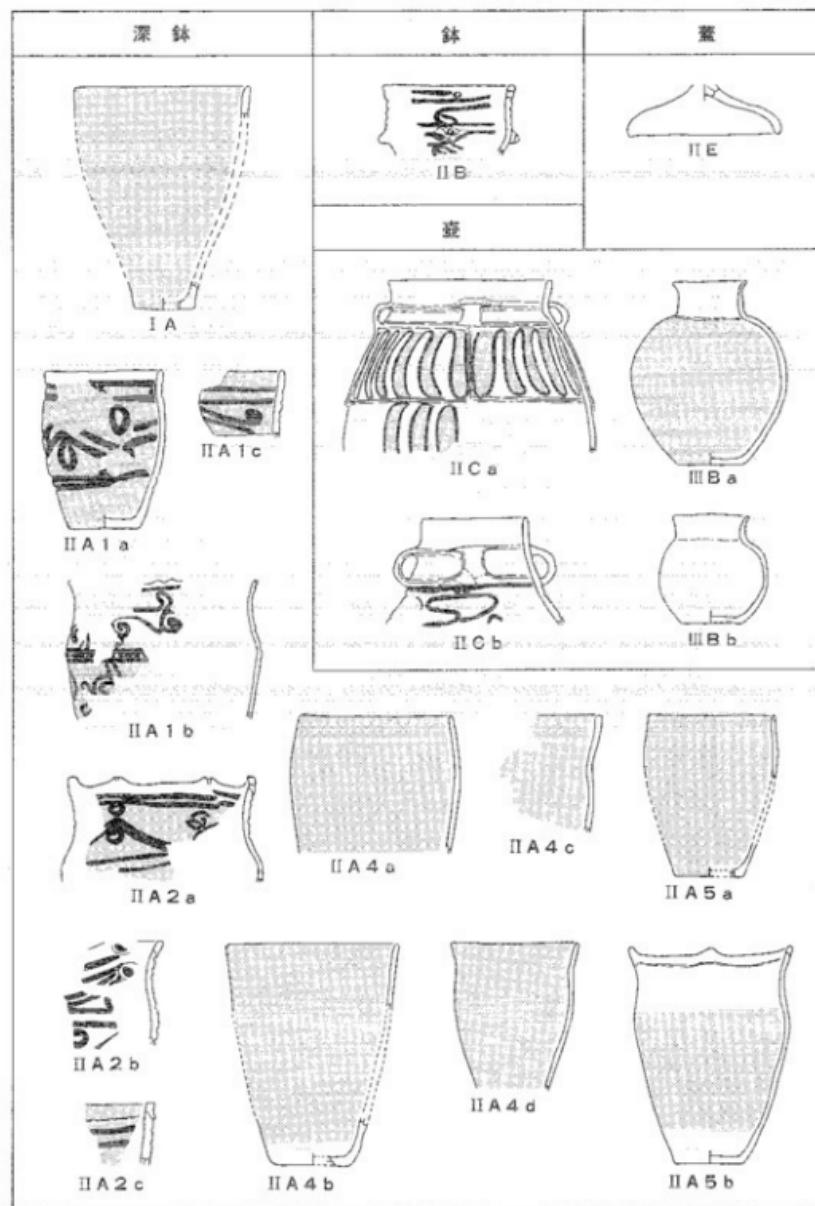
I群A類 深鉢で纖維を含む。

I A a 表面は繩文で、裏面に条痕文をもつ（231～242）。231・232は口縁部でやや外反し、242は底部で底面端部が張り断面が薄い。

I A b 表面は繩文で、裏面が無文である（24～26・243～255）。243は口縁部でやや外反する。255は底部で小型である。

II群A1類 精製の深鉢で折り返し口縁をもたない。

II A 1 a 口縁部の地文は繩文で、口唇部直下は無文である（43・45・87・89・91～93・99・228・256～260、262～281）。92・99は小型の深鉢で、92は波状突起をもつ口縁99は平口縁である。頸部は緩やかにすぼまり胴部では中央に最大径がある。92は斜繩文を地文とし口縁部と胴下位に弧状の連結文のある2本一組を中心とした平行沈線の区画があり、そこから派生する波状と



第25図 縄文土器分類模式図 スクリーントーンは繩文を表わしている

渦巻・つり針形文の沈線が横位に展開する。沈線は丸くて太い。99は92と同じような区画を胴中央部を含めて3つ想定され、2つの文様帶に2本一組となる入組状の波状文や渦巻文を横位に展開する。沈線は丸くて太い。

II A 1 b 口縁部の地文は無文である(27・71・74・81・282~285・383・397)。282は2対一組の山形突起をもつ口縁で、口唇直下に一本の平行沈線をもち、胴部上位に最大径をもつ。胴部の最大径部には2本一組の平行沈線をめぐらせ、地文が無文の口縁部と地文が撚糸文の胴部とを区画している。この沈線には、3~4個の竹管文を併んだ沈線による橢円文が並ぶ。上部文様帶には渦巻文を主体にした横位の沈線文、下部文様帶には沈線が連続する三ヶ月形文や横位に展開する渦巻文が施される。沈線は丸くて太い。74は口縁部に刺突文があり、81では繩文を押疊している。

II A 1 c 口縁部の地文は繩文で、口唇部直下にも繩文を施す(72・225・261・286~290)。山形突起をもつ口縁(225・261・289)や平口縁がある。文様は平行沈線文、渦巻沈線文をもつ。沈線は丸くて太いものと細いものがある。

II群A 2類 精製の深鉢で、折り返し口縁をもつ。

II A 2 a 口縁部の地文は繩文で、折り返し部分は無文である(20・106・108・110・137・291~303)。山形口縁(20・108・137・291・292・295・302)と平口縁がある。108は頂部の沈線によって2対一組の山形突起をもつ口縁で、胴部上位に最大径をもつ深鉢である。地文は繩文で、折り返し部と胴最大部は2対一組の平行沈線状の区画をつくる。文様帶にはやはり2本一組の平行する沈線で波状沈線文があり、その上下に沈線による橢円文、渦巻文、C字形の入組文などを配している。上位平行沈線の一部に端部が丸まる部分が認められる。沈線は丸くて太い。

II A 2 b 口縁部の地文は無文で、折り返し部分も無文である(304~309)。305と306は同一個体で山形状を呈する。平行沈線や渦巻状の沈線文で、沈線は丸いがそう太くない。309の沈線は丸くて太いが、他の丸く太い沈線に比べて浅く異質である。

II A 2 c 折り返し部分に文様を施す(310~315)。310・311は同一個体で折り返し部分に繩文、それ以外は平行沈線や渦巻文をもつ。312は折り返し部分は繩文、その他は平行沈線をもつ。313は折り返し部分に橢円沈線文をもち、その中間に2個一対の刺突文をもつ。他は平行沈線をもつ。314は折り返し部分は竹管状の刺突文、その他は平行沈線をもつ。沈線は310・311・313では丸くて細く、312・314・315では丸くて太い。

II群A 3類 精製の深鉢で、胴部破片を一括する。

II A 3 a 斜繩文の地文に沈線を施す(8・14・28~30・35~38・44・50・73・78・83・84・94・102・103・112~114・116・205・214・215・229・316~382)。沈線で文様が施され、平行沈線、斜位方向の沈線文、渦巻文、S字状を縱・横やそれらの逆にしたような曲線文様などを組

み合わせている。縱位の沈縫文はない。沈縫は太いものと細いものがある。325・326・329には磨消縫文が認められる。

II A 3 b 撫糸文の地文に沈縫を施す(384~396)。文様はA3 a類と同様平行線や曲線文の沈縫である。396の撫糸文は格子目をつくる。

II A 3 c 無文に沈縫文を施す(398~414)。沈縫で文様が施され、平行沈縫・斜位方向の沈縫・渦巻文・S字状の曲線文がある。沈縫は丸く太いものと細いものがある。

II群A 4類 精製の深鉢で、折り返し口縁をもたない。

II A 4 a 口縁部が内反ぎみに立ち上がる(7・9・10・64・79・415・416・418~421)。地文が繩文のものと撫糸文のもの(7・419)がある。418は口縁端をわずかにつまみだす。

II A 4 b 頭部の抉れがなく口縁部が直線的に立ち上がる(52・55~58・90・95~98・136・141・422~427・429~445)。口縁部が垂直ぎみのもの(429)と、やや外反して立ち上がるもの(427)がある。

II A 4 c 頭部が緩やかに屈曲し、口縁部で直立ぎみに立ち上がる(428)。最大径を口縁部にもち、口唇直下にはナデの痕跡がある。

II A 4 d 頭部が緩やかに屈曲し、口縁部が外反して立ち上がる(15・22・41・47)。口縁部が山形状になるもの(15)と平口縁のものがある。41は口縁部に最大径をもち、口縁部は内弯状の膨みをもつ。口唇直下にナデの痕跡がある。

II群A 5類 粗製の深鉢で、折り返し口縁をもつ。

II A 5 a 脊中央部から口縁部にかけて、内反もししくは直線的に立ち上がる(59・417・446~461)。417は脊中央部やや上位に最大径があり、446ではほぼ中央部である。折り返し部は417ではミガキ、446ではナデを施し、417の繩文は最終の撫りが弱く個々の条が曲線的となる。

II A 5 b 頭部が緩やかに屈曲し、口縁部で直立ぎみとなる(13)。13は山形突起の口縁をもち、口縁で最大径となる。脣部最大径は脣部中央やや上位にあり、そこから下位は繩文、上位は無文となる。

II群A 6類 深鉢の底部を一括する(12・19・40・76・77・100・101・117・142・143・462~480)。

II群A 7類 深鉢と考えられるものを一括する(1・2・4・11・16~18・21・23・31~34・39・42・46・48・49・53・54・68・85・86・88・105・107・109・111・115・139・140・211・230)。

II群B類 鉢を一括する(82・481~485)。地文が繩文で沈縫をもつもの(483・484)、無文と考えられるもの(482)、地文が無文で細かい沈縫文をもつもの(481・485)がある。481は体部中央に垂直に穴のあく把手と口縁部に穿孔部をもつ。481の文様は平行沈縫やその先端が入組状

になる。485では梢円状の沈線とその内部に纏文を施すものである。

II群C類 精製の壺である。

II C a 磨り消し纏文をもつ(216)。最大径が体部下位にある形態で頸部までは内窓して立ち上がり、頸部は「く」の字を成し口縁部で外反する。頸部には橋状把手を4個もち、その下に隆帯による区画線が縦に走る。またこの区画は胸部上位や把手の装着部を通って腹部にも2本もつ。口縁部と頸部は無文で、体部には横「S」字形を連続させた沈線をもつ。この部分は磨消纏文手法となる。

II C b 地文は無文で、沈線をもつ(486~488)。最大径を体部にもち、そこから口縁部まで内反して立つが、口縁部で直立ぎみになる。頸部に橋状把手を4個もち、その装着部を通る2本の平行な隆帯をもつ。体部には沈線による沈線が横位に展開している。沈線は丸く細い。

II群D類 台部を一括する(489~491)。492は竹管状の刺突と平行沈線、490は3本の複雑な平行沈線、490は穿孔部をもつ。

II群E類 精製の壺(492・493)。492は中央につまみ部をもつが、同心円状のものではなく「一」文字状に突出している。493は扁平なつくりで端部が内反ぎみになる。

II群F類 土製品を一括する(51・104・121・226・494~502)。円盤状土製品(51・104・121・226・407~502)、完形の鉢形ミニチュア土器(494)、土偶(495・496)に分けられる。円盤状土製品は纏文土器の破片を利用している。土偶の496は左足で、495も左足と思われる。

III群A類 鉢類を一括する(3・5・6・60・62・63・65~67・69・70・503~507・513・514)。平行沈線をもつもの(3・60・62・503)、入組状三叉文をもつもの(62・504)、三叉状の文様をもつものなどがある(503)。深鉢・鉢の他に、70は台付鉢、503は台付浅鉢と思われる。

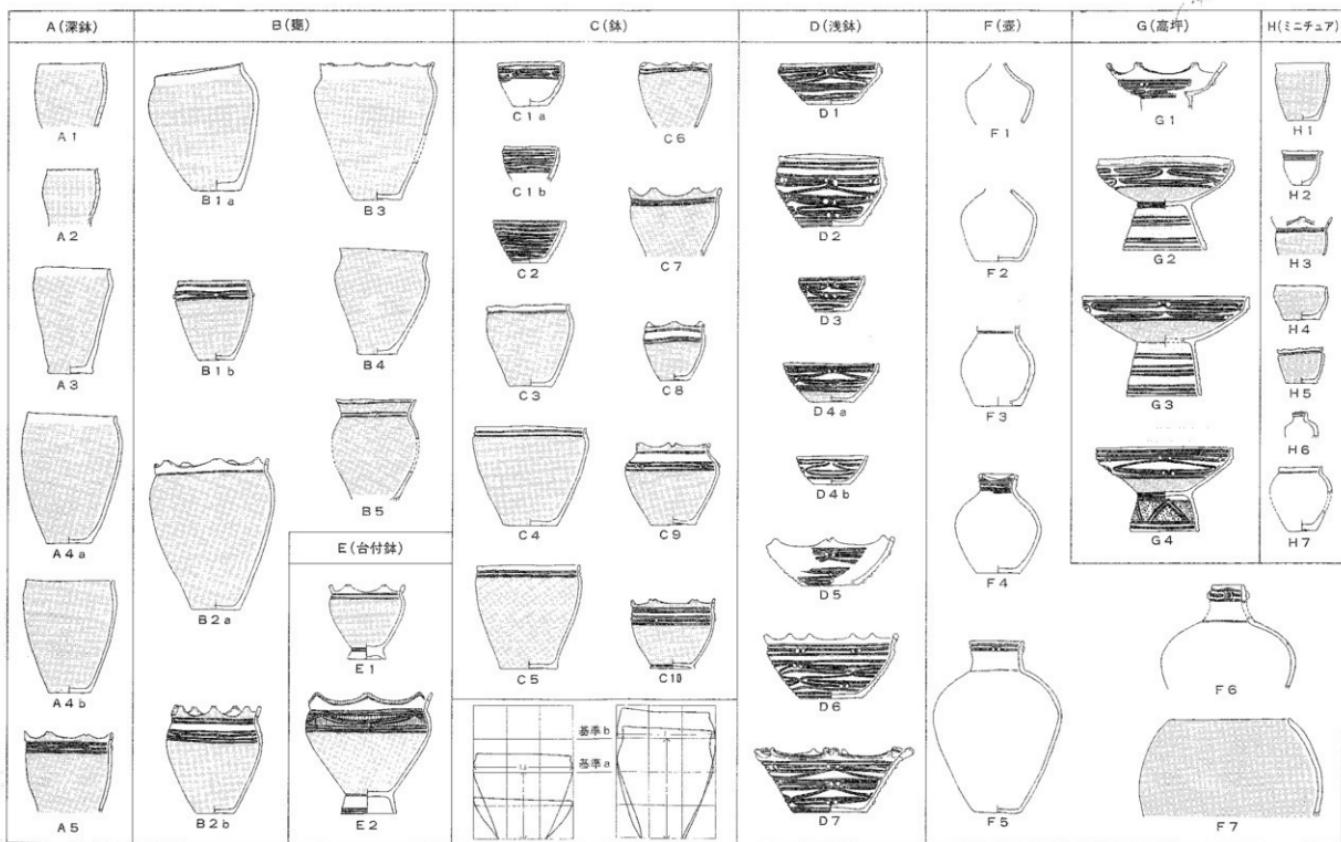
III群B類 壺を一括する。

III B a類 体部は纏文で頸部から口縁部は無文である(80)。80は平底の底部で、体部は中央に最大径をもち球形を呈する。頸部は直立して、口縁部は外反する。頸部に浅い平行沈線があり、無文部にはミガキを施す。

III B b類 全面が無文である(61)。61はIII B a類と類似するが、頸部から口縁部が外反し、体部も無文でミガキを施す。

III B c類 壺と考えられる破片を一括した(508・509)。508は体部上部で平行沈線や梢円状の沈線を施し、509は口縁部と思われる。

III群C類 台部・底部を一括する(510~512)。510は台部上位に2本、下位に1本の沈線が施され、511・512の底面はミガキが施されている。



第26図 IV群土器分類模式図

各構造の前段ははは塗してある
スクリーントーンは文書を表わしている

次に弥生時代の分類を行うが、浅鉢・鉢・深鉢・壺の分類は研究者と地域によって分類基準が異なるために、本遺跡における基準を定めておきたい。ここでは長胴になるものを深鉢もしくは壺として扱い、はじめにこれらと鉢・浅鉢について分類する。すなわち、浅鉢と鉢・鉢と深鉢・壺における深さに対する胴部や体部における最大径の比率を前者では1:1.5、後者では1:1となる基準を設けることにする。この時の最大幅を固定したのが第26図である。この図の中で、おむね基準aを下回る場合を浅鉢、基準a・b間の場合を鉢、基準bを上回る場合を深鉢・壺として考えた。そして深鉢と壺については、細部の形態から次のように分けた。深鉢は頸部で顕著な屈曲がなく口縁部が内傾するもの、壺では頸部が屈曲し口縁部は直立もしくは外反するものとした。

IV群A類 深鉢である。

IV A 1 口縁部は内傾し胴部のやや上位が最大径となる。胴部には繩文、口縁部には横ナデを施す。164は口唇部で凹凸を示し底部を欠損する。粘土紐の接合が明瞭で、接合痕は内傾を示す。内面はナデを施す。

IV A 2 口縁部には小波状が連続し、口唇部の直下が小さく「く」の字状になる。胴部上位で最大径となる。胴部には繩文、口縁部には横ナデを施す(165・166)。165・166は底部を欠損し、粘土紐の接合が明瞭である。165の接合痕は外傾を示し、166の胴上位には横位の刷毛目状痕跡を認める。内面にはナデを施す。

IV A 3 口縁部は内傾しその直下が最大径となる。底面は横に張り出し、胴部には繩文、口縁部には横ナデを施す(530)。530は胴部上半分と口縁部には炭化物が顕著に付着する。内面は横位のヘラケズリ→ナデを施す。

IV A 4 a 頸部は緩やかに窪み口縁部は直立する。胴上位に最大径をもつが張りが少ない。胴部には繩文、口縁部にはミガキを施す(183・184)。183は繩文施文以前の刷毛目状痕跡をとどめる。内面は横位のヘラケズリ→ナデを施す。184ではミガキを施す。両方とも繩文施文の後に部分的なナデを施す。

IV A 4 b A 4 aとは口縁部にも繩文を施す違いがある(207)。207の内面は丁寧なミガキを施し、全面に炭化物が付着する。

IV A 5 口縁部は波状突起をもつ。口縁部直下に平行沈線と貼瘤をもち、それ以外には繩文を施す(170)。170は底部を欠損している。突起は6単位で波頂部は丸い沈線となる。内面はミガキを施す。沈線は丸く太い。

IV A 6 深鉢と思われるものを括した(515~529・545~547・556~558)。515は口縁部が小波状に連続し、口縁部ではミガキを施す。繩文施文後部分的にナデを施す。内面には刷毛目状痕

跡をとどめる部分があり、その後にミガキを施している。

IV群B類 薫である。

IVB1a 口縁部は短く直立し、胴上位は最大径となり強く張る。口縁部には横ナデ、胴部には繩文を施す(209)。209は繩文を施す前にテズリを行なっていると思われる。施文後は部分的にナデを施す。裏面には丁寧なミガキを施す。

IVB1b 形態はIVB1a類と類似し、口縁部に繩文、頸部から胴上位に無文帯や沈線、貼瘤を施す違いがある(206)。206は全体的に炭化物が付着している。内面には粘土紐接合痕が認められ、ミガキを施す。沈線は丸く太い。213は底部破片で、206と同一個体である。

IVB2a 口縁部はやや外反し、胴上部が強く張った最大径となる。頸部には1本の沈線をもち、口縁部にはミガキ、胴部には繩文を施す(182)。182の突起は7単位と思われ、波頂部は刺突状の窪みと棒状工具による沈線がある。内面にはミガキを施す。沈線は丸く太い。

IVB2b 形態はIVB2aと類似し、口縁部に繩文、頸部から胴上位にミガキを施した無文帯や平行沈線、貼瘤を施す違いがある(531)。531は本来7つの突起を有していたが、1つが欠けその面が削られている。波頂部は丸い沈線を施し、内面には丁寧なミガキを施す。沈線は丸く太い。

IVB3 口縁部は長くやや外反し、平坦面と交互に小さな山形突起をもつ。胴上位が最大径となり強く張る。口縁部にはミガキ、胴部には繩文を施す(145)。145の突起は11単位で内面にはミガキを施す。内面には粘土紐接合痕をとどめ、外面胴下半を除くすべてに炭化物の付着がある。また外面にはスリップを施していると思われる。

IVB4 口縁部は長く外反する。胴部上位に最大径があり底部は突出ぎみとなり底部でわずかに張る。全体に繩文を施す(133)。133の口縁部の繩文は頸部の回転軸方向を90°回転した方向で行う。内面は丁寧なミガキを施す。外面には幅1cmの均一な粘土接合痕が明瞭である。内外面に炭化物が付着し、内面下半は器壁がただれた斑状を呈している。

IVB5 口縁部は長く外反し、口唇部は緩い波状を呈する。胴部上位に最大径をもつ。全体に繩文を施し、口唇部直下と頸部に平行沈線を施す(125)。125は口縁部と胴上位それから底部の一部を残存するのみである。内面はミガキを施し、内外面は全体に炭化物が付着する。沈線は細く粗雑である。

IVB6 薫と思われるものを一括した(75・123・134・144・148~150・154・155・177・189・200~202・204・537~539・544・548・549・551~555・560~562・565・571・573・581・584)。149は内面に沈線をもち、口縁部は直立する。沈線は丸く太い。口縁部と内面にはミガキを施しほかは繩文である。571は頸部に繩文を平行に押圧し、胴部は縱位に鋸歯状沈線をもつ。鋸歯状沈線間の幅の狭い部分には繩文を施し、幅の広い部分は無文となる。沈線は細い。

IV群C類 鉢である。

IV C 1 a 口縁部は直立し口縁部直下に最大径をもつ。体部上位に平行沈線と横円文をもつ(173)。173は底部の半分を欠損し、内面では粘土紐の接合痕が明瞭である。沈線は丸く細い。この土器は分類基準にしたがえば浅鉢とすべきであるが、形態や文様要素からあえて鉢形に分類しておく。

IV C 1 b IV C 1 aとは、体部全面に平行沈線を重畳させる違いがある(172)。172は底部を欠損し、内面では粘土紐の接合痕が明瞭である。沈線は丸く細い。この土器もあえて鉢形にしてある。

IV C 2 体部の外反度が強く、胴上位に最大径があると考えられる。体部全面に平行沈線を施す(180)。180の内面には細い沈線があり、丁寧なミガキを施す。外面沈線は丸く太い。この土器もあえて鉢形にしてある。

IV C 3 口唇部が緩い波状を呈し、口縁部は直立する。体部上位に最大径をもつ。口縁部にはナデ、体部には繩文を施す(190)。190の内面はケズリの後、丁寧なミガキを施す。内外面に炭化物の付着する部分が多い。沈線は丸くやや細い。

IV C 4 口縁部は直立し、頸部にわずかな屈曲をもつ。頸部の直下に最大径をもつ。平行沈線のある頸部や口縁部にはミガキを施し、体部には繩文を施す(191)。191は2本の平行沈線をもち、内面には丁寧なミガキを施す。沈線は丸く太い。

IV C 5 体部上位に最大径をもち、そこから屈曲しない直立した口縁部となる。底部はわずかに張る。口唇部にはミガキ、その直下には2本の平行沈線、体部には繩文を施す(567)。567の内面は刷毛目状痕跡の後にミガキが施され、内外面に炭化物が付着する。沈線は丸く太い。

IV C 6 口縁部は山形突起をもち緩やかに外反し、頸部直下に最大径をもつ。頸部には平行な沈線、体部に繩文、口縁部にミガキを施す(187)。187の口縁部の単位は7で、波頂部に沈線をもつ。内面にはミガキを施す。沈線は丸く太い。

IV C 7 口縁部は波状突起をもつ(568)。568は波頂部に沈線を施し、6単位と考えられ内面は丁寧なミガキを施す。

IV C 8 口縁部は山形突起をもち直立し、体部上位に最大径をもつ。全面に繩文を施した後に頸部と最大部に平行沈線、その間はミガキを施し無文となる(219)。219の突起は4単位と考えられ、内面は丁寧なミガキを施す。沈線は丸くやや細い。

IV C 9 口縁部は緩やかな波状突起をもち、体部上位は強く張り出し最大径となる。頸部から体部上位にかけては平行沈線と無文帯をもち、他には繩文を施す(188)。188の口縁波頂部は6単位で、大きな沈線状の抉れによって2個の丸い波頂部となる。内面は丁寧なミガキを施す。同一部分の内外約半分には炭化物が付着している。沈線は丸く太い。

IV C10 口縁部は緩やかな波状突起をもち、体部上位で最大径になる。底部は上げ底になる。頸部から体部上位にかけては平行沈線文と無文帯、底部付近で平行沈線をもち、他の部分には繩文を施す(151・569・570・575・578・579・591～594)。151の突起は波頂部で大きくなり沈線状の抉りが入り2つの小突起をつくる。繩文は、体部では縦位、口縁部では斜位に施す。全面黒色塗布の行われた可能性があり、光沢がある。593の底部も同じ状況を呈している。内面には1本の沈線があり、全面に丁寧なミガキを施す。沈線は丸く太い。

IV C11 鉢と考えられるものを一括した(124・128・135・138・156～160・167～169・171・174～176・178・179・203・222・532～536・540～543・550・559・563・564・566・572・574・576・577・580・582・583・586)。

IV群D類 浅鉢である。

IV D 1 体部は直線的に立ち上がり、口縁部直下で最大となる。口縁部は短く直立する。体部には平行沈線、変形工字文、繩文を施し、無文帯をもつ(152)。152は内面に1本の平行沈線があり、繩文を施した部分以外は内外面ともにミガキを施す。コビ状の炭化物が付着している。沈線は丸く太い部分と鋭角的な部分とがある。

IV D 2 体部は直線的に立ち上がり、体部上位で最大径になる。胴部上位で内傾し、口縁部で直立する。口縁部から体部にかけて、平行沈線、変形工字文、貼瘤をもつ(153)。153は内面に1本の平行沈線があり、内外面に丁寧なミガキを施す。また、内外面に黒色塗布の行われた可能性のある痕跡が部分的に認められ、その上に赤色塗布の認められる部分もある。沈線は丸く太い。

IV D 3 体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部の直下で最大径となる。口縁部は短く直立する。口縁部から体部にかけて、平行沈線、変形工字文、貼瘤をもつ(603)。603は内面に1本の平行沈線を、内外面に丁寧なミガキを施す。沈線は細く、丸い部分と鋭角的な部分がある。

IV D 4 a 底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる。口縁部から体部にかけて、平行沈線、変形工字文、貼瘤、繩文をもつ(208)。208は内面に浅い沈線状の痕跡を1本もつ。繩文施文部以外にはミガキを施す。沈線は丸く太い。

IV D 4 b D 4 aとは体部下半の繩文と貼瘤をもたない違いがある(604)。604は内面に1本の浅い沈線をもち、全面にミガキを施す。沈線は丸く太い。

IV D 5 口縁部は緩やかな波状突起となり、底面から内湾して立ち上がる。体部には平行沈線、変形工字文、貼瘤をもち、口唇部にも沈線をもつ(221)。221は突起は4単位と思われ波頂部は沈線状になり2つに分かれる。内面には1本の平行沈線をもち、全面にミガキを施す。沈線は丸く太い。

IV D 6 口縁部は緩やかな2個1対の波状突起となり、底部から内湾して立ち上がる。頸部は

わずかに抉られ口縁部は外反する。頸部から体部にかけて平行沈線、変形工字文、貼瘤をつ(605)。605の突起は6単位と考えられ、突起間の口唇部には沈線を施す。内面にも2本の平行沈線を施し、全面にミガキを施す。体部には部分的に光沢のある炭化物が付着しており、これを剥ぐと赤色顔料が認められる。沈線は丸く太い。

IVD 7 口縁部は緩やかな波状突起となり、底部から直線的に立ち上がり口縁で外反する。体部には平行沈線、変形工字文、貼瘤をもつ(606)。606の突起は、牛頭形の突起と沈線で分断する刺突瘤に分けられ、それらが交互に3つづつ配される。突起間には沈線を施す。内外面にミガキを施す。沈線は丸く太い。

IVD 8 浅鉢と考えられるものを一括した(193・217・220・596~602・607~624・640)。598は底部から直線的に口縁に至る形態で、平行沈線、変形工字文、貼瘤と内面口唇部近くに平行沈線をもつ。613は体部上位に最大径をもつもので、口縁部は内傾する。内面に赤色塗布の痕跡がある。217の突起部は沈線により2つに分かれ、それぞれの頂部にさらに沈線状の窪みを施している。突起間の口唇部には沈線があり、内面にも2条の沈線がある。沈線は丸く太い。640は胎土・焼成・色調のほか施文技法が類似する193と同一個体と考えられる。沈線は断面が三角形を呈し太い。

IV群E類 台付鉢である。

IV E 1 口縁部は波状突起となり屈曲する頸部から外反する。体部上位に最大径をもち台唇部は外反する。口縁部直下と台唇部直上に平行沈線をもち、体部には繩文を施す(192)。192の突起は6単位である。台唇部は極端に厚く内面は丁寧なミカキを施す。沈線は丸く太い。

IV E 2 口縁部は波状突起となり、屈曲する頸部から外反する。体部上位に最大径をもち台唇部はやや外反する。口縁部の直下、胴部上位、台唇部に平行沈線、変形工字文、刻目、無文帶をもち、体部に繩文を施す(118)。118の突起は6単位と思われ、波頂部は平坦になる。体部の繩文は縱位である。鉢部内面から口縁部までと外面の胴部から口縁部はコビ状の炭化物が付着している。内面の下方には器壁がただれた斑状の部分がある。沈線は丸く細い。

IV E 3 台付鉢と考えられるものを一括した(595・646)。

IV類F類 壺である。

IV F 1 体部上位に最大径をもち、肩部は鍤形状となり細い首に連続する。体部全面にミガキを施す(194)。194は刷毛目状の痕跡を認め、全面にミガキを施す。内面はナデである。

IV F 2 体部上位に最大径をもち、細い首に連続する。体部全面にミガキを施す(162)。162は体部上位で黒色塗布の可能性があり、上に赤色顔料の付着している部分もある。また内面の体部上位全体に赤色顔料が認められ、液状の赤色顔料に壺をさかさにして付け掛けした可能性を考えられる。

IV F 3 体部中央部に最大径をもち、頸部の広い特徴がある。頸部に沈線、全面にミガキを施す (163)。163は頸部付近の内外と外面底部付近に黒色塗布の行われた可能性があり、光沢を呈している。断面には外傾接合と見られる接合痕がある。沈線は四角に張り太い。

IV F 4 体部中央部に最大径をもち、頸部で屈曲しやや外反して立ち上がる。口唇部は丸みをもつ片口をつくっている。頸部には平行沈線を施し、その他にはミガキを施す (195)。195は底部と体部に火漆を認める。口縁部の内外と表面体部の間に黒斑を認める。沈線は丸く太い。

IV F 5 体部上位に最大径をもち、頸部から口縁部までは直立する (196・212)。212は口縁部から頸部にかけて、平行沈線と貼瘤をもち他はミガキを施す。内面において1本の沈線文をもつ。また、最大部のやや上位から頸部の始まる部分までは、幅約1cmで横に稜をもつながら長さ5cm内外の範囲に指頭圧痕が連続し、かつ放射状に認められる。体部の内面には炭化物が付着している。沈線は断面が三角形を呈し太い。

IV F 6 体部中央部やや上位に最大径をもち、頸部は内傾して口縁部で直立する。口縁部と頸部屈曲部には平行沈線をもち、口縁部では大きな貼瘤とその中に縦位の沈線を施している。外面は全面にミガキを施す (625~627)。すべて同一個体で、沈線は丸くやや細い。

IV F 7 首のない無頸壺で体部の中央部に最大径をもち、そこから口唇部までは内弯して立ち上がる。外部全面には繩文を施す (119)。119は内面に丁寧なミガキを施す。

IV F 8 壺と考えられるものを一括した(127・628~636)。体部上位に変形工字文をもつもの (632・635) や口縁部が波状を呈するものがある。636は大型の壺胴部破片で頸部付近のものと考えられる。縦位の沈線3本が確認でき、その上部に横位の列点文を施す。

IV群G類 高环である。

IV G 1 内弯して立ち上がる体部は上位で丸みを沿び、口縁部では外反する。脚部は円筒状を呈している。体部に平行沈線、変形工字文、貼瘤をもつ他はミガキを施す (637)。637は突起が6単位で、波頂部は刻み状の沈線で2つに分かれる。波頂部間の口唇部には沈線を施す。内面には1条の平行沈線と底部中央に円形の沈線文の痕跡が認められる。沈線は丸くやや細い。

IV G 2 内弯して立ち上がる体部は上位で丸みを沿び最大径となる。口縁部は直立し、脚部は大きく外反する。体部は上位で平行沈線、変形工字文、下位には繩文を施す。脚部には平行沈線と無文帶をもち、繩文施文部以外はミガキを施す (199)。199は脚部に2つの無文帶をもつ。また、内面には1条の沈線と底部中央に円形の沈線がある。繩文は斜位で横位に近い展開を示す。沈線は断面が三角形を呈し太い。

IV G 3 内弯して立ち上がる体部は上位で丸みを沿び最大径となる。口縁部は直立し、脚部はやや外反する。体部は上位で平行沈線、変形工字文、貼瘤をもち、下位には繩文を施す。脚部には、平行沈線と無文帶をもち、繩文施文部以外はミガキを施す (639)。639は脚部に2~3の

無文帶をもつ。内面には一条の平行沈線をもち、全面が黒斑している。繩文は斜位で横位に近い展開を示す。沈線は断面が三角形を呈し太い。

IVG 4 直線的に立ち上がる体部は上位で丸みを沿ひ最大径となる。口縁部は直立する。脚部はわずかに外反し、中央が少し膨む。文様は体部下位の繩文を除き、平行沈線、変形工字文、貼瘤文、三角文、刺突文を施す(638)。638は脚部で正三角文と逆三角文を交互に配しそれぞれ4単位となり、それら三角文の中に先端の鋭利な工具による刺突文を充填させる。全面に黒斑がおよび、胎土は粗い。沈線は丸く太い。

IVG 5 高坏と思われるものを一括した(132・161・223・224・641～645・647)。223と224は脚部で平行沈線間に波状文を施している。637は変形工字文をもち、内面体部に沈線、底面にも円形の沈線をもつ。640は口縁部が直立し、その直下に最大径をもつ。平行沈線、貼瘤文があり内面は一条の平行沈線がある。641は突起部の区画が横位に入るものである。647は脚部で細く丸い沈線による平行沈線、変形工字文をもつものである。

IV群H類 ミニチュア土器を一括する。

IVH 1 壶形で口縁部はわずかに外反しミガキを施す。胴部には繩文を施す(665)。

IVH 2 壶形で口縁部は外反する。底部は突出し口唇部に2条の浅い沈線をもつ(662)。

IVH 3 壶形で口縁部は外反する。頸部と口唇部直下に沈線文を施す。胴部には繩文を施す。非常に薄いつくりである(666)。

IVH 4 浅鉢形で口縁部は直立しナデを施す。体部には繩文を施す(197)。

IVH 5 鉢形で波状の口縁部をもつ。頸部と底部付近には太い沈線があり、体部には3～4本の細い沈線を施す。体部には繩文をもつ(198)。

IVH 6 壺形で細い頸部をもつ。口縁部には2条の沈線を施す(122)。

IVH 7 壺形で広口を呈している。口縁部はやや外反し、頸部に細くて浅い沈線をもつ(126)。

IVH 8 ミニチュア土器と考えられるものを一括した(663・664)。663は波状の口縁部で、平行沈線をもつ。664は深鉢あるいは壺で、胴部には繩文を施す。底部が厚い特徴がある。

IV群I類 底部を一括した(120・129～131・146・147・181・185・186・210・227・585・587～590・648～661)。

V群A類 壺である。

VA 1 底部が比較的小さい砲弾形を呈している。口縁部は外反し、胴中央部に最大径をもつ。口縁部にはヨコナデ、体部にはヘラケズリを施す。底面に木裏文をもつ(218)。

VA 2 比較的大きな底部破片である(667)。

2. 石器・石製品（第27・29・31～35・37・41～44・63～70図、第20～23表、図版25・29・30・33～36・51～56）

本遺跡からは、石鎌、石槍、石錐、石匙、石篋、鋸齒縁石器、スクレイバーの剝片石器と磨製石斧、打製石斧、半円状扁平打製石器、石錘、円盤状石製品、凹石、磨石、石皿などの礫石器が出土した。スクレイバーの中には、定形的なもの他に二次加工を有する剝片を多く含んでいる。また、凹石で磨り面をもつものは凹石として優先的に分類表記してある。

石鎌 (S 6～S 9・S 12・S 24・S 32・S 33) S 6・S 7・S 9・S 12・S 24・S 32は有茎、S 32は無茎で基部は丸い。S 6の基部やS 12の基部と背面側縁にはアスファルトが付着している。

石槍 (S 34・S 36・S 37) S 34には明瞭な基部があり、S 37はわずかな抉りをもつ。S 34の基部は長さの約1/3があり、基部の末端に抉りをもつ扁平な形態である。S 37は磨滅を示すにぶい光沢がある。

石錐 (S 38) 基部に礫皮面をもつ。刃部・基部ともに二方向からの剝離で、背面刃部左側は背面から・右側は腹面から、基部左側は腹面から・右側は背面からそれぞれ二次加工を施す。刃部は磨耗が著しい。

石匙 (S 39～S 41) S 39は縱長剝片をS 40・S 41は横長剝片を素材としている。S 39は未製品でつまみ部を欠損し、S 41の表面は先行剝離面で平坦面となる。

石篋 (S 42・S 43) S 42は全面に二次加工を施した丁寧なつくりで、S 43は表面に礫皮面を残す粗雑なものである。S 43の両側縁の抉りは素材を生かしたもので、腹面刃部先端はヒンジフラクチャーとなっている。

スクレイバー (S 2・S 4・S 13～S 18・S 20・S 21・S 29・S 30・S 44・S 45・S 48～S 92) スクレイバーを諸特徴によって a～n 類まで分け、それらに該当しないものは o 類として説明する。a 類は S 44・S 45 である。縱長剝片の両側縁に二次加工施す。S 44は背面の上側縁を中心にアスファルトが付着し、対辺を刃部とした扁平なつくりで、にぶい光沢がある。S 45はアスファルトの付着はないが、末端部に二次加工がない、両側縁に二次加工を施す、にぶい光沢をもつ、石材の感じが類似、などの共通点があり同じ類に含めた。b 類は S 21 である。全面に丁寧な二次加工を施す。背面の上側縁の両端にアスファルトが付着し、他の側縁を刃部とした薄手のものである。c 類は S 48・S 49・S 55 である。縱長剝片で末端部と両側縁に二次加工を施す末端部の丸いものである。S 48は丁寧な二次加工を施し、S 55は末端部のみ残存する。d 類は S 13・S 51～S 54・S 90 である。縱長剝片の末端部が丸みを沿び、そこと一側縁に二次加工を施す。S 13と S 54は小型で丁寧なつくりである。S 90は末端部が嘴状になっている。e 類は S 50 である。縱長剝片で末端部のみに二次加工を施し丸くなる。未製品と思われる。S 56

は破片であるが本類の可能性がある。f類はS16・S60である。縦長剣片で末端部と一側縁に二次加工を施し、末端部が水平になる。g類はS57・S58である。大きい剣片を素材とし全面に二次加工を施す。S57は二側縁と一側縁に、S58は一側縁と二側縁にそれぞれ細かい二次加工と大きな二次加工を施す。h類はS15である。縦長剣片で末端部と両側縁に二次加工を施す。i類はS17・S18・S29・S59・S61～S67である。縦長剣片で両側縁に二次加工を施すもので、特に丁寧なもの（S18・S61・S64～S67）と礫皮面のある粗雑なもの（S17）がある。S62は欠損部が大きいがこの類に含めてある。S66とS67は末端部に石核面をとどめ、S66の背面の剣離の観察から先行剣離は180°転移していることが判る。S61の背面右側刃部とS67の両刃部、腹面にはにぶい光沢がある。j類はS4・S14・S20・S68～S71である。縦長剣片で一側縁にだけ二次加工を施す。礫皮面のつくもの（S69～S71）とそうでないものがある。S70は刃部と表面ににぶい光沢がある。k類はS72～S76である。縦長剣片で末端部が三角状になり、両側縁に二次加工を施す。側縁の二次加工が一方向から施すもの（S72・S73・S75）と方向を違えるもの（S74・S76）とがある。l類はS77・S80である。横長剣片で末端部が三角状になり両側縁に二次加工を施す。m類はS78・S79・S81・S82・S85・S92である。縦長剣片で末端部が三角状になり、一側縁に二次加工を施す。n類はS83・S84・S86である。横長剣片末端部に二次加工を施す。S83は刃部が鋸歯状を呈している。o類はS87・S88・S91であり、上述の分類に含まれないものを括した。S87は縦長剣片で両側縁と末端部、それに正面上面左縁に二次加工を施すもので、上部と末端部が欠損している。S88は縦長剣片で二側縁に二次加工を施すもので、二次加工は一方向と二方向とがある。S91は縦長剣片で二側縁に二次加工をもつが一側縁が鋸歯状を呈している。全面ににぶい光沢をもつ。S89は横長剣片で、末端が大きく抉られた三角状を呈している。三つの縁辺に二次加工を施す。二次加工は末端部と右側縁では腹面から、左側縁では背面から施している。

鋸齒縁石器（S35・S46・S47）素材の厚い剣片の側縁に、大きな鋸齒状の二次加工を施すものである。すべて縦長剣片である。S35は石錠状の形態を呈するもので、この形態では刃部と考えられるところに大きな鋸齒状の二次加工を施し、一応この分類に含めた。S46は末端部背正面左側縁にそれぞれ1、3と大きな二次加工を施す。S47は背面が平坦で、末端部に4つの大きな二次加工を施す。

磨製石斧（S5・S10・S11・S93～S98）S96を除いた他は定角式である。a～e類に分けて考えられる。a類はS10・S94で両側縁が平坦な楔形である。刃部はS10では偏刃に近く、S94では円刃である。S10では片面の左側に3箇所のアスファルト痕跡を認める。S94は片面茎部下方に敲打痕をもつ。b類は両側縁が平坦であるが短冊形に近い形態で、刃部の縦断面は一方に偏じる片刃の円丸である。c類はS95で、両側縁はいくつかの平坦な面を成す短冊形で

ある。刃部は刃こぼれが著しい片刃である。茎端には敲打の後調整を施した2つの痕跡面がある。表面茎部の上下・裏面茎部の上位（この場合右に寄る）に敲打状の瘤みをもち、正面右側縁の下と左側縁の上に強い擦痕、正面右側縁の上と左側縁の下に弱い擦痕を認める。また、裏面の側縁沿いには、二本の擦痕が中央部に集中するよう認められる。これらは、縦斧の装着技法を示すと考えられる痕跡である。d類はS96～S98で両側縁が丸みを浴び、刃部が両面の円刀となる撥形である。S97・S98は全面を磨いているが、S96は茎部の側縁方向に丸味を沿ひる曲面と茎部側縁には磨きがない。e類は小型の扁平な石斧で、中央がやや抉れる短冊形に近い形態である。刃部の縱断面はやや偏じた片刃で、円刀となる。

打製石斧（S99） 素材が厚く中央部に抉りをもつ形態で、撥形を呈している。刃部の片側に鱗皮面を残す。

半円状扁平打製石器（S100） 特に顯著な二次加工痕と認められず、底部側縁にも顯著な使用痕は認められない。

打欠石錐（S101・S103） 扁平な小型のもの（S100）と大型のもの（S103）に分けられる。S101は二次加工が一方向からのものと両方向からのものとがある。S101では両側縁中央に両方向からの二次加工による抉りがある。また正面左下にも一方向からの二次加工があり、正面右側縁は斜めの素材のもつ抉と対応している。

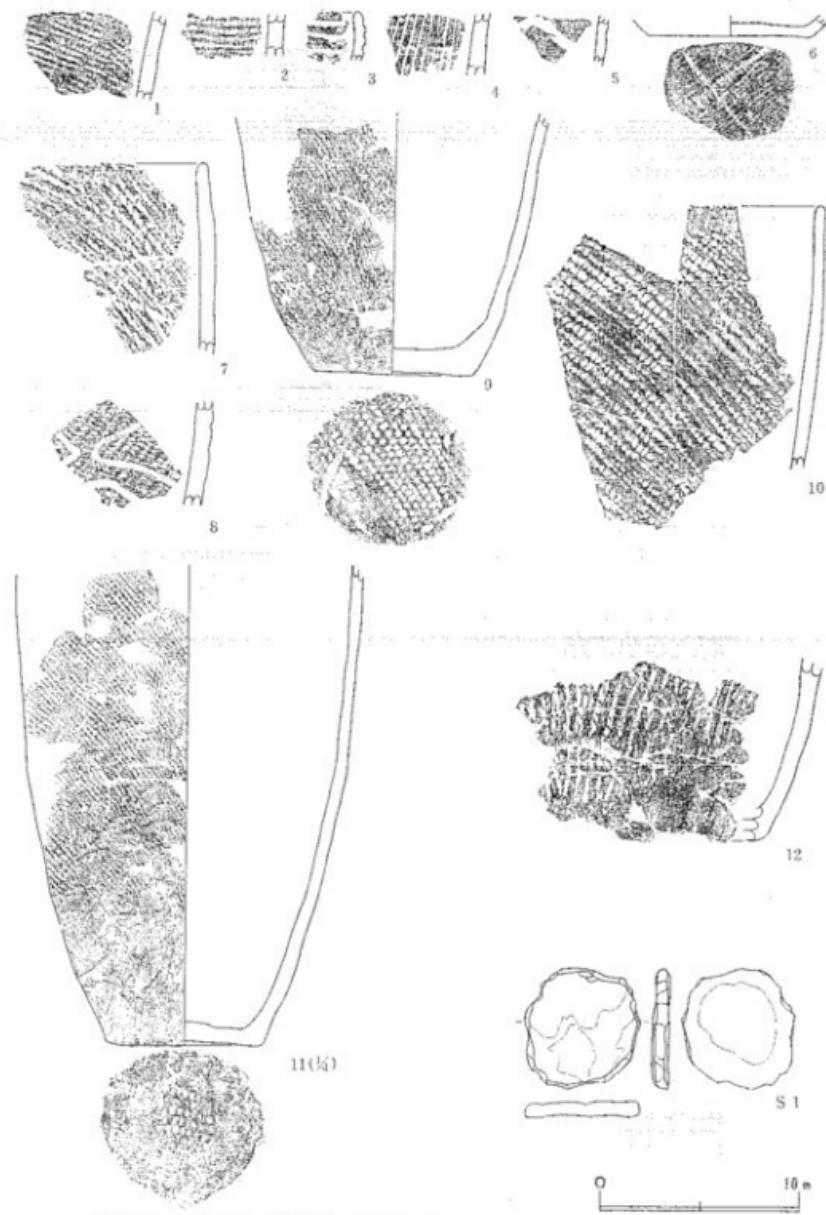
石製品（S102） 底部が平坦な撫形を呈している。口唇部に当る部分は5～7mmと幅がある。全面が擦られている。

円盤状石製品（S1・S104～S111） 径が5cm前後のもの（S1・S104・S109・S111）、径が4cm前後のもの（S108・S110）、径が3cm前後のもの（S105～S107）とに分けられる。両面も縁は磨かれているが、S106のものは特に顯著である。

凹石（S3・S22・S23・S31・S112～S124） 凹石の中には棒状、橢円形、丸形などさまざまであるが、磨石として使用しているもの（S3・S23・S31・S112～S115）とそうでないもの（S22・S116～S124）とがある。凹部は一面に一つのもの、複数のものがあるが、凹部が片側のもの（S112～S115）と両面のもの（S3・S22・S23・S31・S116～S123）に分けられる。画面に凹部のあるものが多く、凹部が片面のものは磨石として使用している傾向にある。

磨石（S19・S28・S125～S131） 磨石の中には丸形、橢円形などがあり、両面使用のもの（S19・S125～S129）と片面使用のもの（S28・S130・S131）がある。両面使用のものが多い。

石皿（S132） 極度の磨滅状態を示している擦面（上面）は、加工の施さない自然の鱗を利用したもので、緩やかな瘤みを示している。下面ではわずかに擦られている。



第27図 遺構内出土遺物(1) S 168・76 S Z19・27・41 S N06・22

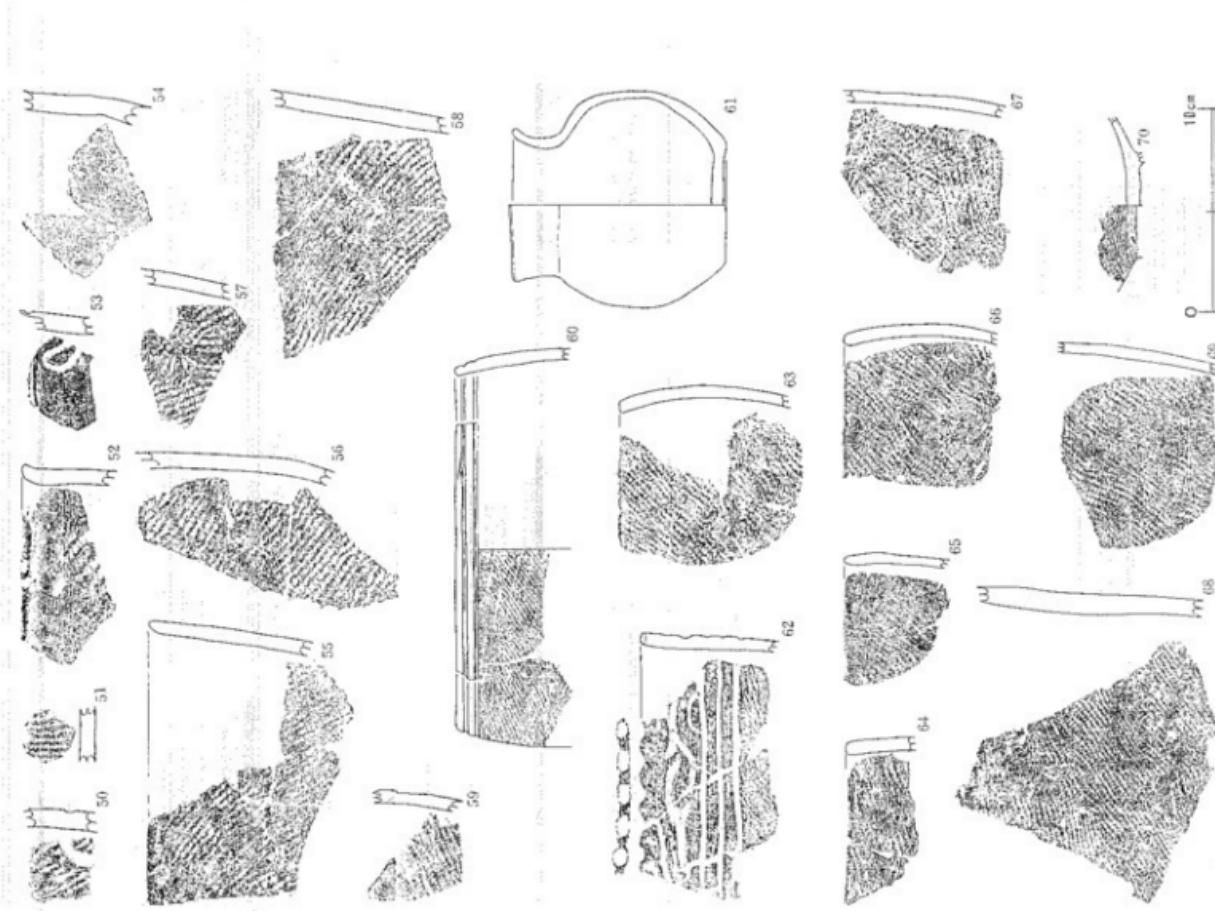


第28図 遺構内出土遺物(2) S Z48・53 S N59 S R05 SK F42

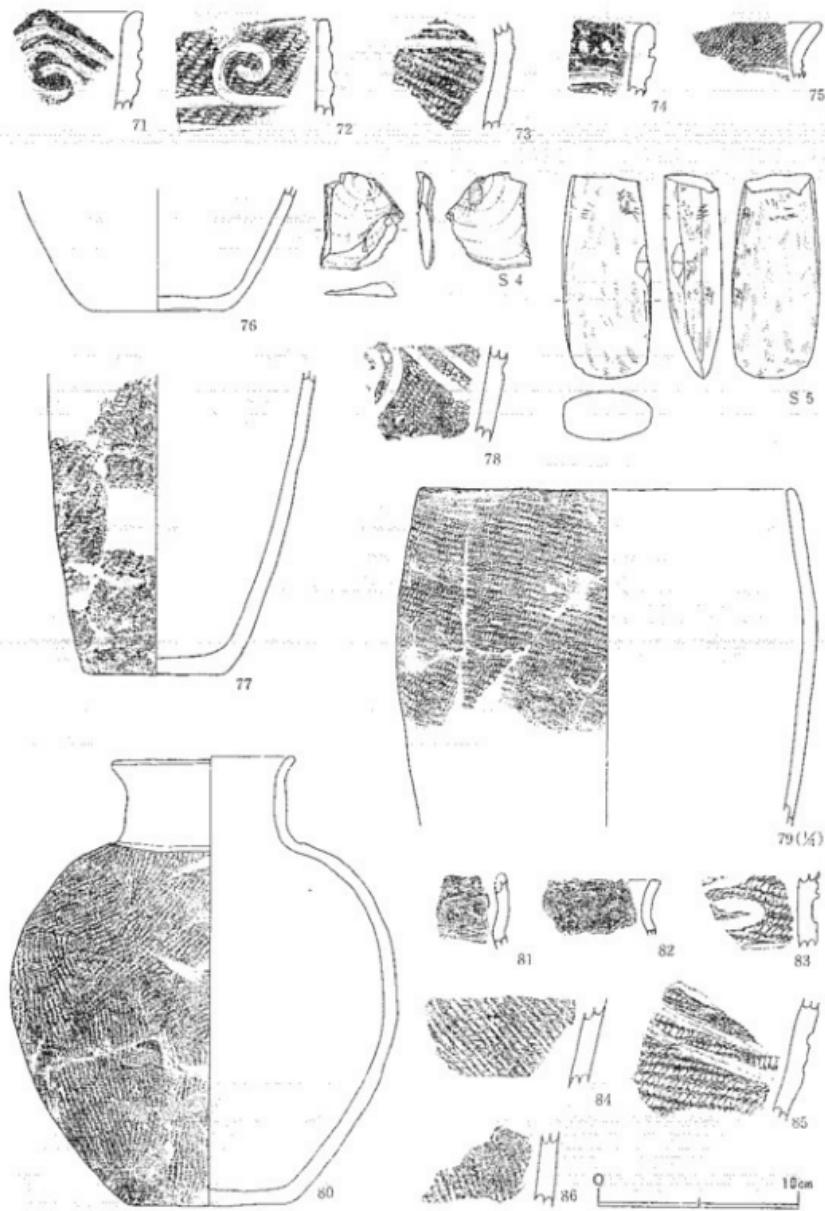


第29圖 遺構内出土遺物(3) SKF 42・44 SK 04

第4章 球差の法則

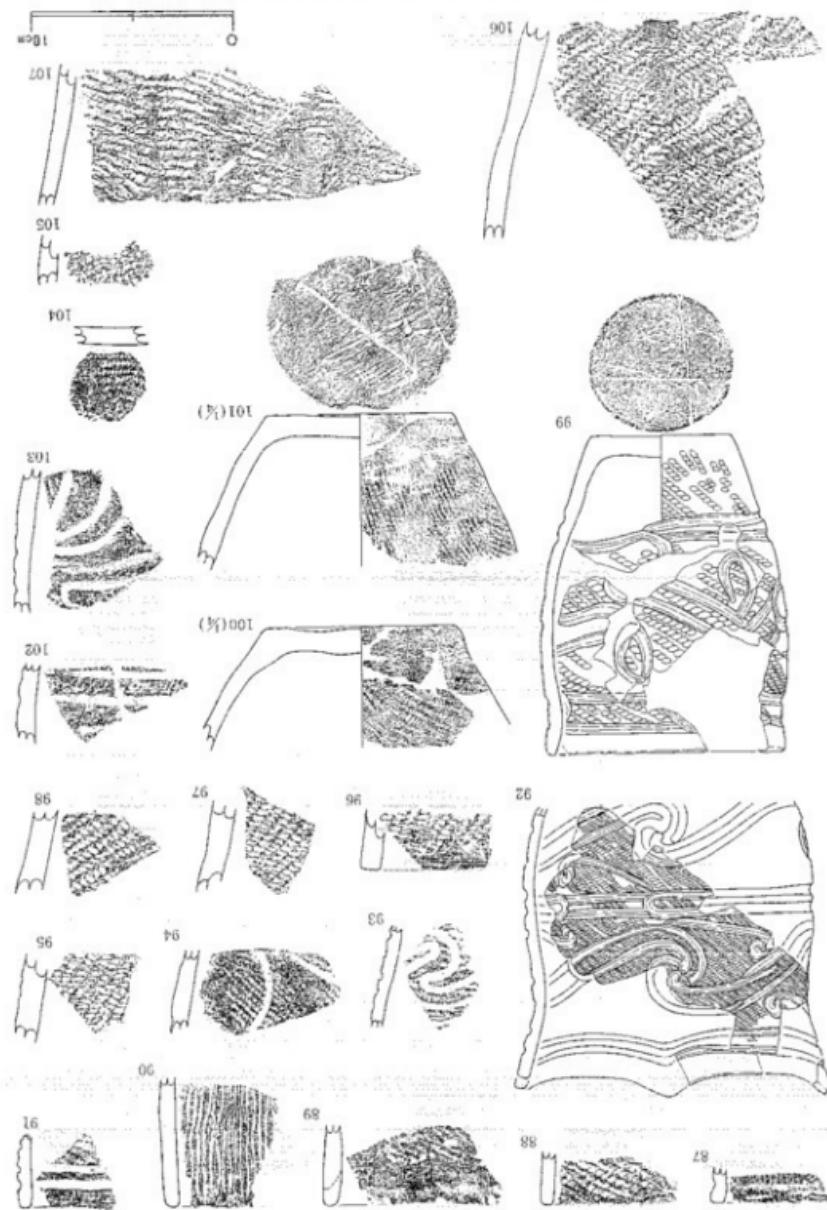


第30圖 遺構內出土遺物(4) SK12~14・20・21・23

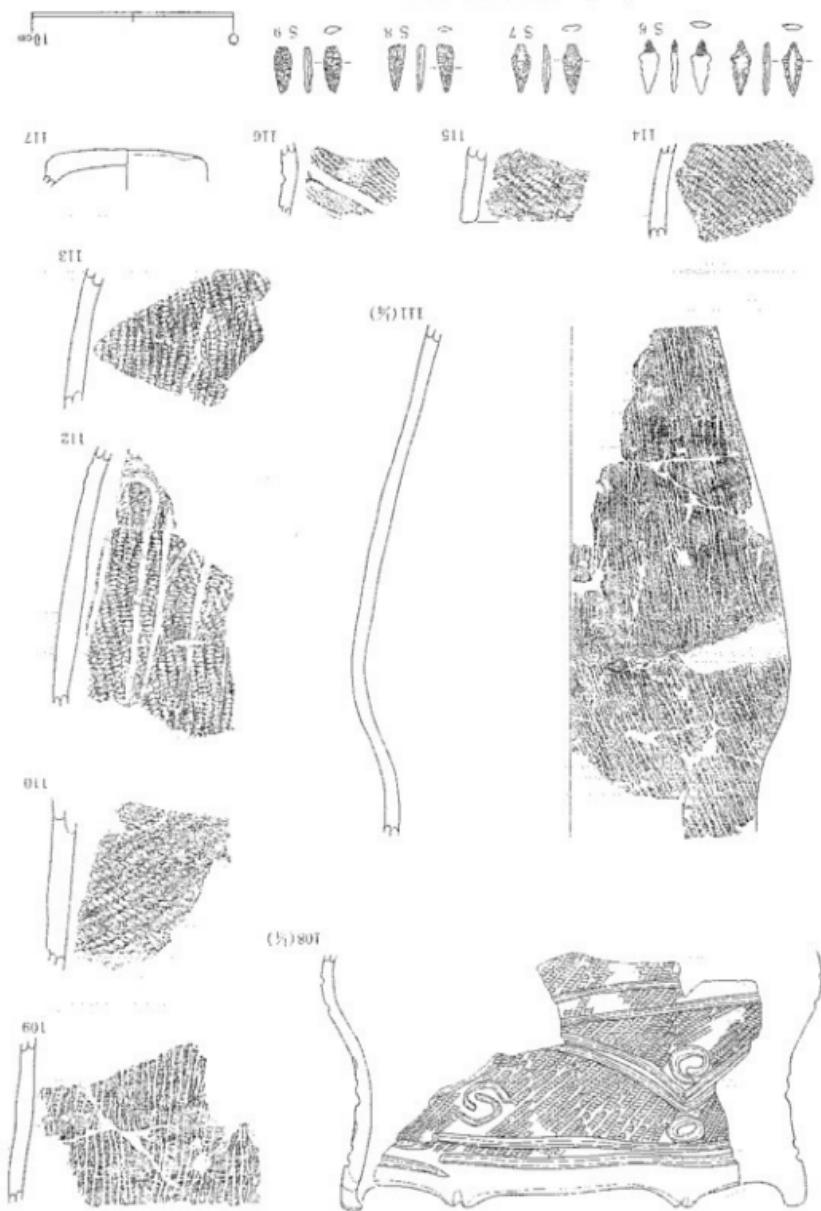


第31図 遺構内出土遺物(5) SK 23~25・29・30

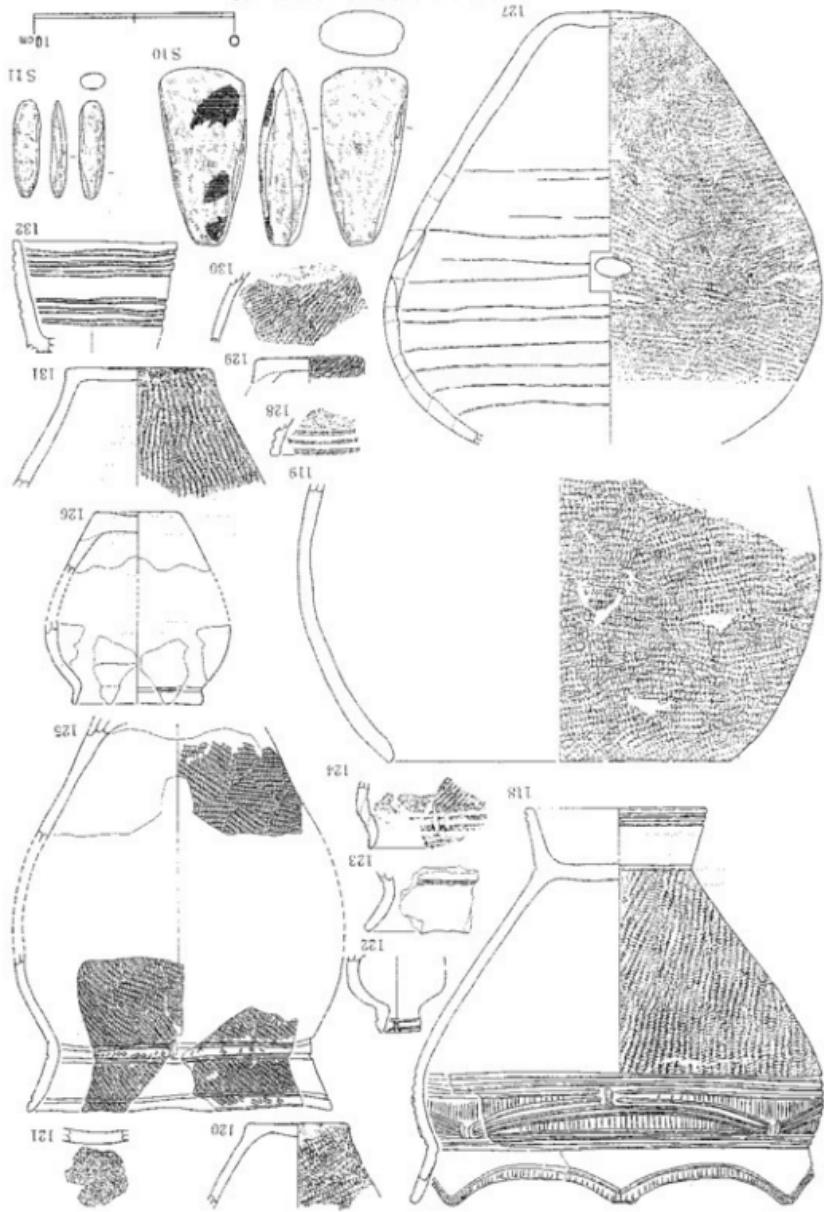
第32圖 遺構內出土遺物(6) S K36・38・40・69



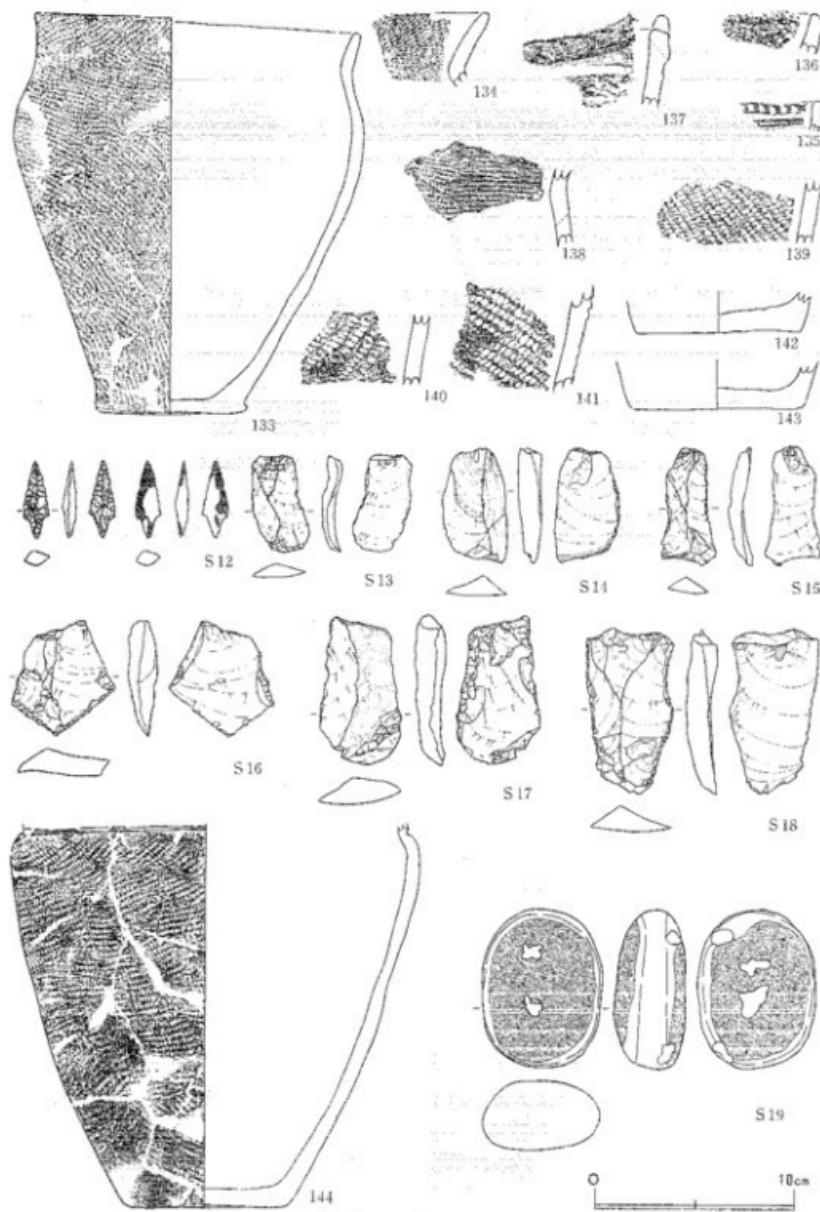
第33圖 遺構內出土遺物(7) S.K58·69·70·79



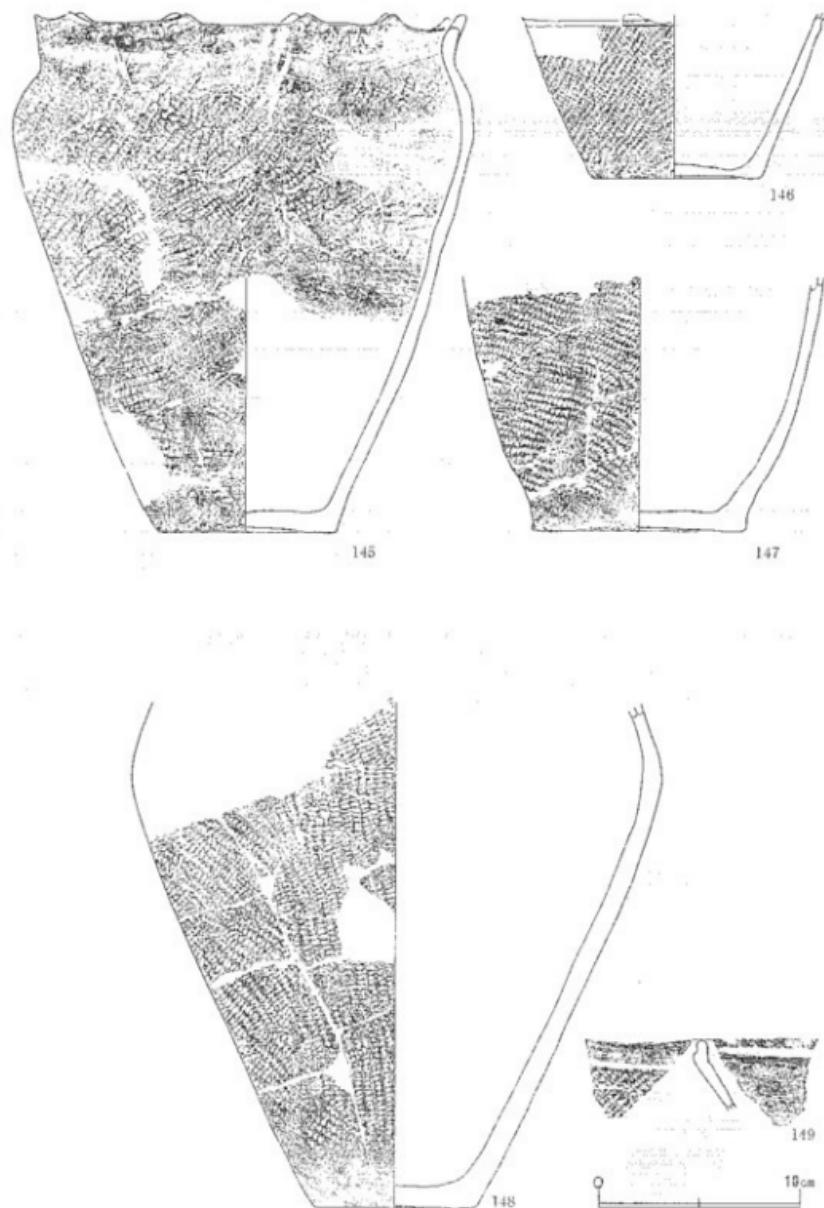
第34回 遺構内出土遺物(8) S | 28 - 33



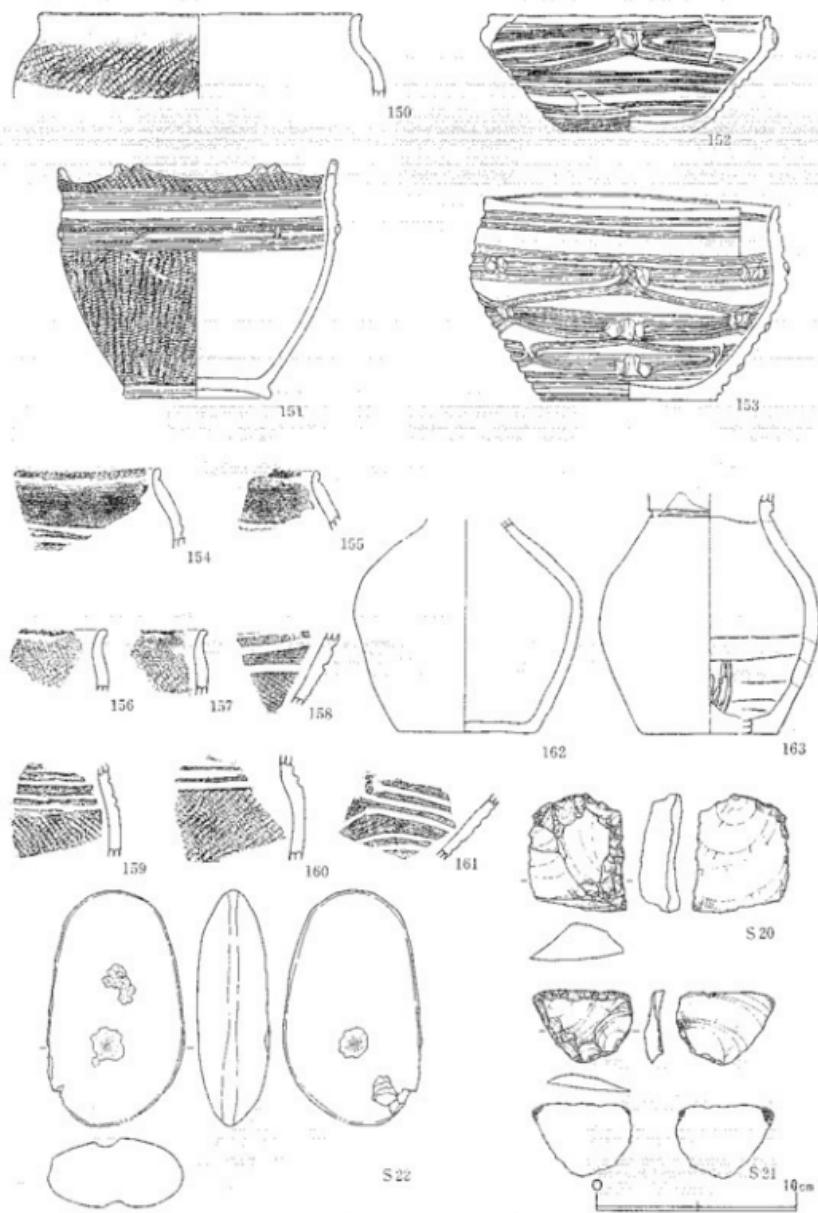
第4章 國會の開設



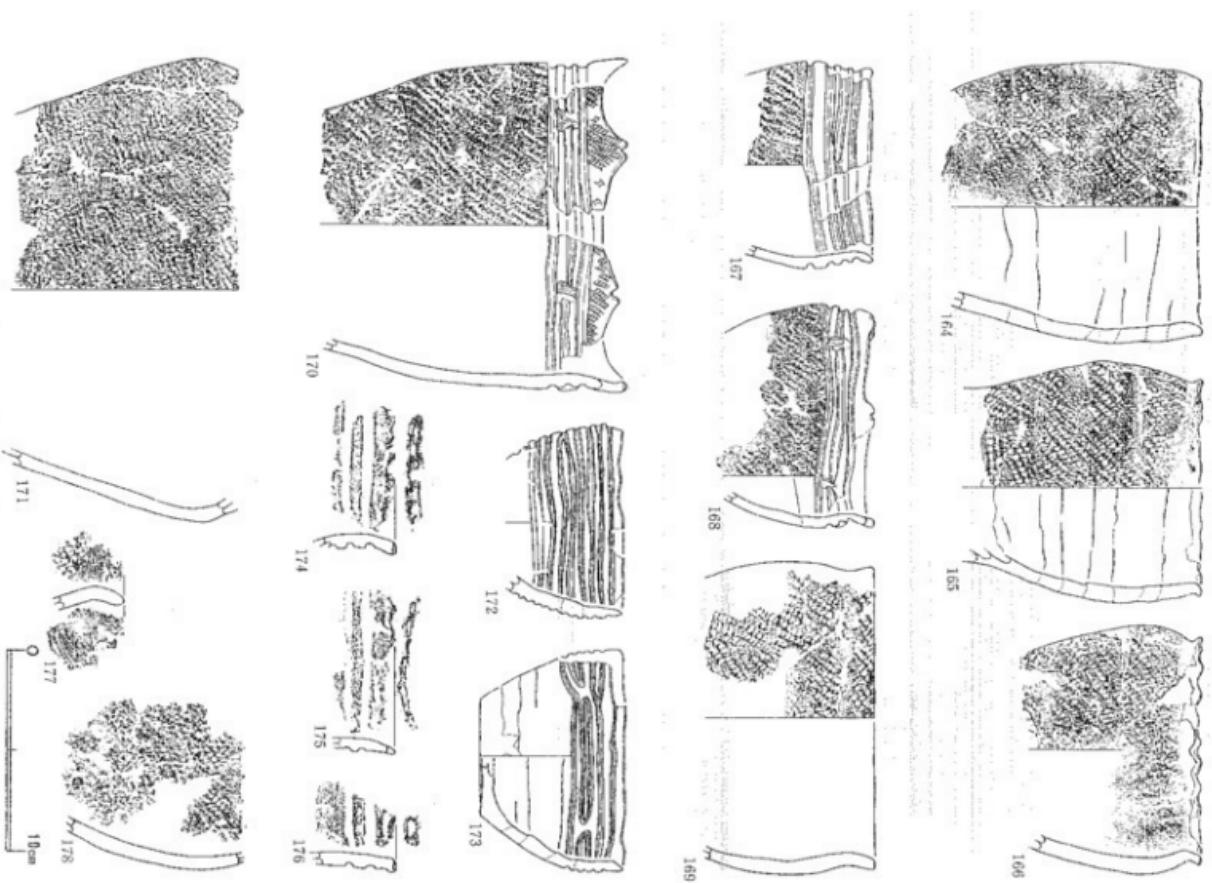
第35圖 遺構内出土遺物(9) S 134・60



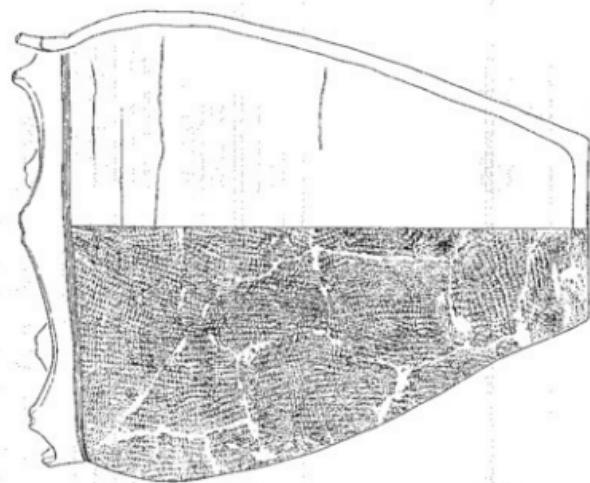
第36図 遺構内出土遺物(Ⅲ) S 160



第37圖 遺構内出土遺物(II) S 160



第38図 通横内出土遺物図 S 161

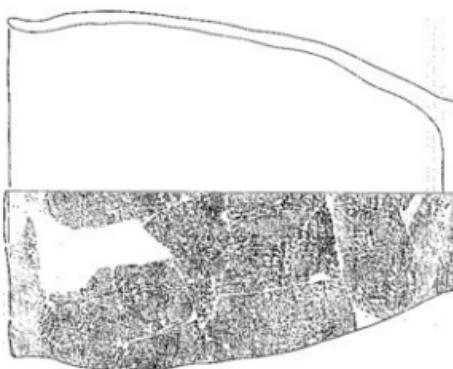


179

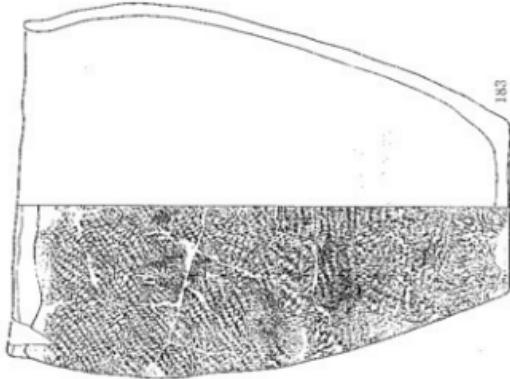


180

182

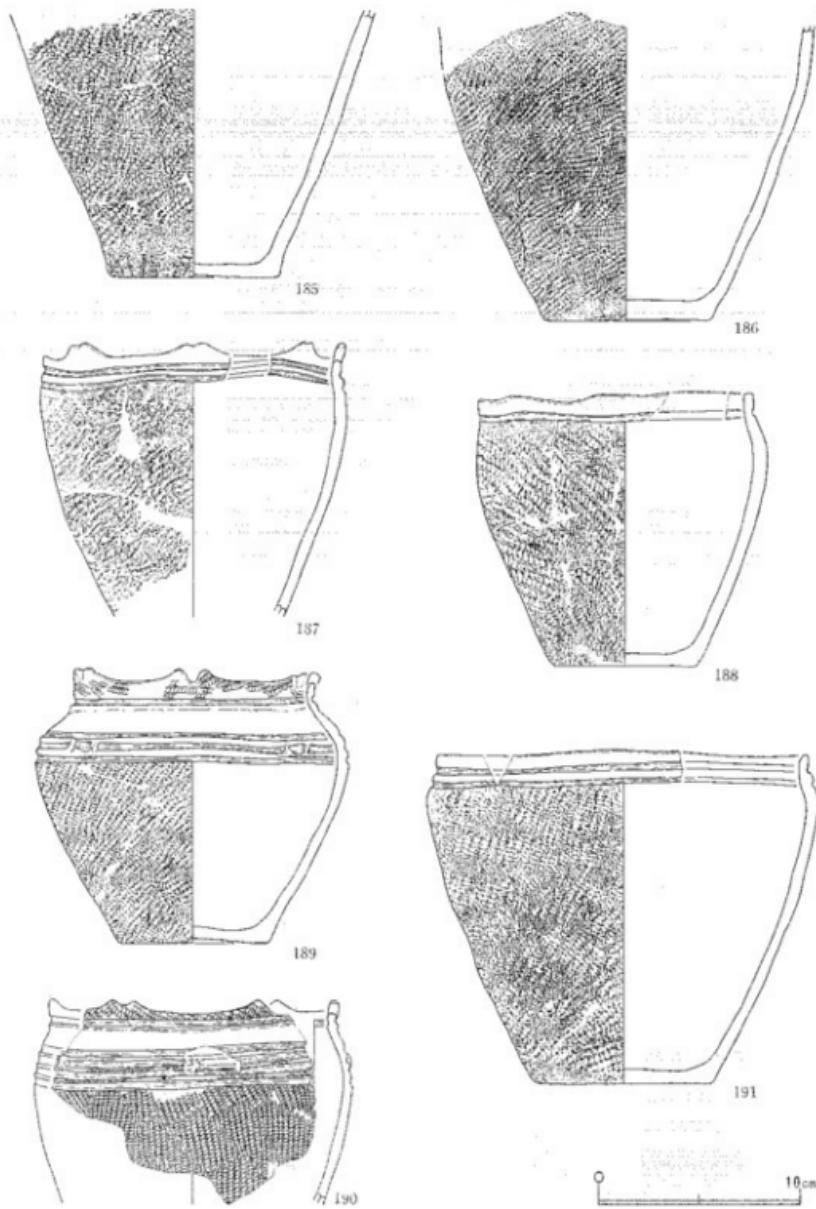


184



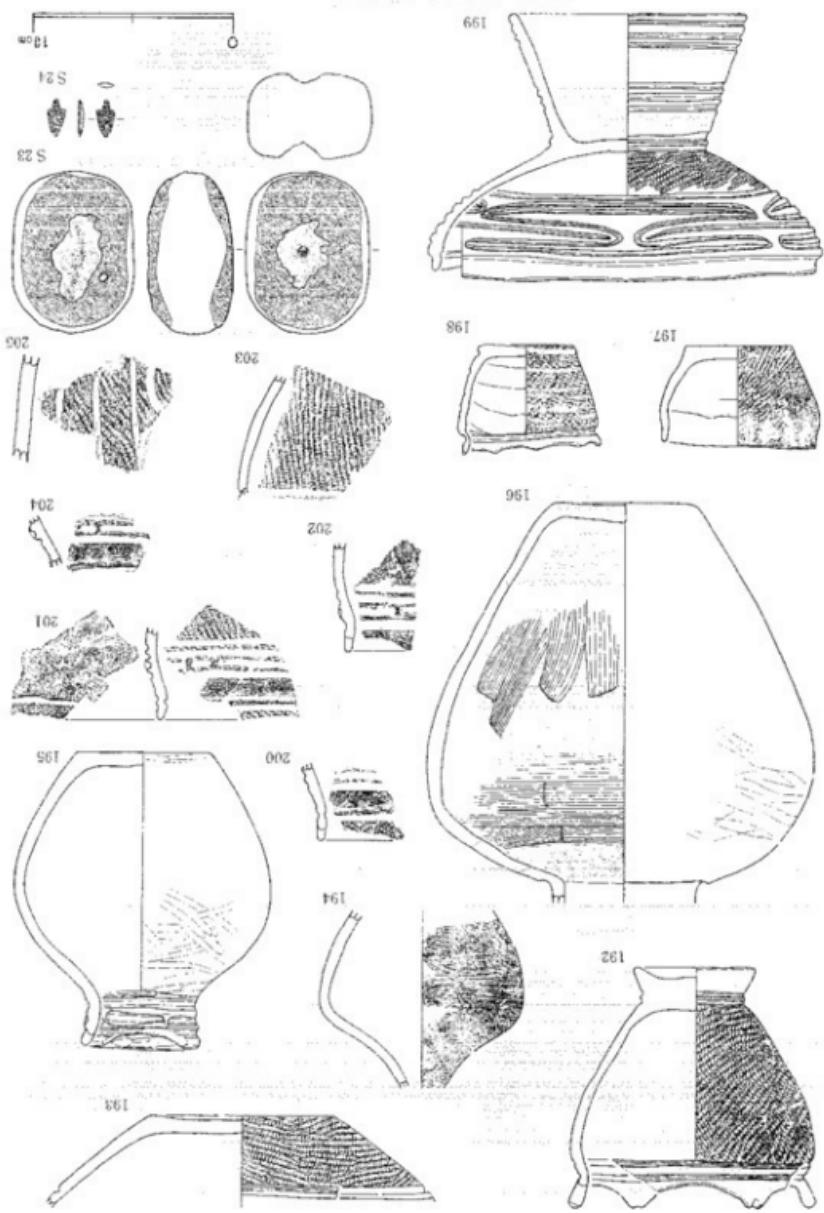
183

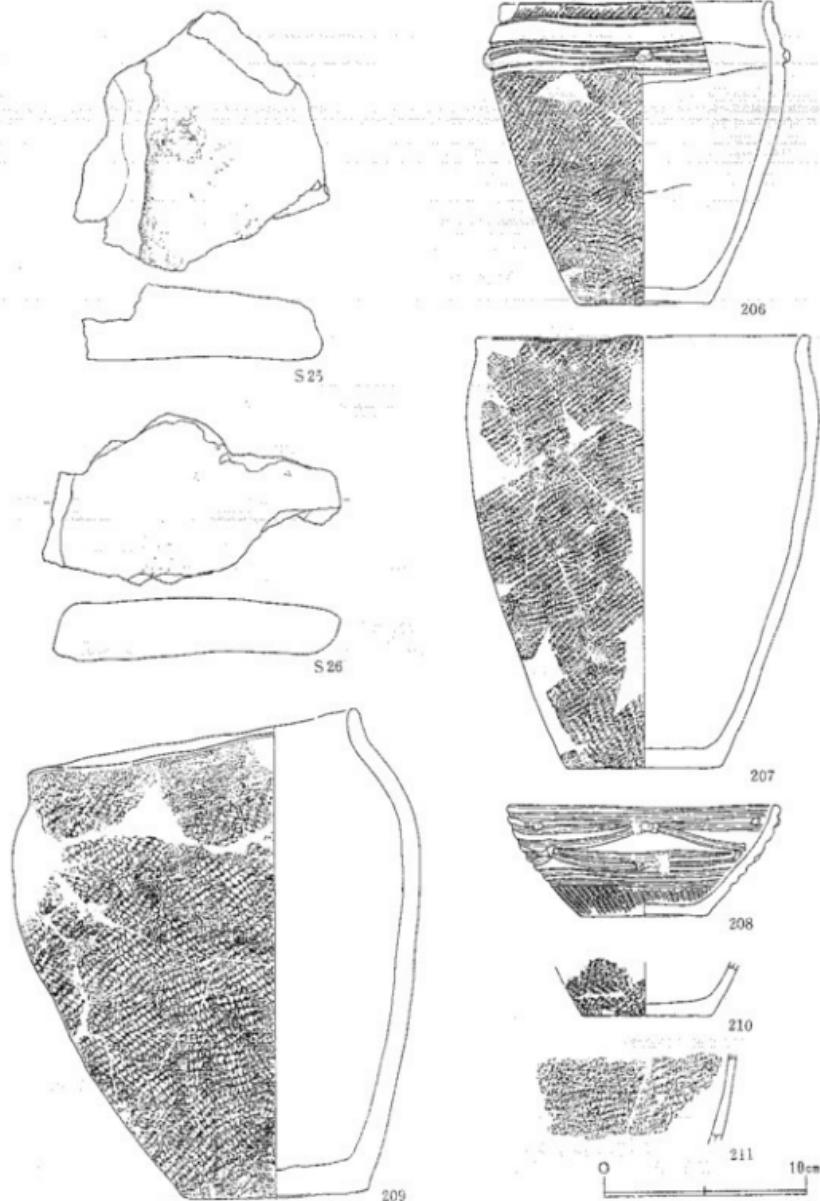
第39圖 道構內出土遺物[1] S I 61



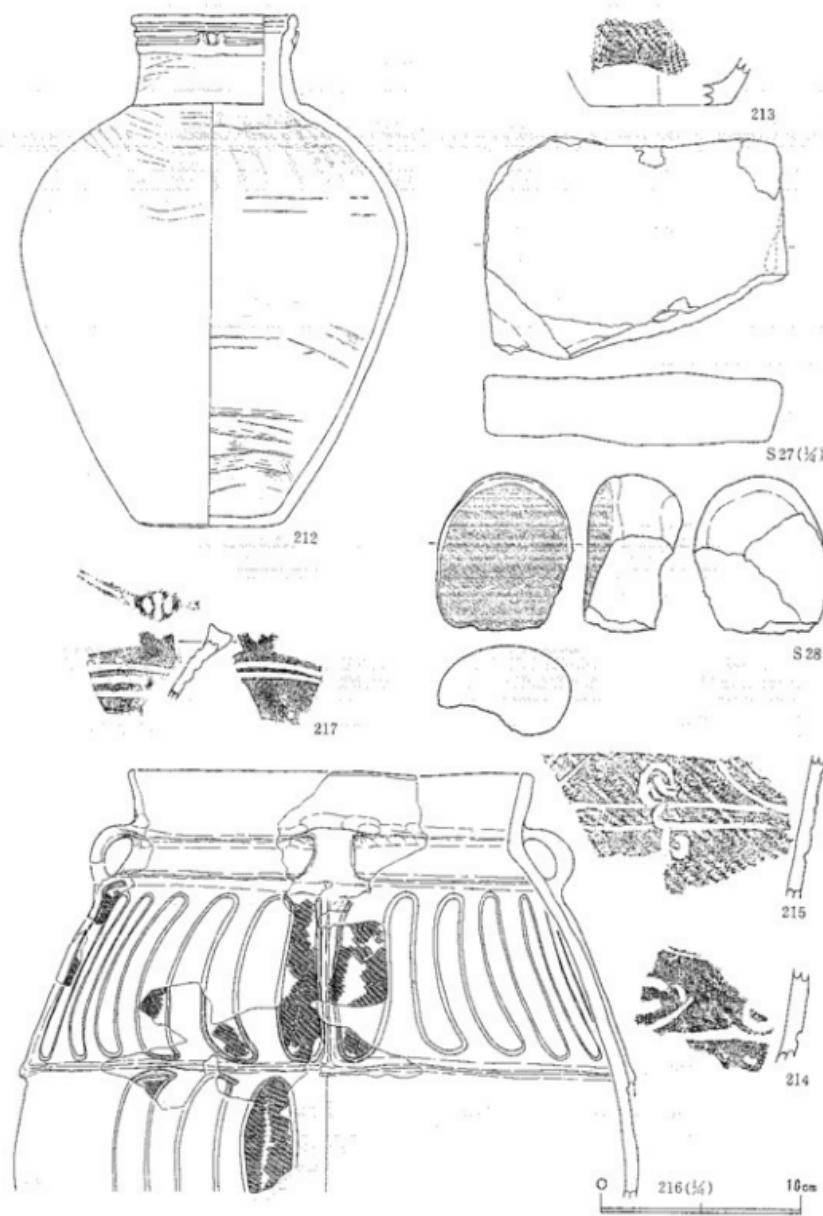
第40図 遺構内出土遺物(14 S 161)

圖41 圖 遺物內出土遺物 161

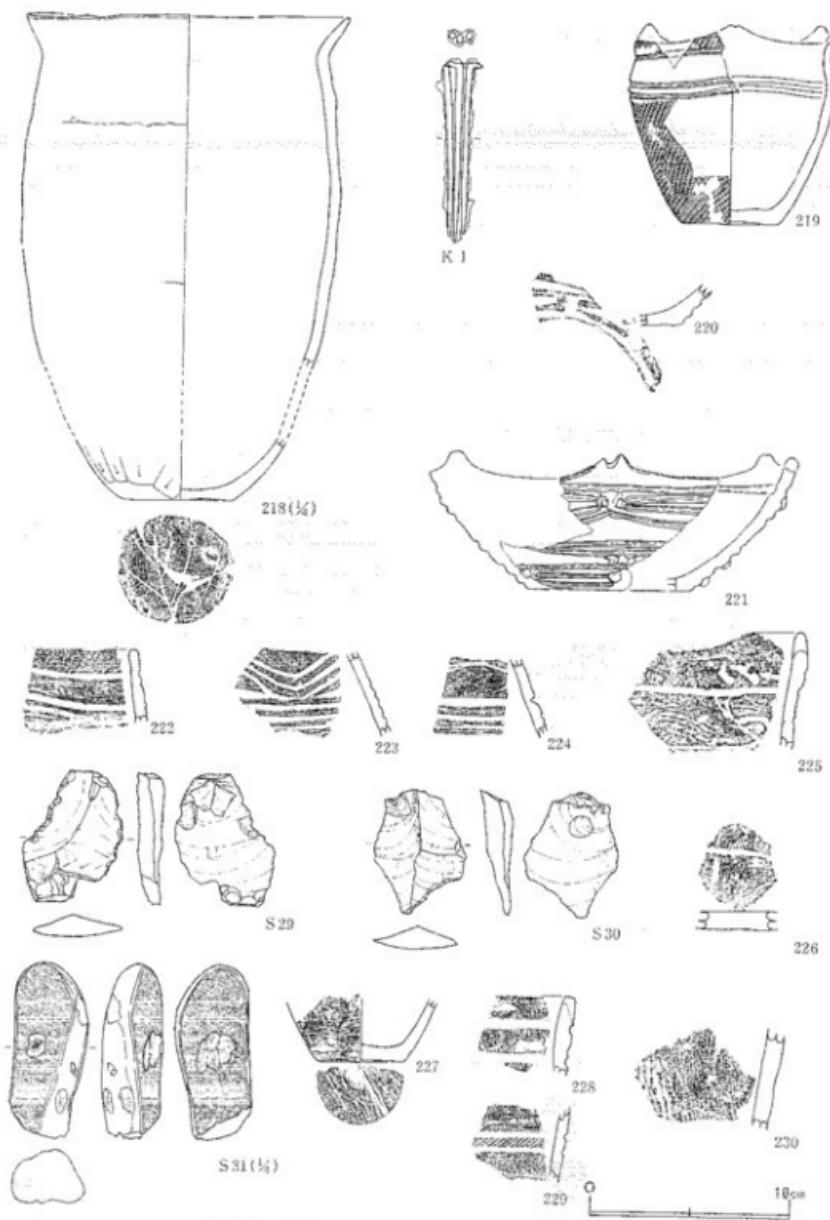




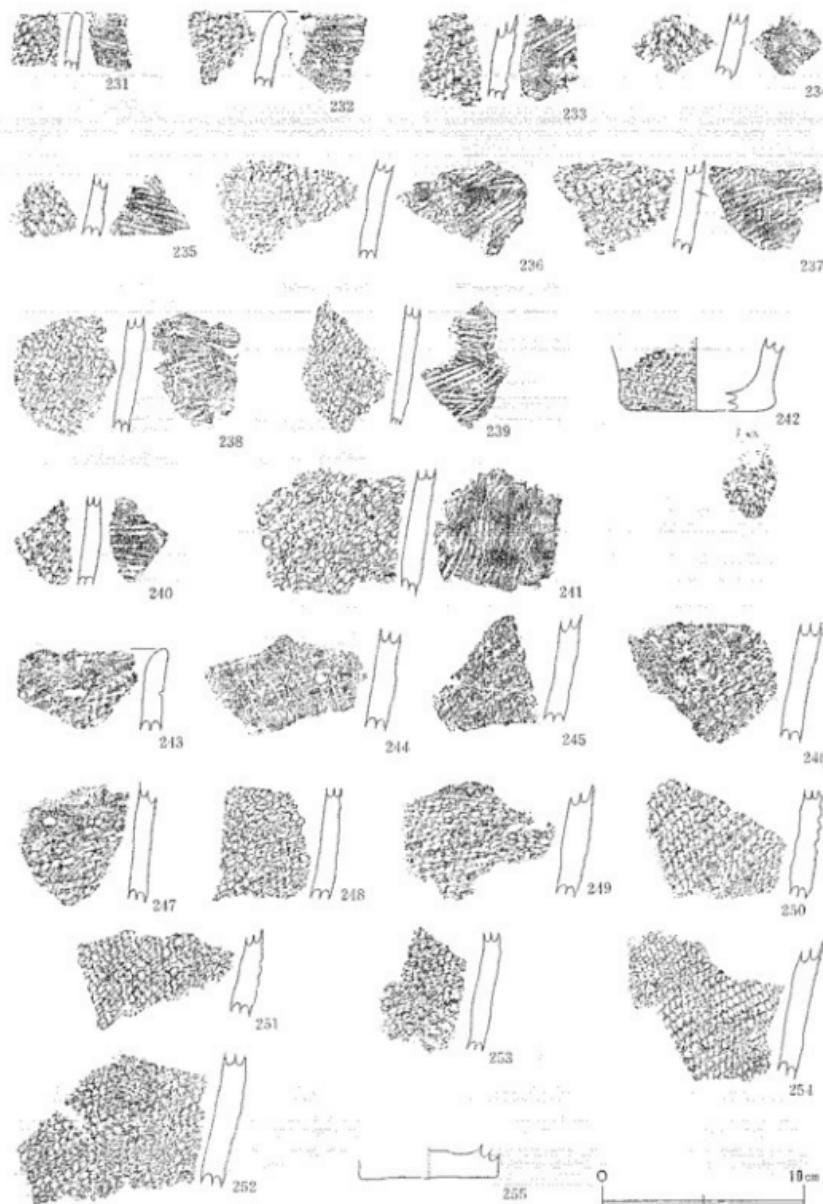
第42図 遺構内出土遺物図 SN 46・47・52



第43図 這構内出土遺物(II) SN52・56 SQ43・49・50

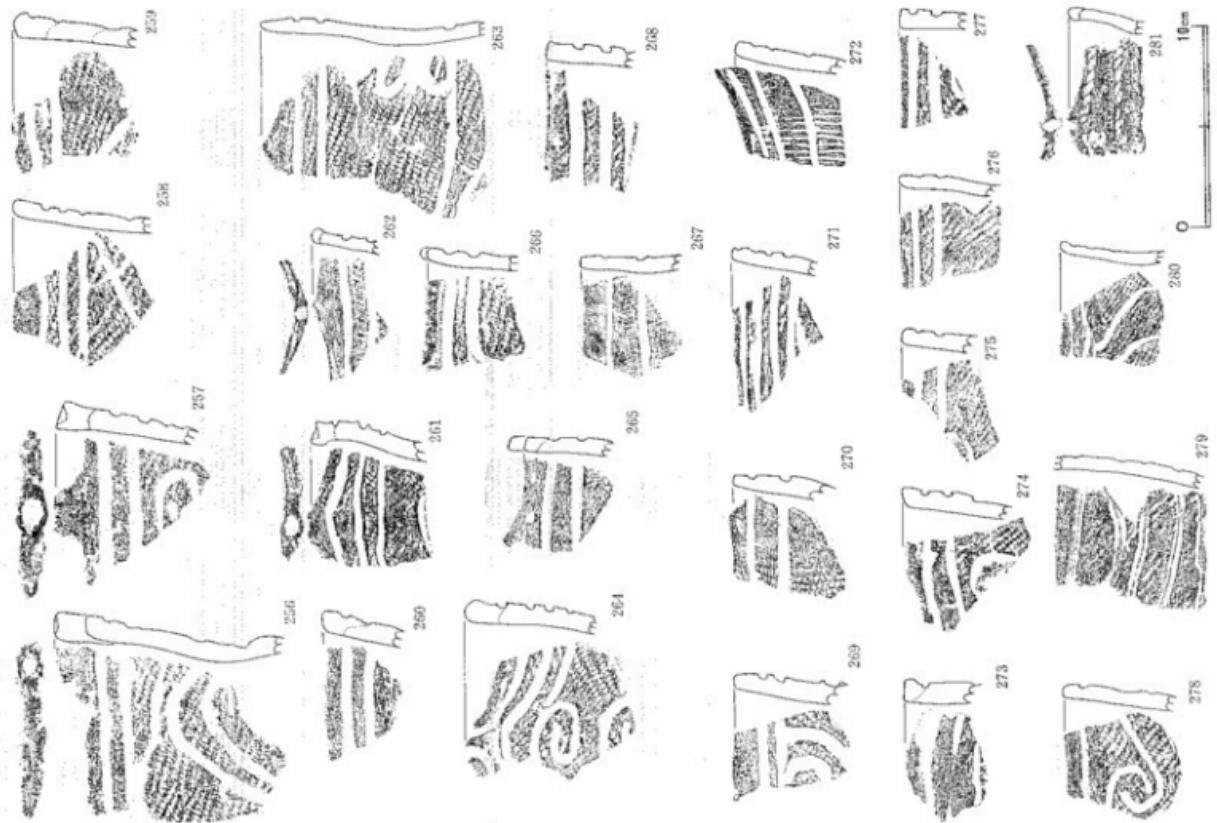


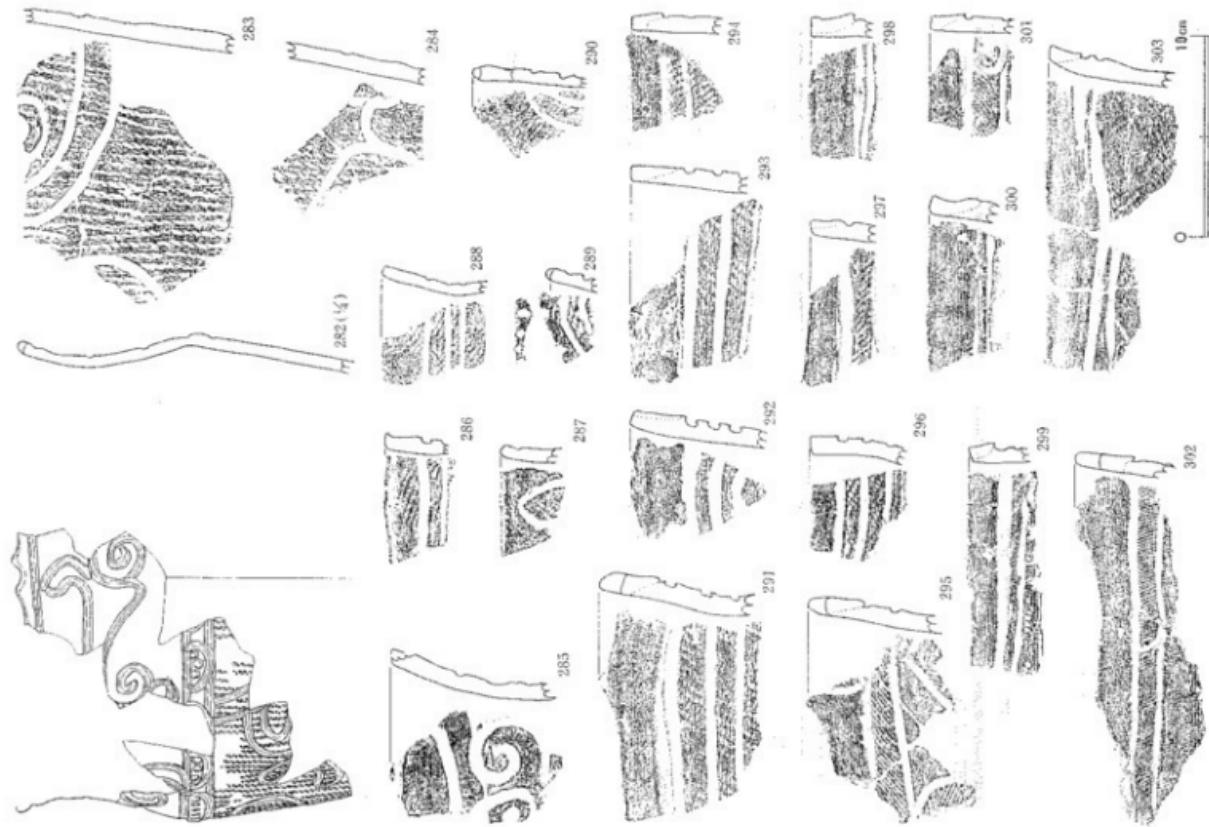
第44図 遺構内出土遺物(Ⅲ) S I 18・32 S X 51



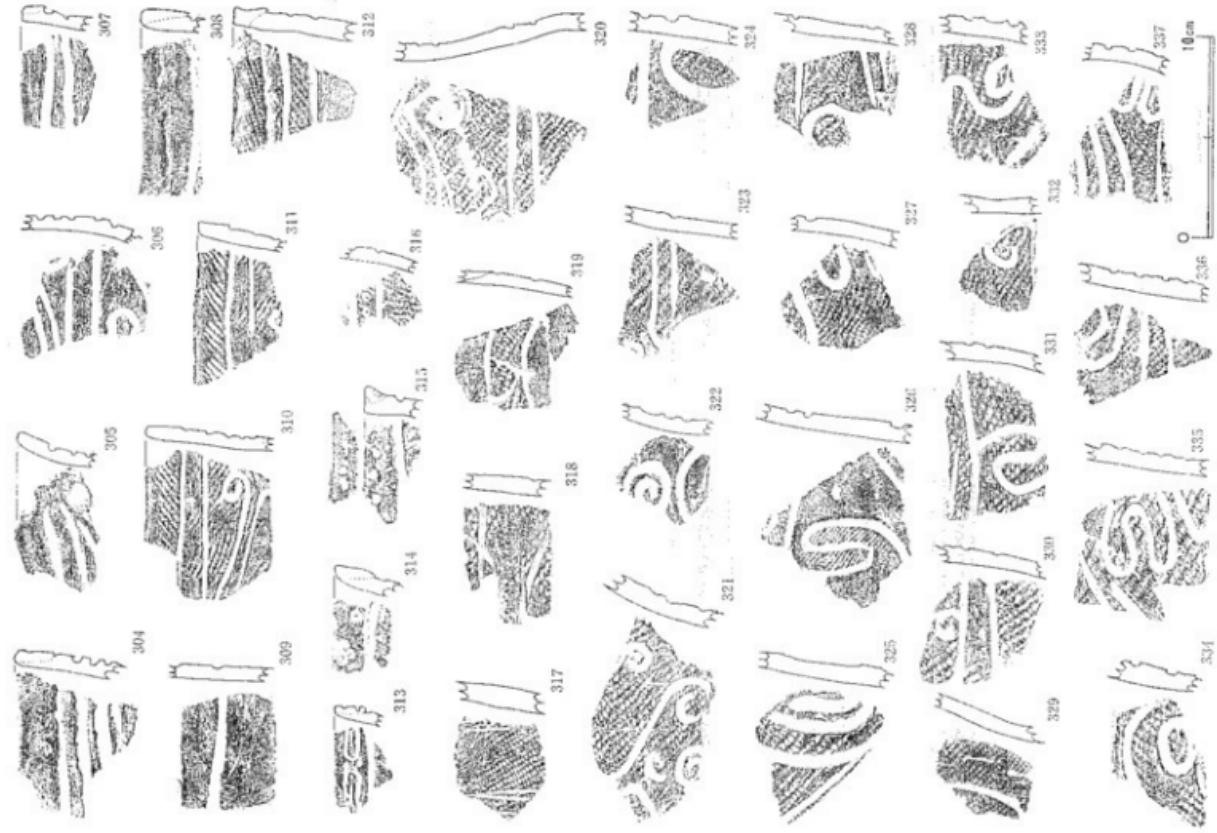
第45図 遺構出土土器(1)

第46図 通横外出土土器(2)

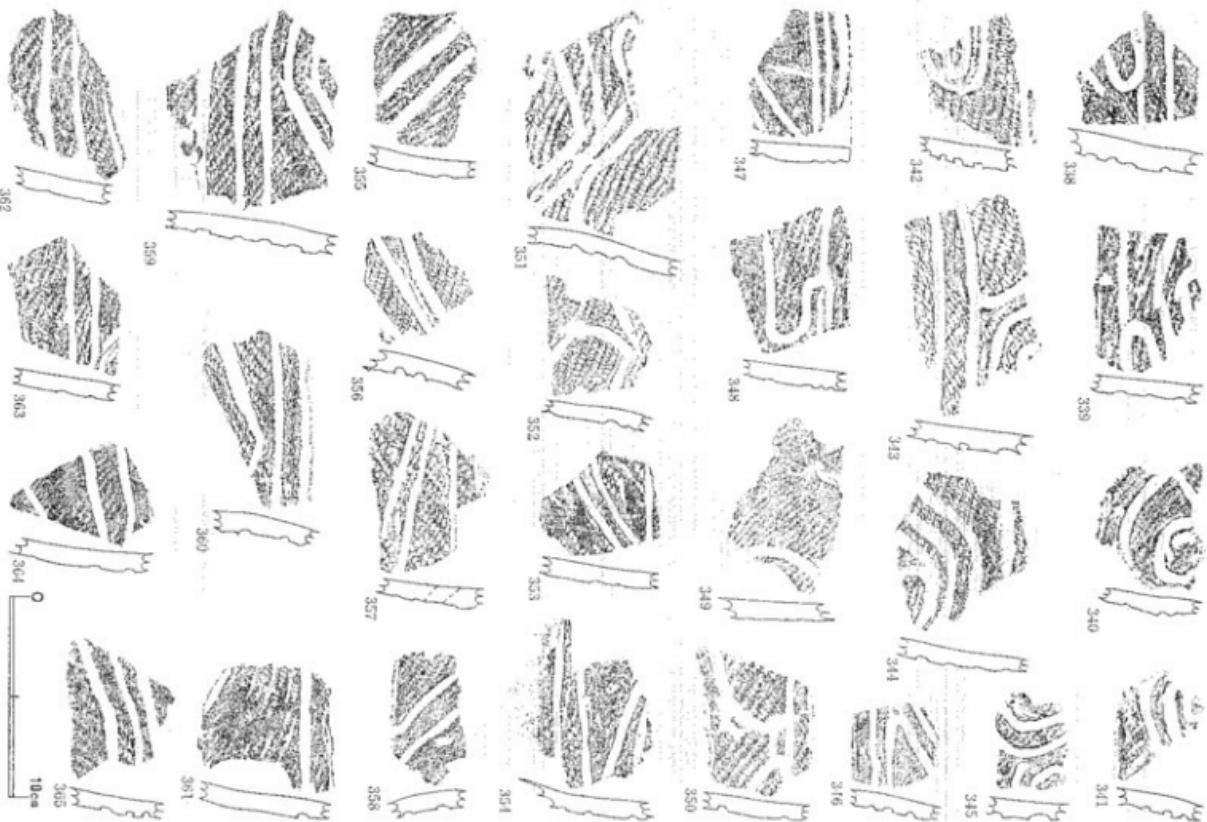




第47圖 遺憾外出土器(3)

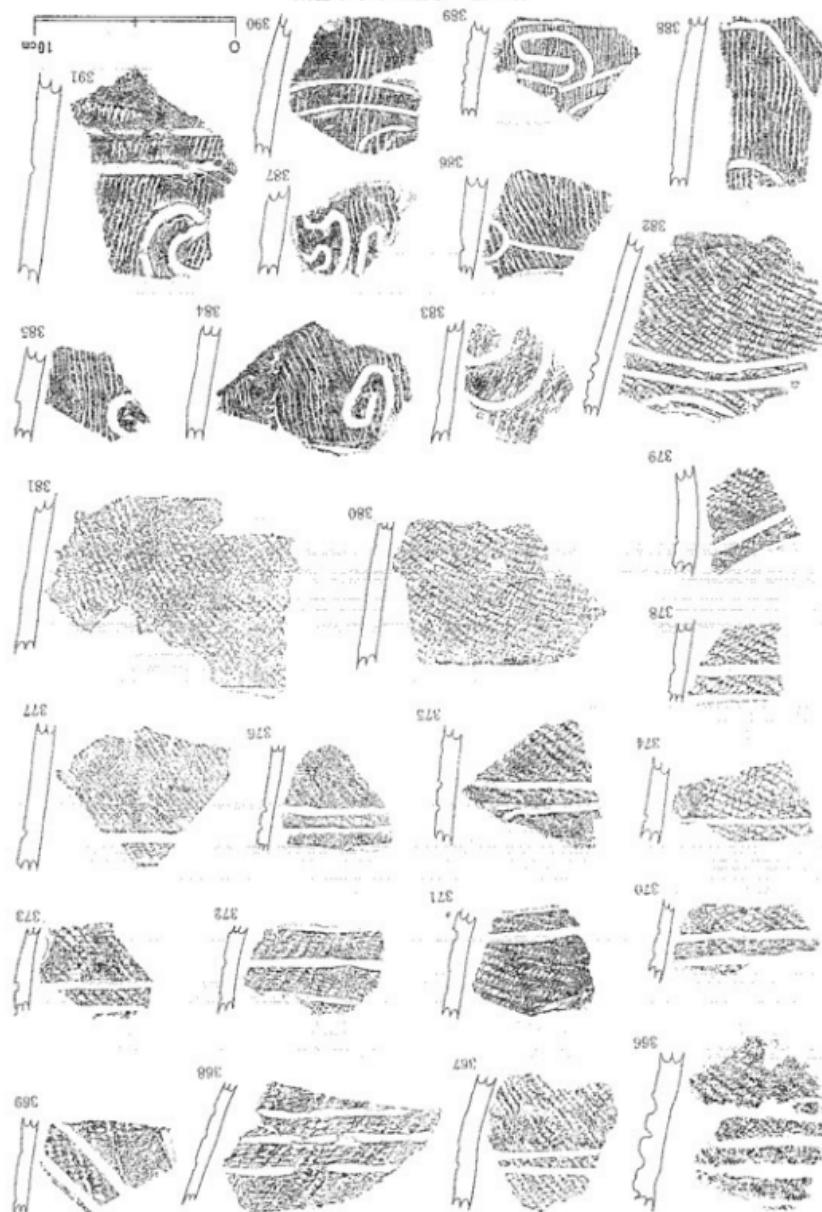


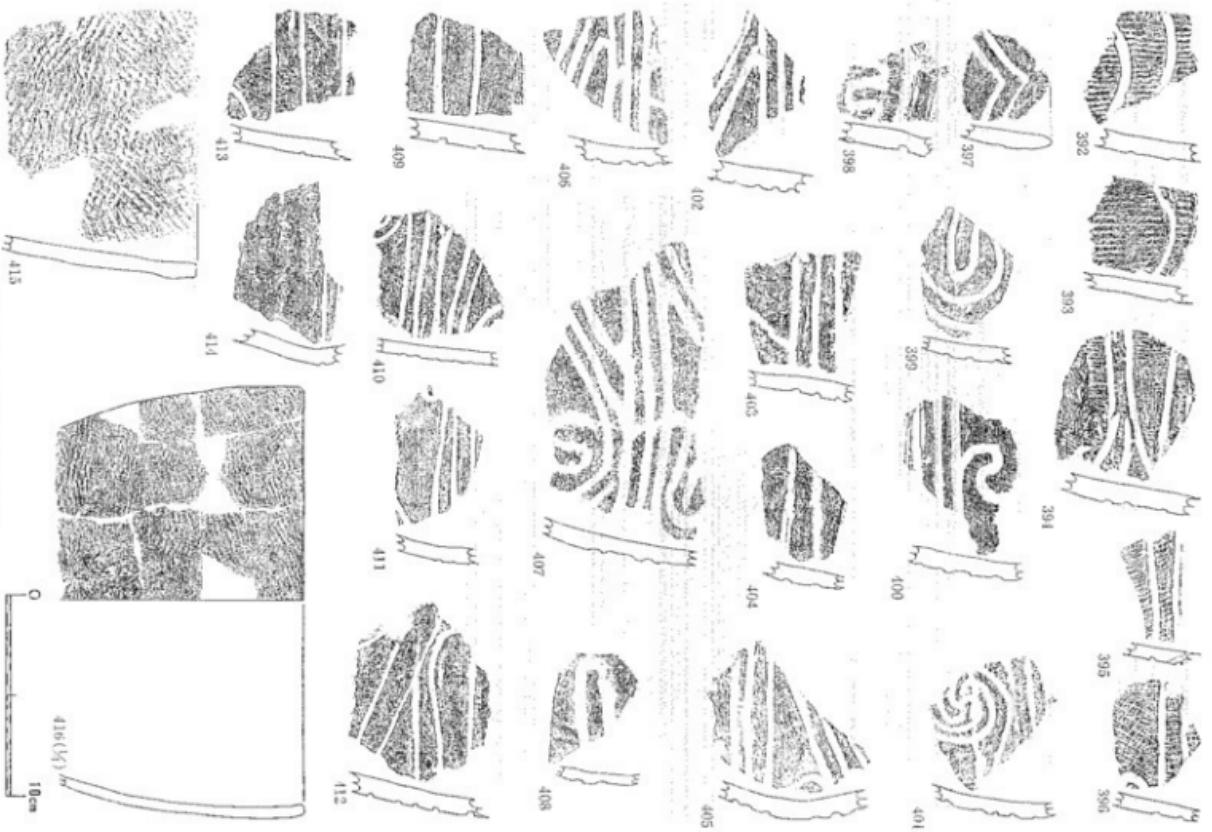
第48図 遺構外出土土器(4)



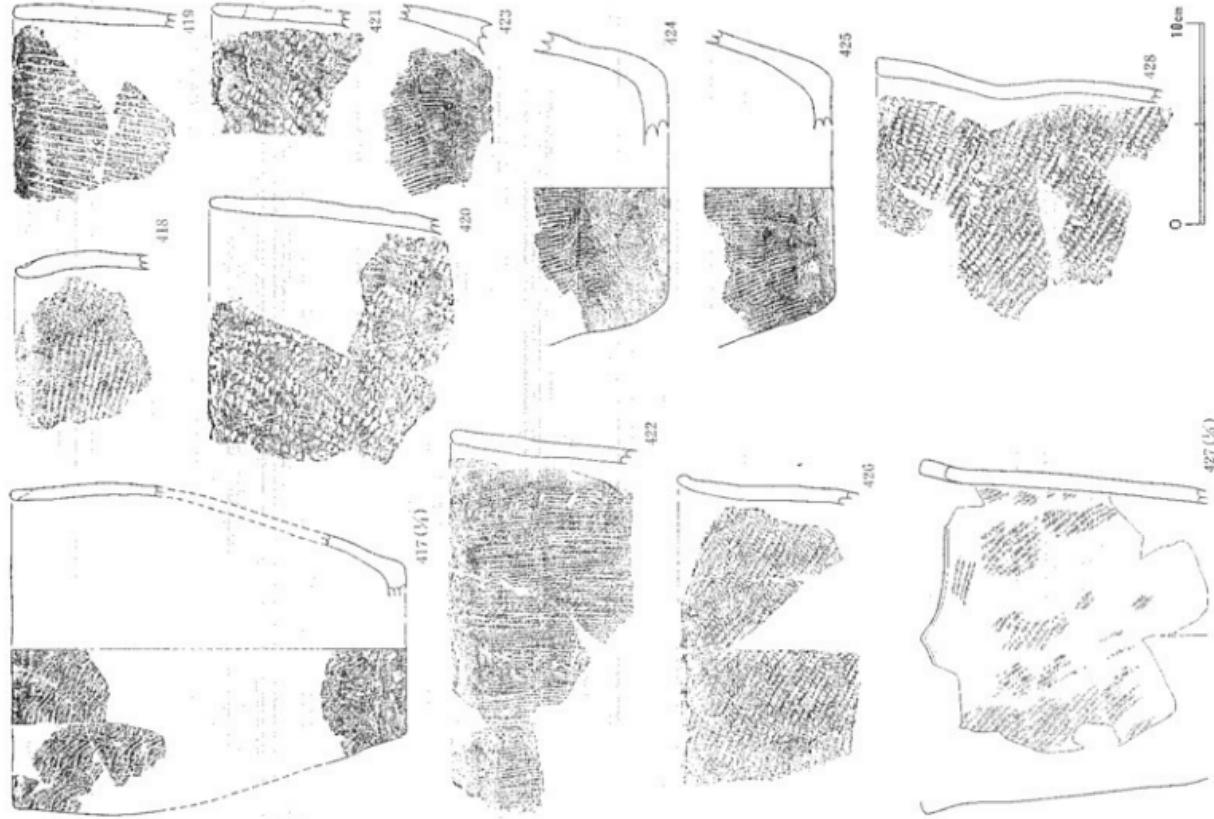
第49圖 通橫外出土土器(5)

第50回 遺物出土土器(6)

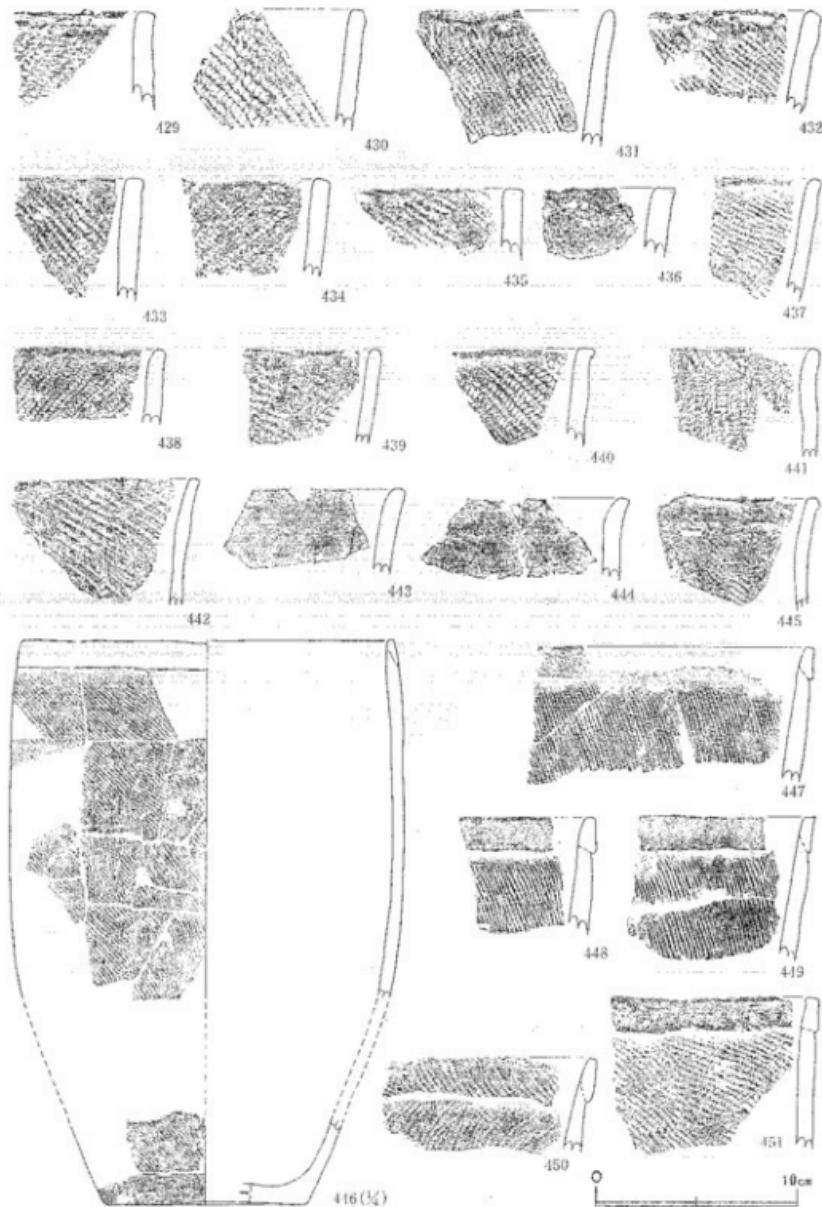




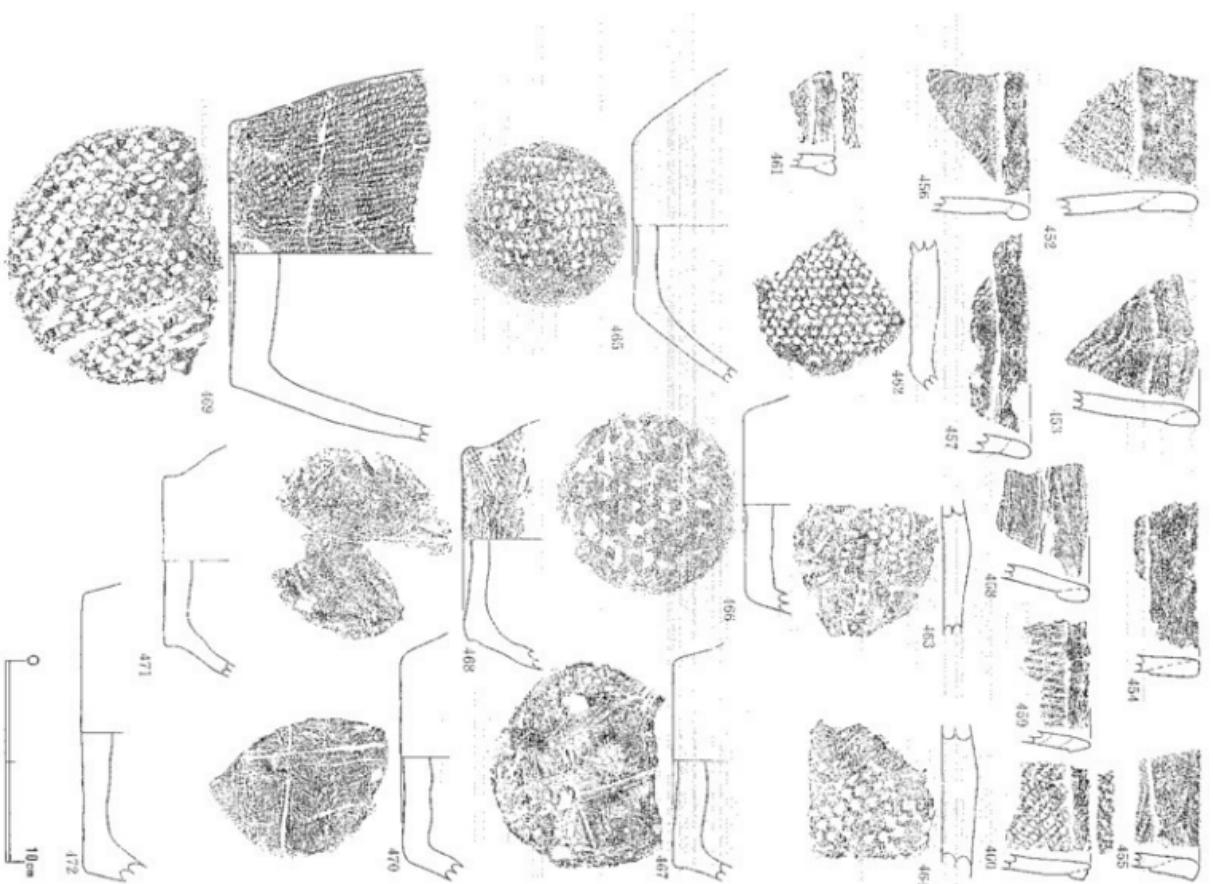
第51圖 通構外出土土器(7)



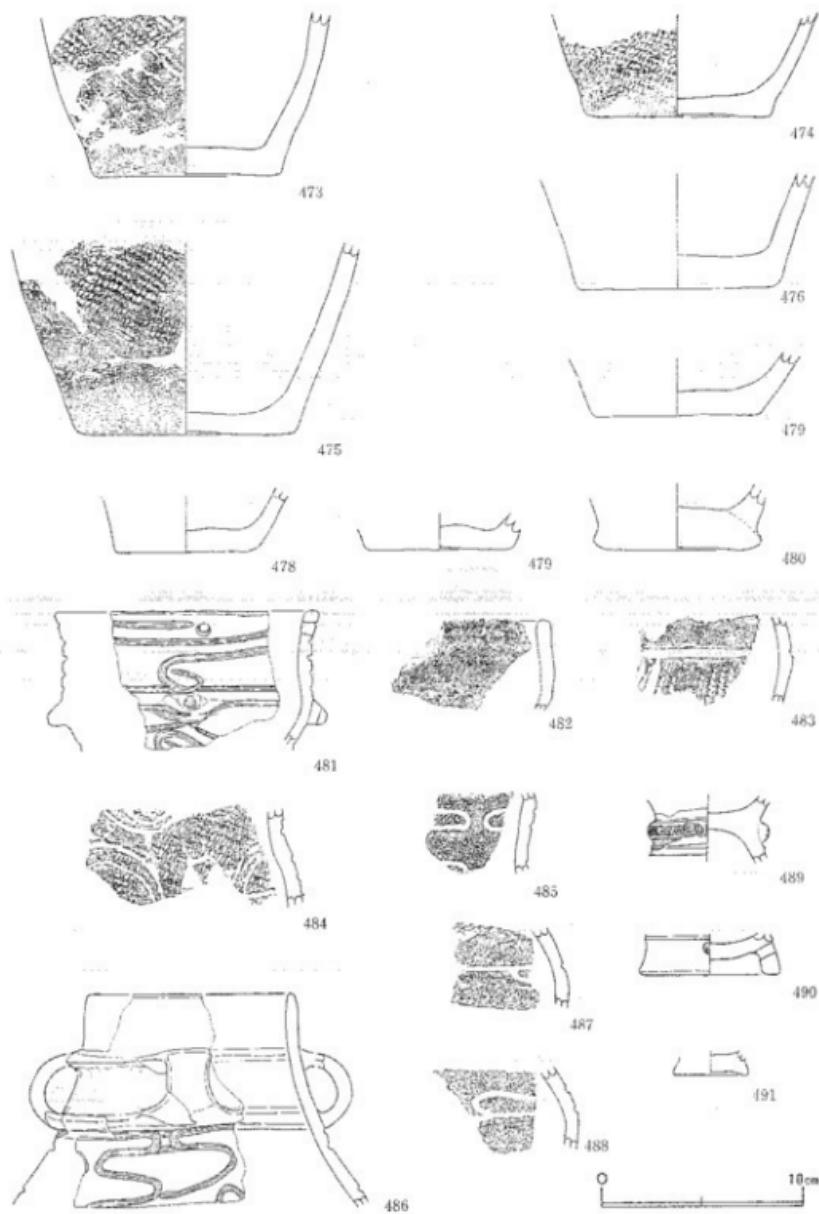
第52図 遠藤出土土器(8)



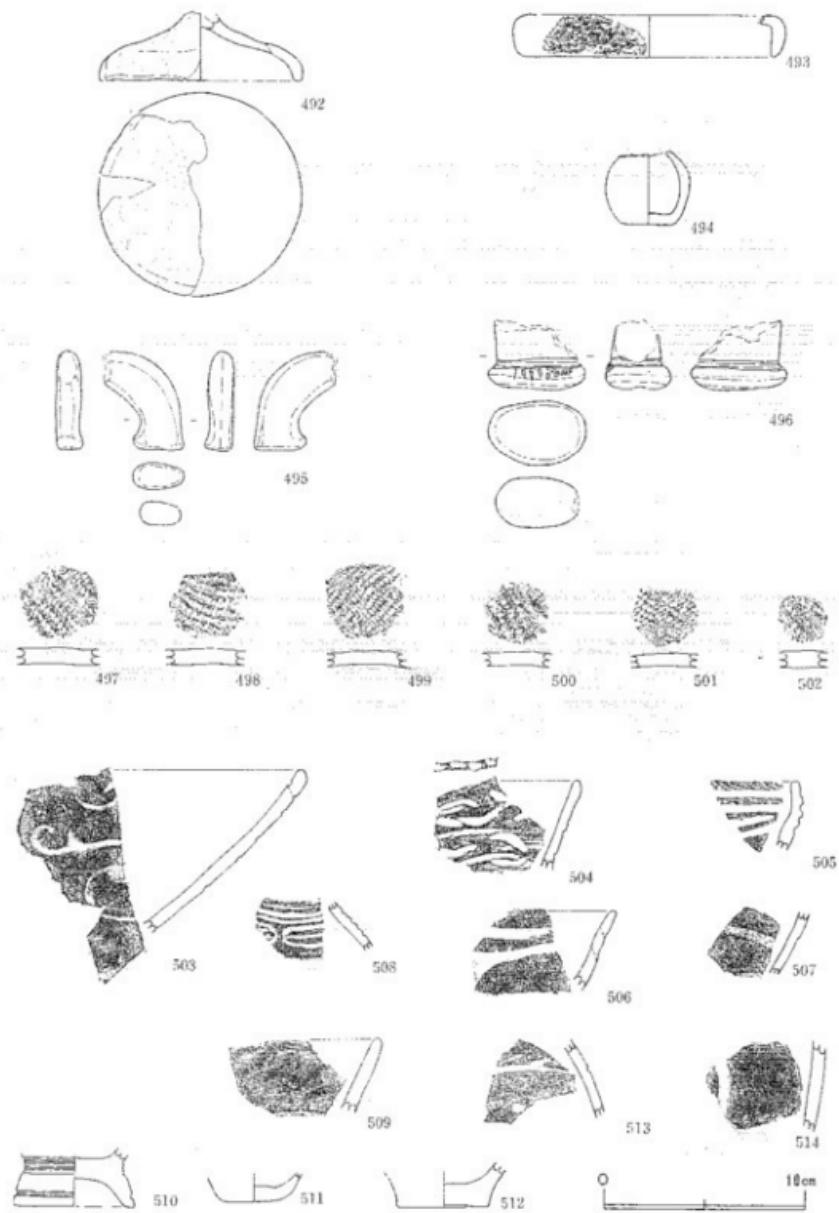
第53図 遺構外出土土器(9)



第54図 遺構外出土土器10

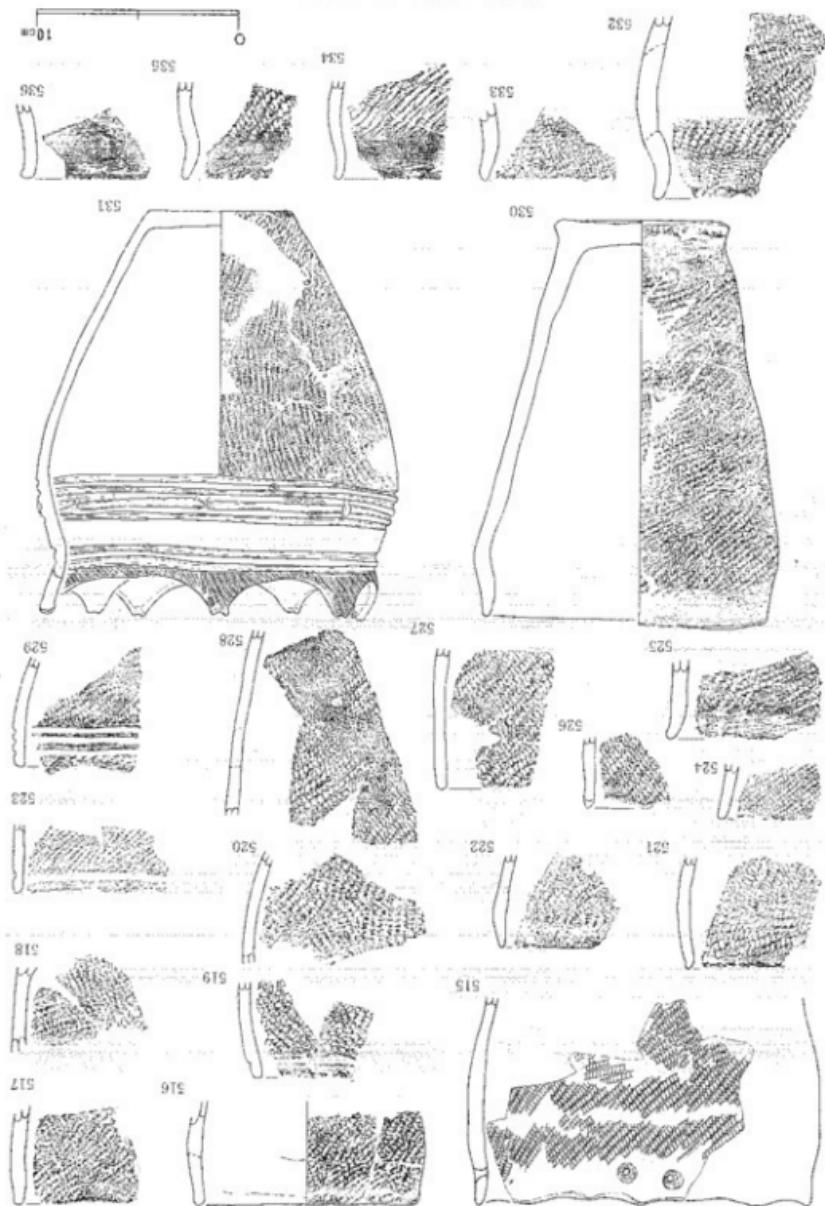


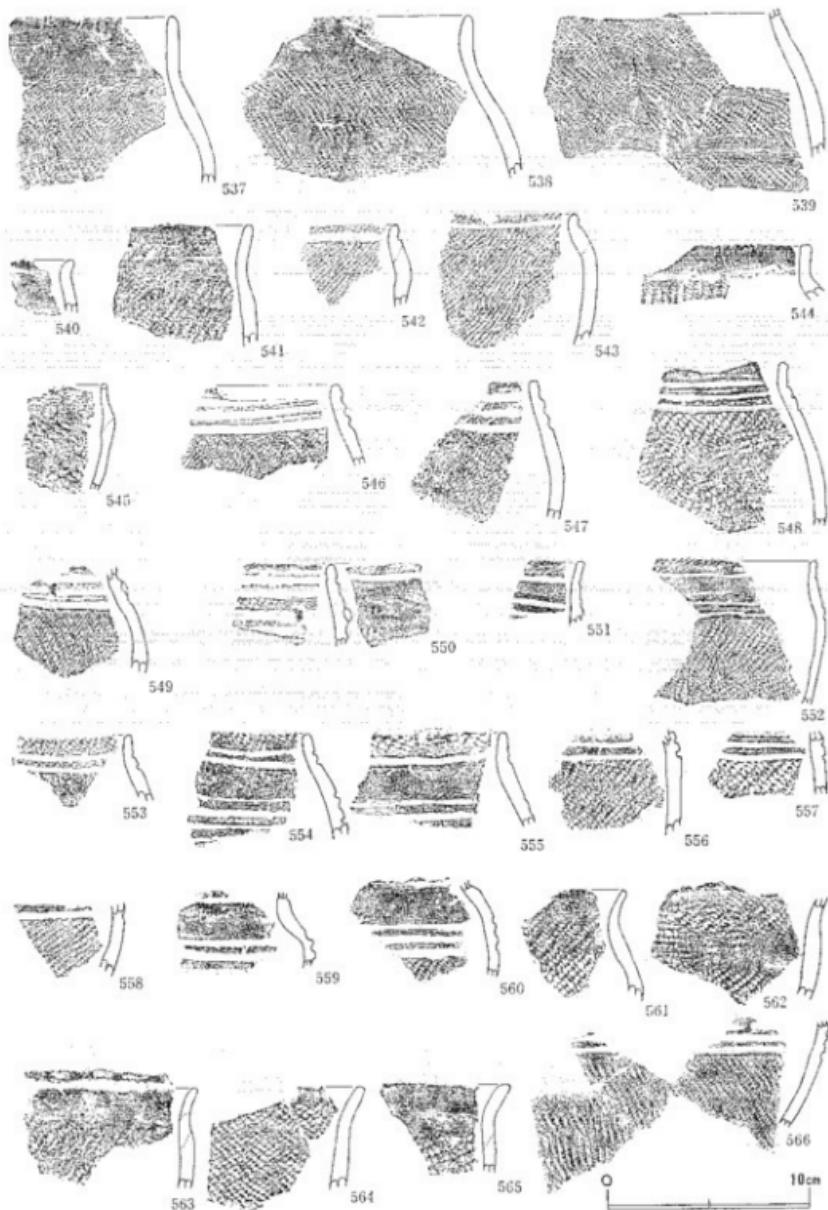
第55回 遺構外出土土器(1)



第56図 遺構外出土土器(2)

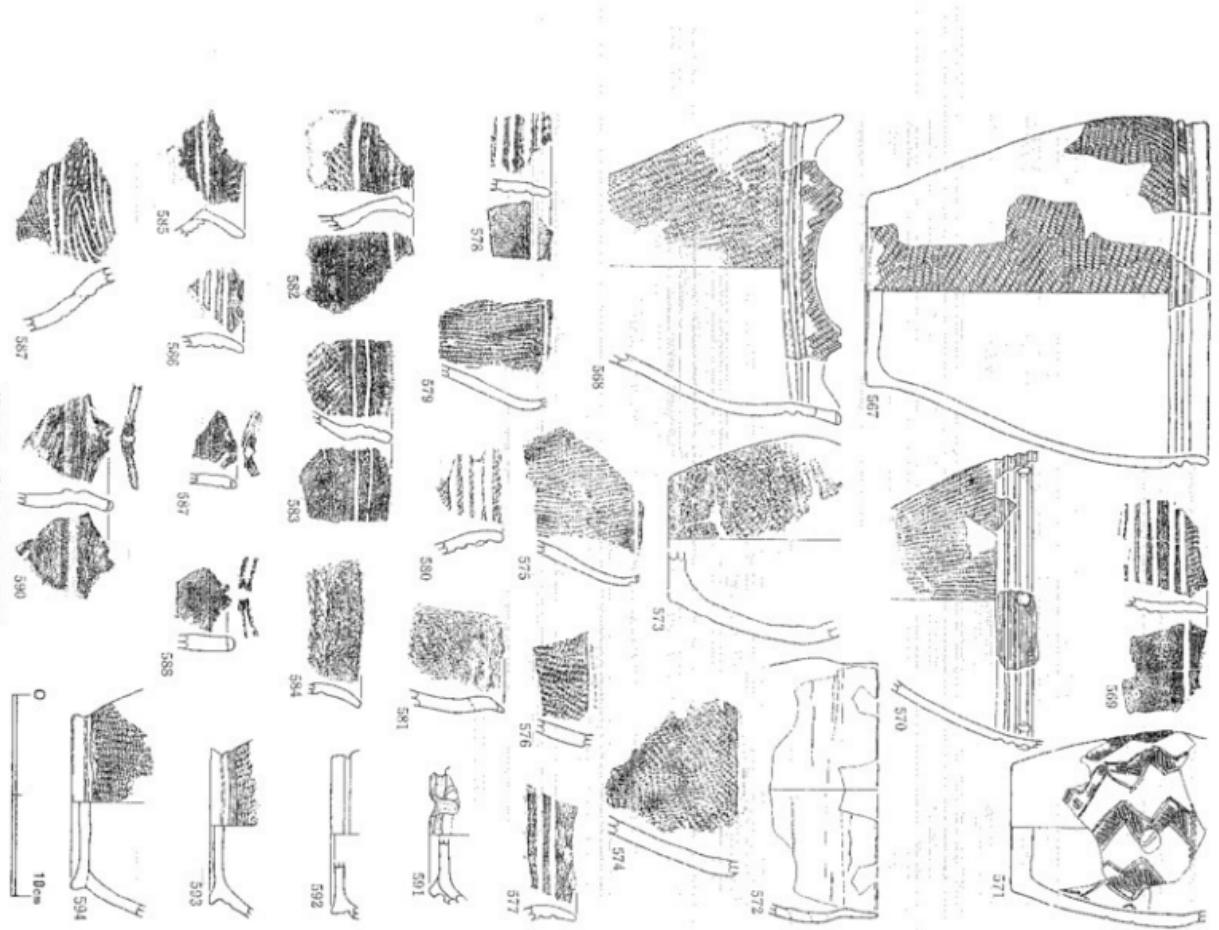
第57圖 遺物出土土器(1)





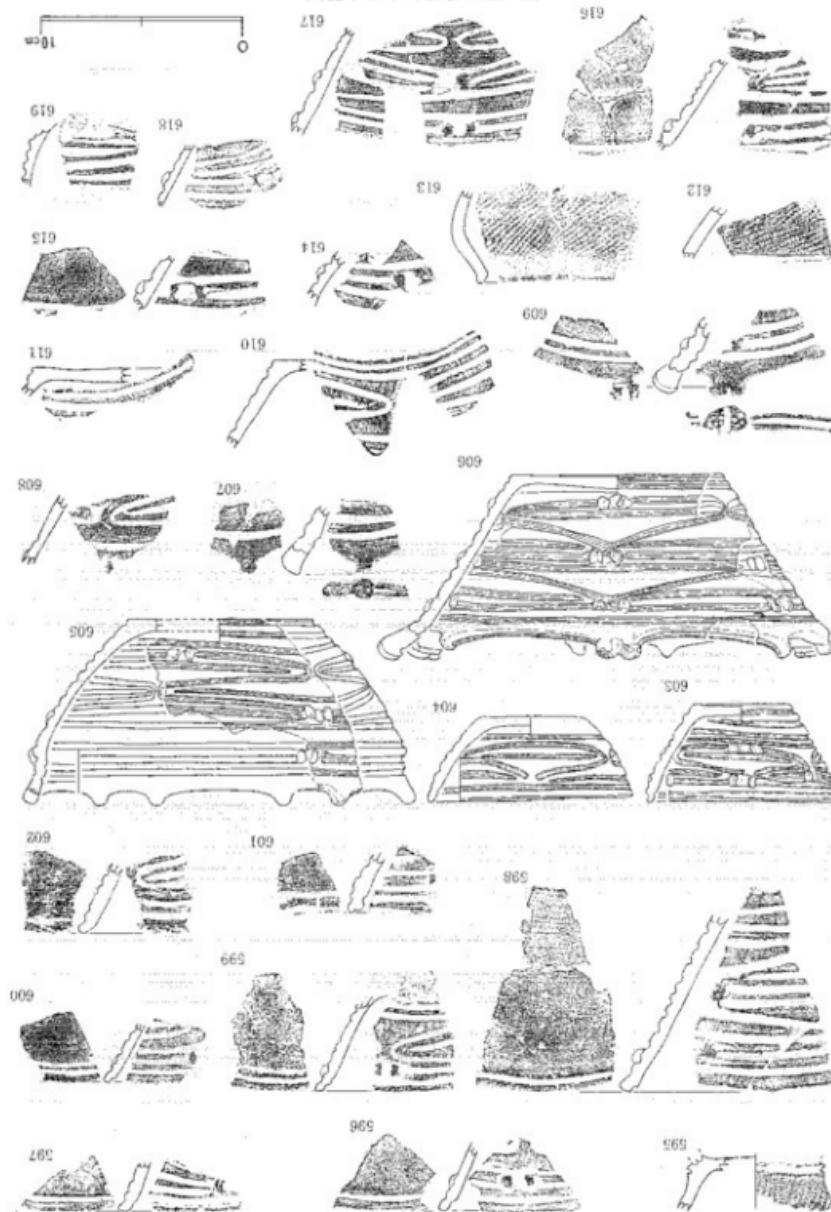
第58図 遺構外出土土器(1)

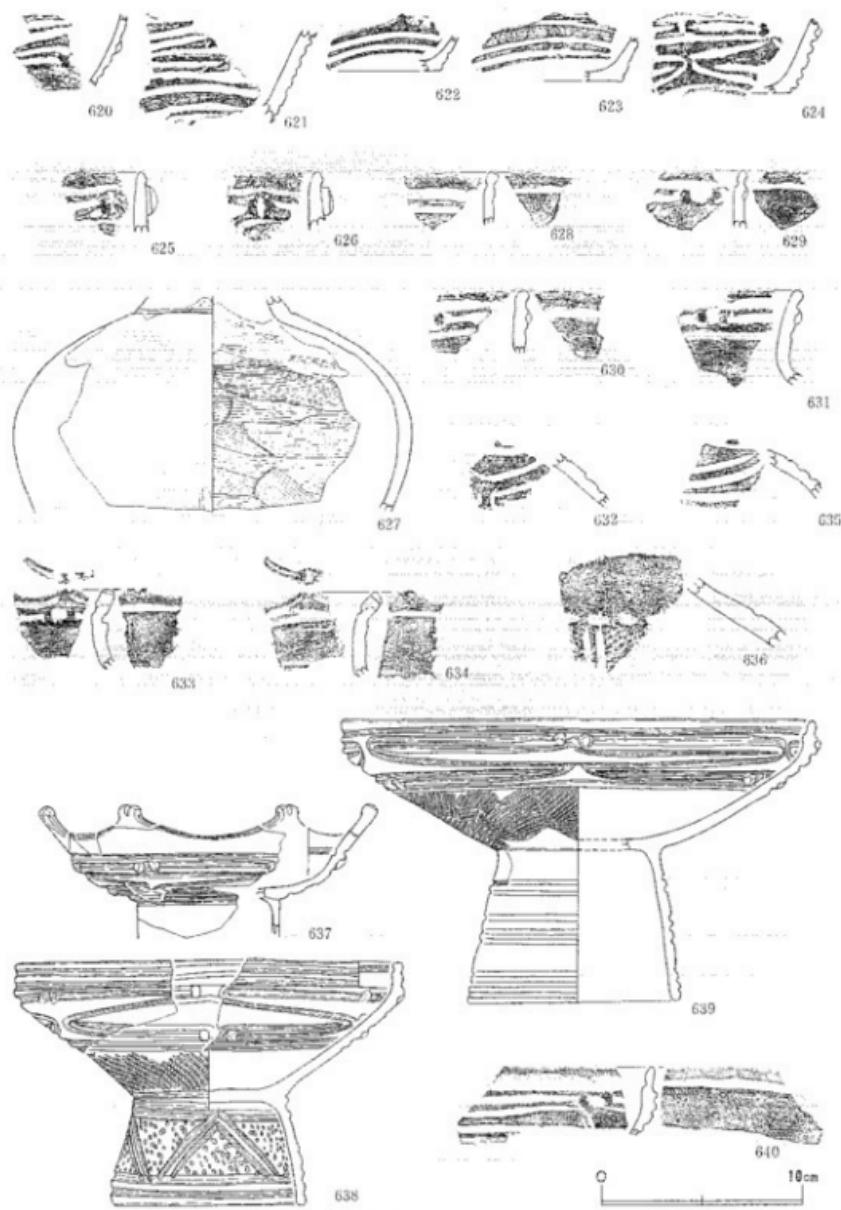
第4圖 出土遺物



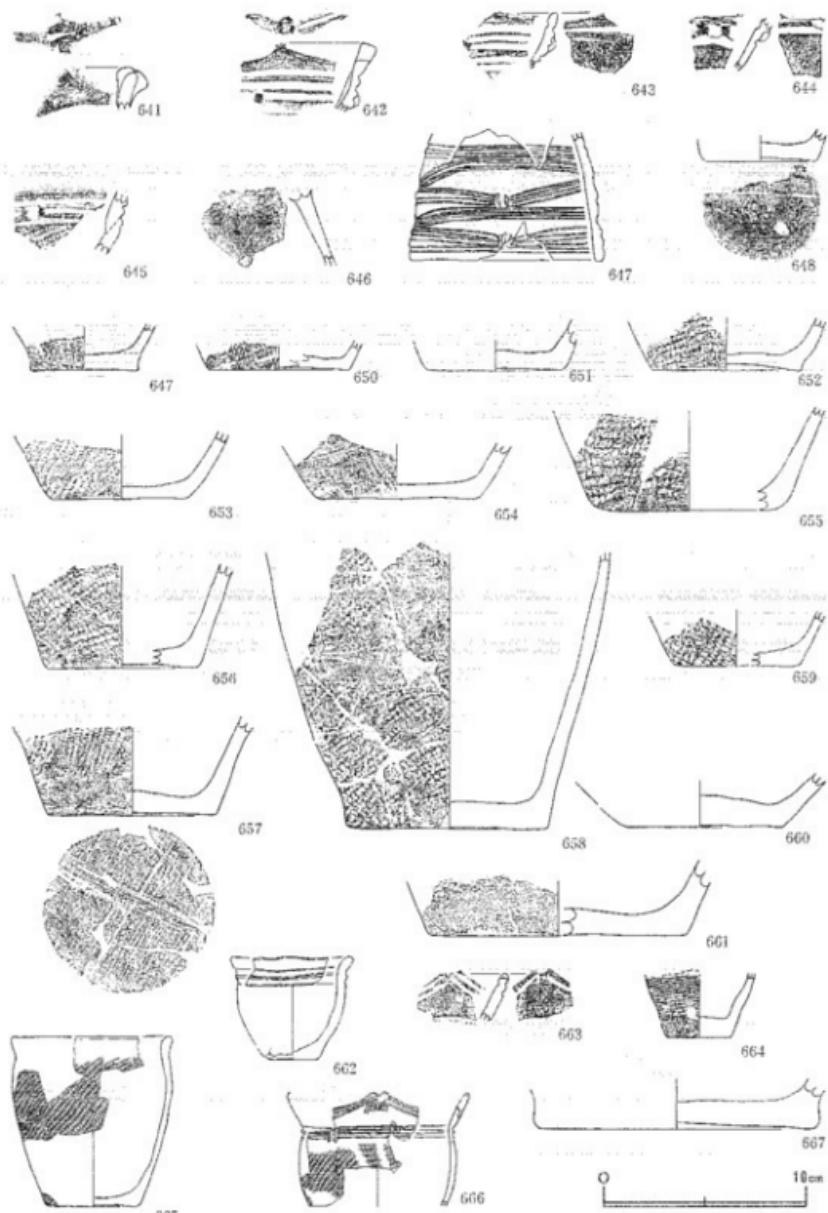
第59圖 遺構出土土器(1)

第60圖 磁鐵山出土玉器

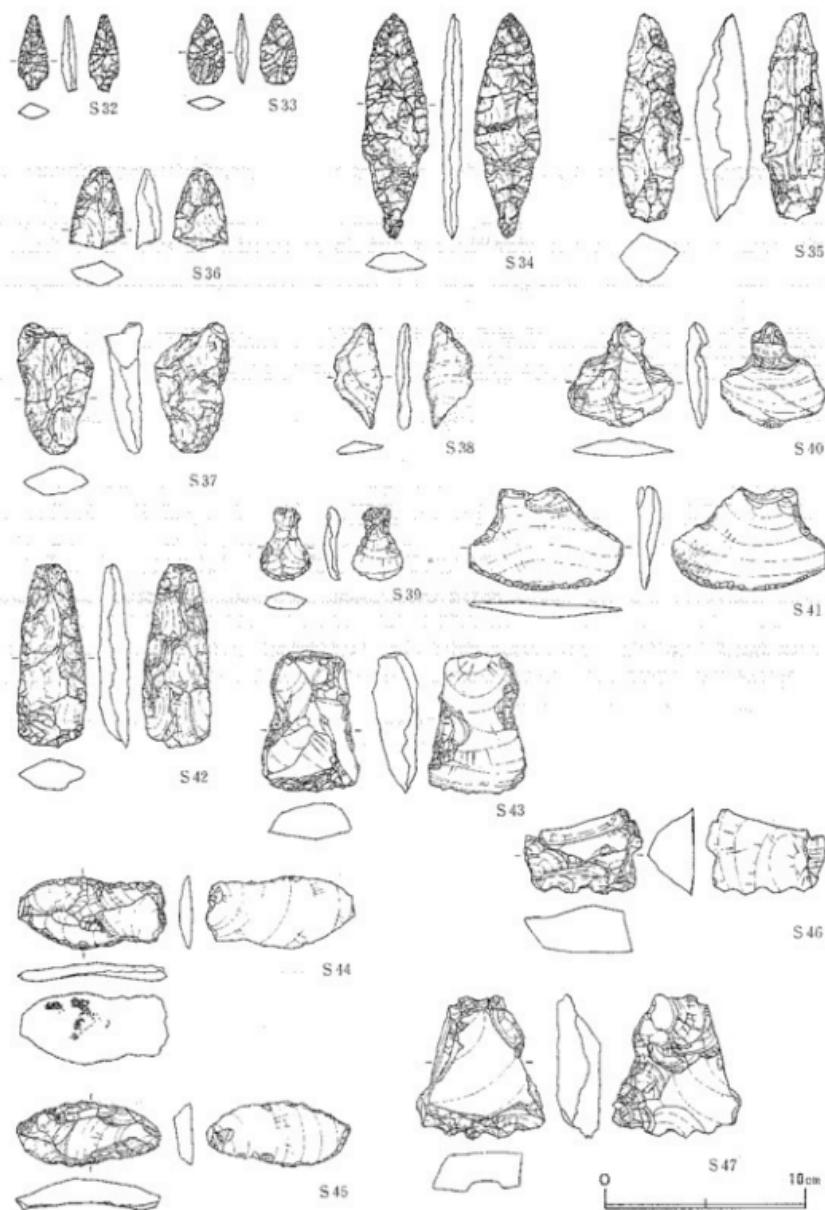




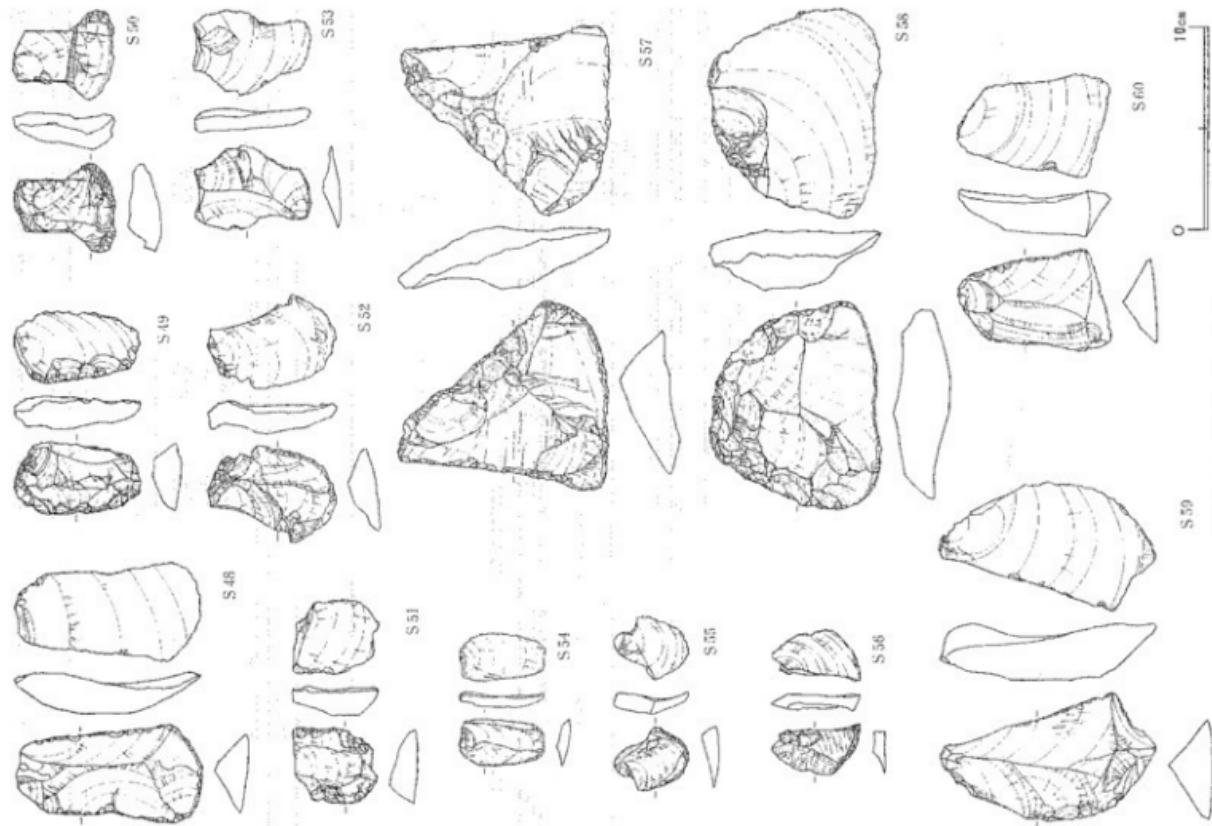
第61圖 遺構外出土土器(7)



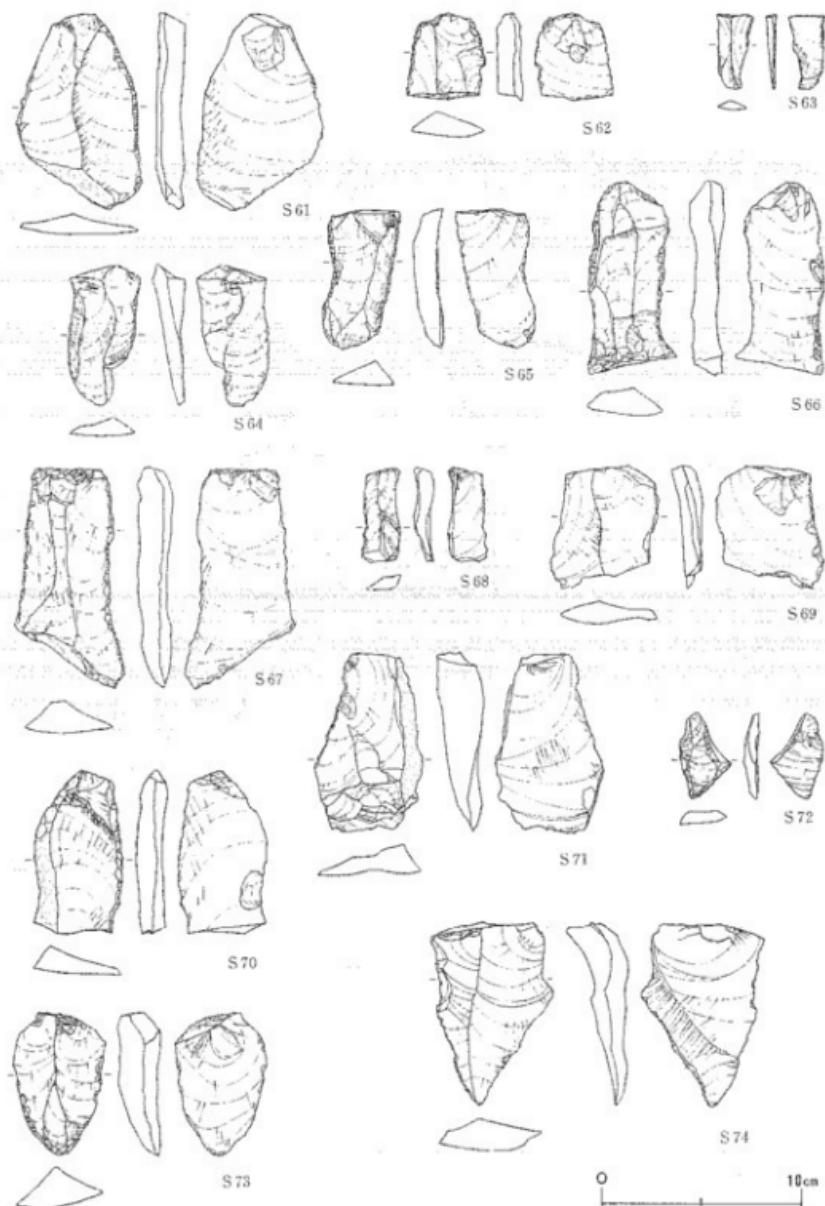
第62図 遺構外出土土器16



第63圖 遺構外出土石器(1)

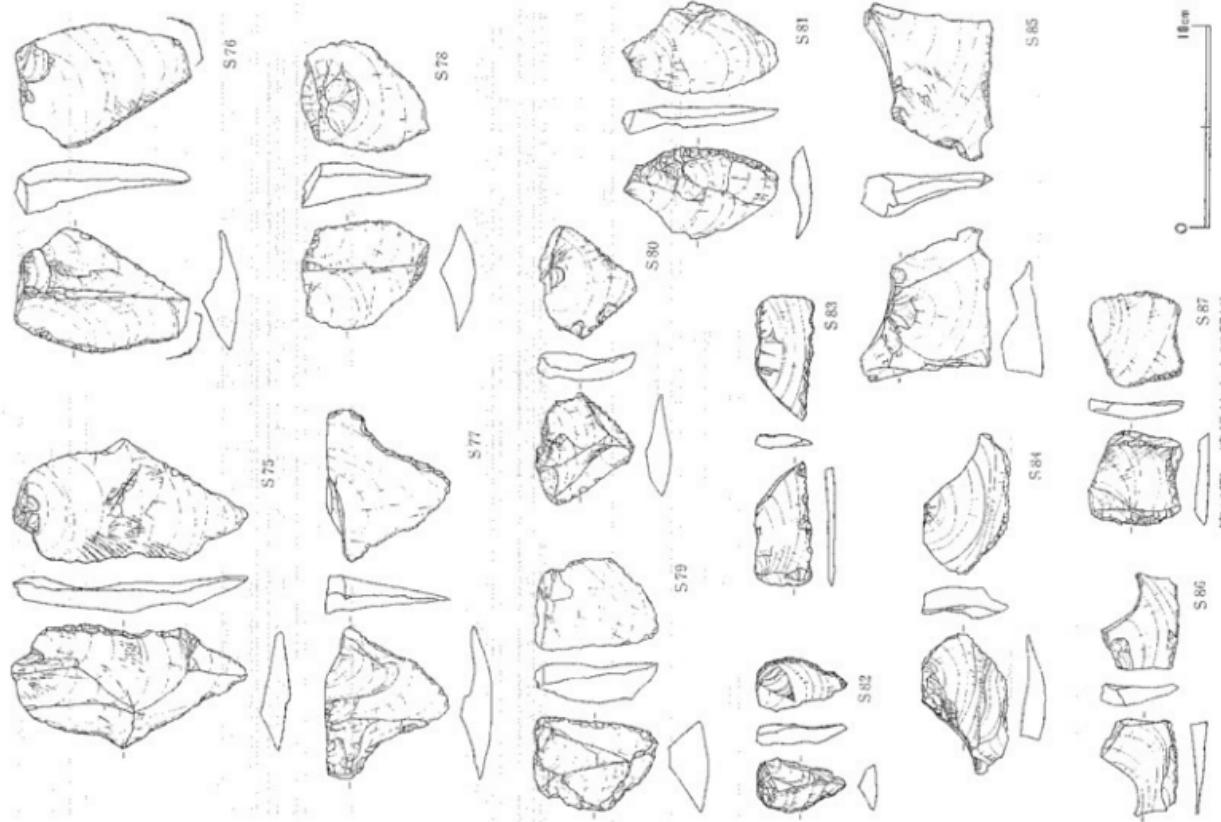


第64図 遺構外出土石器(2)



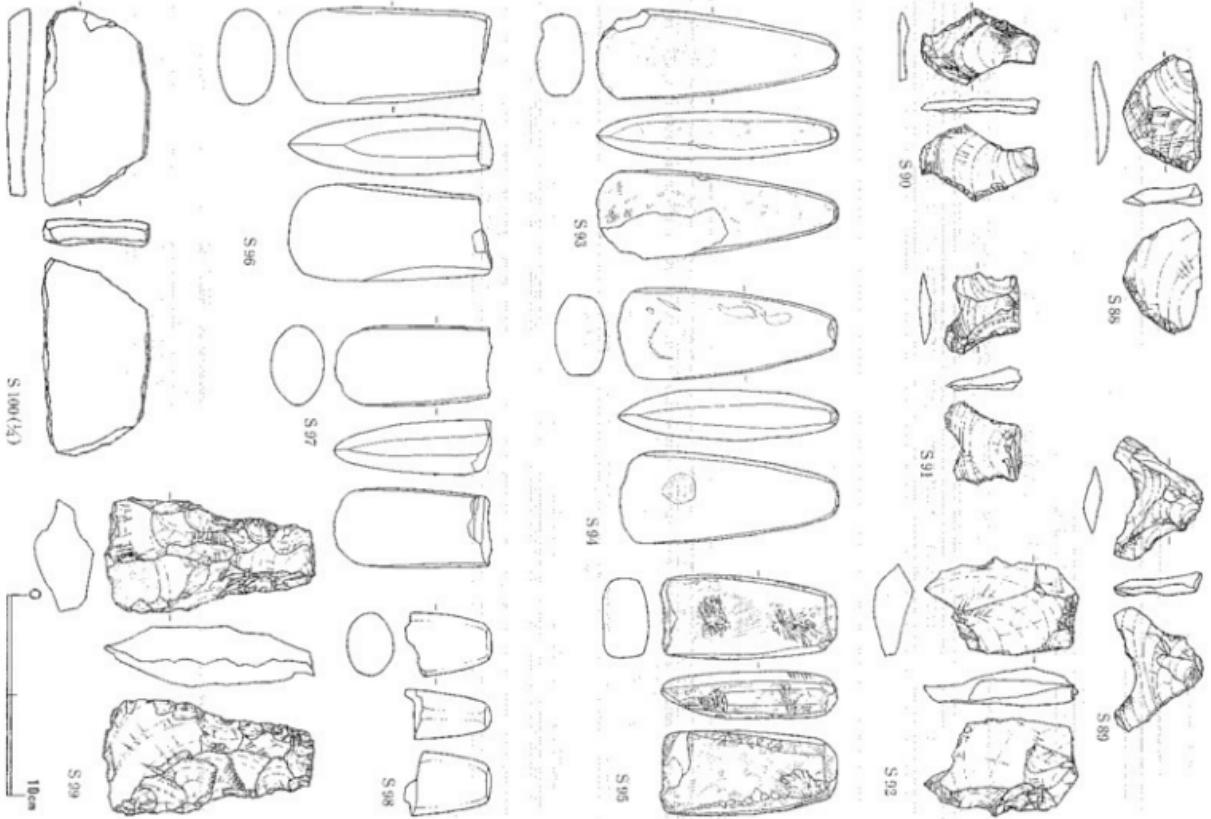
第65圖 遺構外出土石器(3)

図4兼 調査の記録



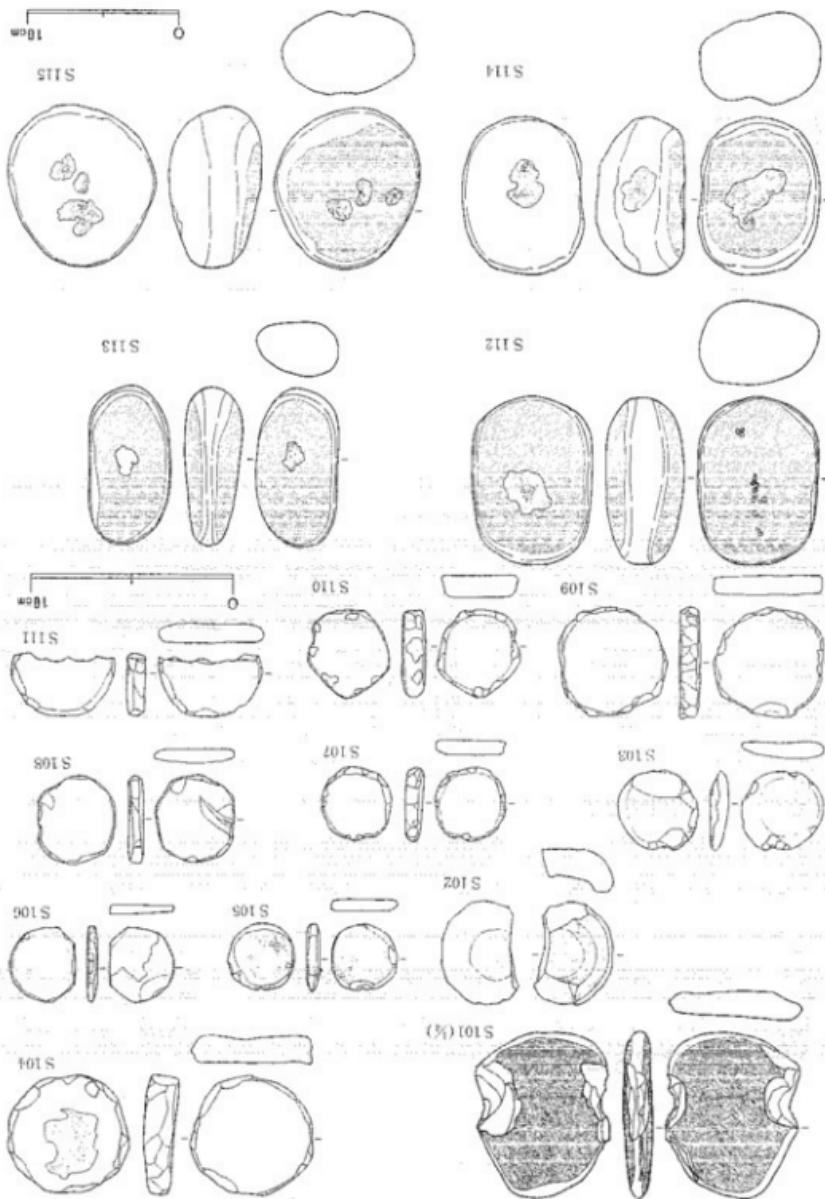
第66圖 進縫外出土石器(4)

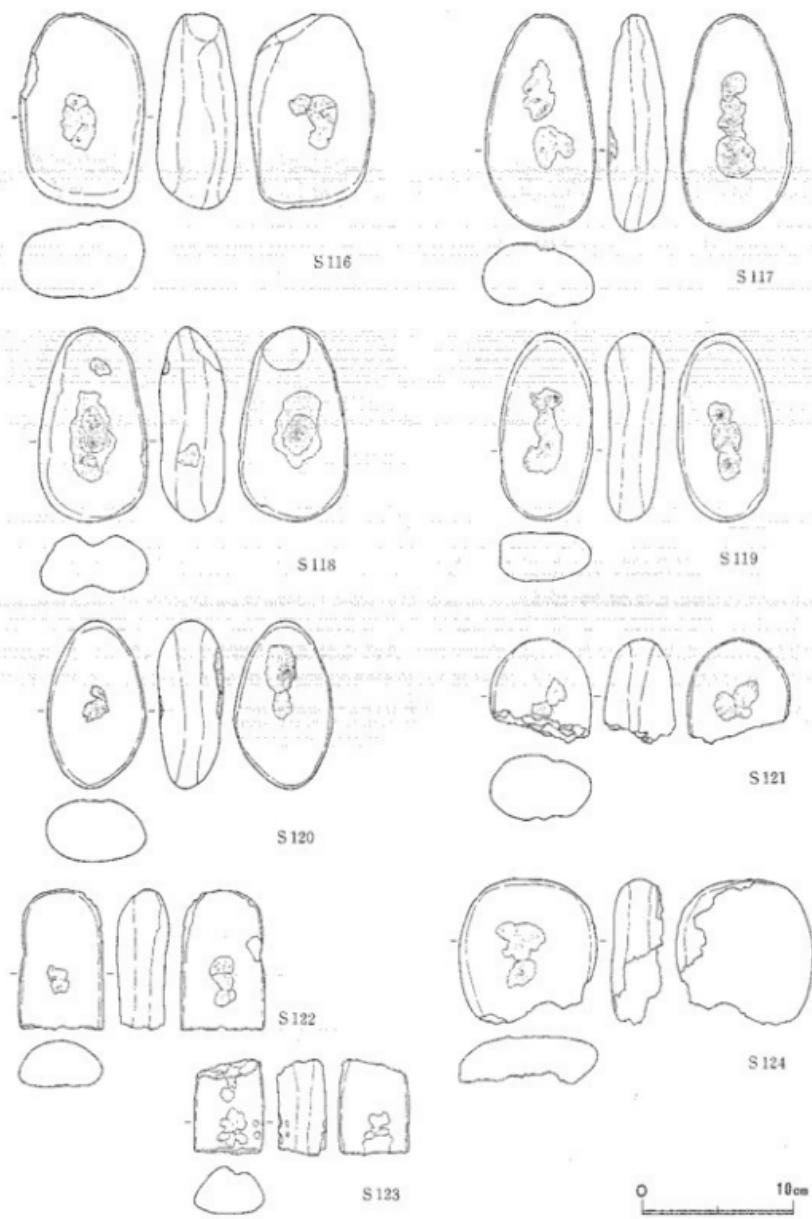
第4節 出土遺物



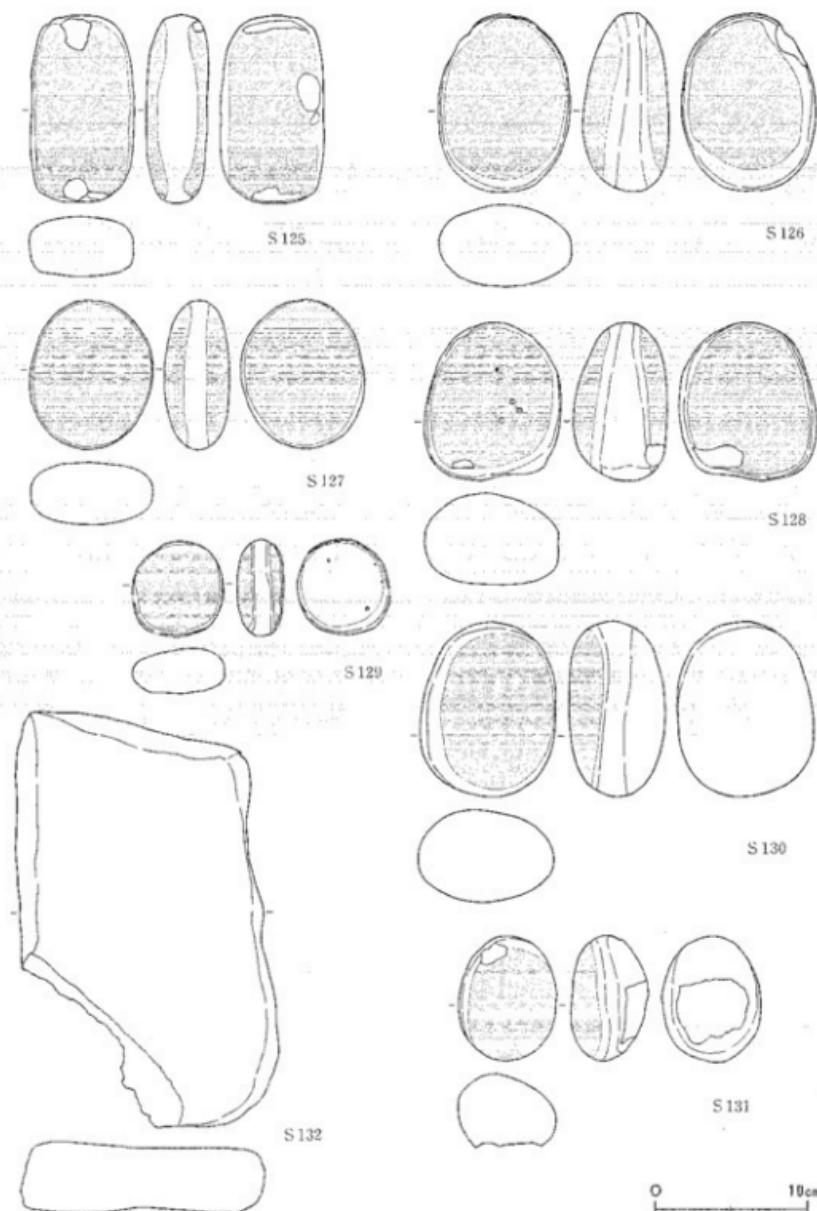
第67圖 遺構外出土石器(5)

(9)器皿出土物圖 89





第69圖 遺構外出土石器(7)



第70図 遺構外出土石器(8)

第4節 出土遺物

第2表 土器鉢察表(1)

法體（ ）は指定範

第3表 土器観察表(2)

法量()は推定値

序 号	出土地点	層位	分類	法 度(cm)		胎 土	施 工	色 調	外 形 内 面		文 様・脚 部	外 面 内 面	備 考	
				基 準	最大径 高 さ				内 面	外 面				
29-39	S K F 44	堆 土	H A 7					砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR ^{7.5} 2.5YR ^{5.5}	褐 褐	内面、表面とも丁寧なミガキ (層位で取扱いが5mm)		
30-1								砂粒1mm 少量	良好	7.5YR ^{7.5} 7.5YR ^{5.5}	褐 褐	内面、外側とも丁寧なミガキ (外一級位、内一級位)		
29-40	S K F 44	堆 土	H A 6					砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR ^{7.5} 7.5YR ^{5.5}	褐 褐	内面、外側とも丁寧なミガキ (外一級位、内一級位)		
30-1								砂粒1mm 少量	良好	7.5YR ^{7.5} 7.5YR ^{5.5}	褐 褐	内面、外側とも丁寧なミガキ (外一級位、内一級位)		
29-41	S K 04	底盤陶	H A 4 d	口 縁 21.2				砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR ^{7.5} 7.5YR ^{5.5}	褐 褐	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ミガキ	外側美化 物付着	
29-42	S K 04	堆 土	H A 7					砂粒1mm ~3mm	良好	10YR ^{7.5} 7.5YR ^{5.5}	褐 褐	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ミガキ	外側美化 物付着	
29-43	S K 04	堆 土	H A 1 a					砂粒1mm 若干	良好	2.5YR ^{5.5} 2.5YR ^{5.5}	淡 淡	研磨跡R端→両面文(太) 縫位ミガキ	外側美化 物付着	
29-44	S K 04	堆 土	H A 3 a					砂粒1mm ~2mm	良好	2.5YR ^{5.5} 10YR ^{7.5}	淡 褐	底盤L R→虎渦文(太) 縫位ミガキ	外側美化 物付着	
29-45	S K 04	堆 土	H A 1 a					砂粒1mm 若干	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	褐 褐	底盤L R→虎渦文(太) 縫位ミガキ	43と同一	
29-46	S K 04	堆 土	H A 7					砂粒1mm ~3mm	良好	7.5YR ^{7.5} 7.5YR ^{5.5}	褐 褐	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ミガキ	47と同一	
29-47	S K 04	堆 土	H A 4 d					砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR ^{7.5} 7.5YR ^{5.5}	褐 褐	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ミガキ	41と同一	
29-48	S K 04	堆 土	H A 7					砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{7.5} 7.5YR ^{5.5}	淡 褐	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ミガキ	外側美化 物付着	
29-49	S K 04	堆 土	H A 7					砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	褐 褐	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ミガキ	48と同一	
30-50	S K 12	堆 土	H A 3 a					砂粒1mm ~3mm	良好	2.5YR ^{5.5} 2.5YR ^{5.5}	淡 淡	底盤丸L→虎渦文(太) 縫位ミガキ		
30-51	S K 12	堆 土	H P	厚 0.7	2.7			砂粒1mm 多量	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	褐 褐	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ミガキ	内側美化 品	
30-52	S K 13	堆 土	H A 4 b					砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{7.5} 2.5YR ^{5.5}	褐 褐	調文底盤L R→虎渦文ナメ 縫位ナメ		
30-53	S K 13	堆 土	H A 7					砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	淡 淡	地文無文、曲線文(やや火) 縫位ミガキ	外側美化 物付着	
30-54	S K 13	堆 土	H A 7					砂粒1mm 多量	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	褐 褐	内面と外とも丁寧なミガキ (縫位ミガキ)		
30-55	S K 14	堆 土	H A 7					砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	褐 褐	内面と外とも丁寧なミガキ (縫位ミガキ)		
30-56	S K 20	堆 土	H A 4 b					砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	淡 淡	内面無文、虎渦文(太) 縫位ミガキ	56と同一	
30-57	S K 20	堆 土	H A 4 b					砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	淡 淡	内面無文、虎渦文(太) 縫位ミガキ		
30-58	S K 20	堆 土	H A 4 b					砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	淡 淡	内面無文、虎渦文(太) 縫位ミガキ	外側美化 物付着	
30-59	S K 20	堆 土	H A 4 b					砂粒1mm ~3mm	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	淡 淡	内面無文、虎渦文(太) 縫位ミガキ	外側美化 物付着	
30-60	S K 21	堆 土	H A 5 a					砂粒1mm 少量	良好	2.5YR ^{5.5} 2.5YR ^{5.5}	淡 淡	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ミガキ	剪り落し 口地	
30-61	S K 23	堆 土	H A	側 部 (19.8)	4.0			砂粒1mm 多量	普通	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	褐 褐	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ナメ	内・外側 美化物	
30-61	S K 23	アグ ク土	H B b	10.7	4.0			砂粒1mm ~4mm	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	淡 淡	内面、外面とも丁寧なミガキ (縫位ミガキ)	床面や 壁面	
30-62	S K 23	堆 土	H A					砂粒1mm ~3mm	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	褐 褐	L R→区割→滑消一二又文 縫位ナメ	口唇部判 目	
30-63	S K 23	堆 土	H A					砂粒1mm ~2mm	普通	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	淡 淡	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ナメ	内・外側 美化物	
30-64	S K 23	堆 土	H A 4 a					砂粒1mm ~3mm	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	淡 淡	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ミガキ		
30-65	S K 23	堆 土	H A					砂粒1mm ~2mm	普通	7.5YR ^{7.5} 7.5YR ^{5.5}	褐 褐	調文底盤L R痕位回転施文 縫位落し	63と同一	
30-66	S K 23	堆 土	H A					砂粒1mm ~2mm	普通	7.5YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	淡 淡	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ナメ	外側美化 物	
30-67	S K 23	堆 土	H A					砂粒1mm 多量	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	淡 淡	調文底盤L R→ゆるいナメ 縫位ナメ	外側美化 物付着	
30-68	S K 23	堆 土	H A 7					砂粒1mm ~2mm	良好	2.5YR ^{5.5} 10YR ^{5.5}	淡 淡	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ナメ	外側美化 物付着	
30-69	S K 23	堆 土	H A					砂粒1mm 多量	普通	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	褐 褐	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ナメ	外側美化 物付着	
30-70	S K 23	堆 土	H A					砂粒1mm 多量	普通	7.5YR ^{7.5} 7.5YR ^{5.5}	褐 褐	調文底盤L R痕位回転施文 縫位ナメ	内・外側 美化物	
31-71	S K 23	堆 土	H A 1 b					砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{7.5} 7.5YR ^{5.5}	淡 淡	透文無文、油吸文(太) 縫位ミガキ	透孔口縁	
31-72	S K 23	堆 土	H A 1 c					砂粒1mm 少量	良好	7.5YR ^{7.5} 7.5YR ^{5.5}	褐 褐	L R(縫位)→両面文→油吸 縫位ミガキ		
31-73	S K 23	堆 土	H A 3 a					砂粒1mm 少量	良好	10YR ^{7.5} 7.5YR ^{5.5}	淡 淡	透文無文、油吸文(太) 縫位ミガキ	外側美化 物付着	
31-74	S K 23	堆 土	H A 1 b					砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	淡 淡	透文無文、油吸文、竹透文 縫位ナメ	外側美化 物付着	
31-75	S K 23	堆 土	H B 6					砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{7.5} 10YR ^{5.5}	淡 淡	L R→丸窓→茶、横ナメ 縫位ミガキ		
32-1														

第4表 土器観察表(3)

法量()は推定値

器種 固形	出土地点	層位	分類	法量(cm)		胎土	焼成	色調	外観 内面	文様・高麗	外周 内面	備考	
				幅	高さ								
31-76 21	SK23	埋土	II A 6		6.6	砂粒1mm ~2mm	普通	2.5YR 5/6 2.5YR 5/6	黄 黄	内面、外面ナデ、ミガキ 摩減部(内・外側)	外周磨化 付着		
31-77 21	SK24	埋土	II A 6		6.5	砂粒1mm ~2mm	普通	2.5YR 5/6 2.5YR 5/6	黄 黄	内面解体L R斜位凹面 模様、透孔ミガキ	外周磨化 付着		
31-78 32-1	SK25	埋土	II A 3 a			砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	黄 黄	原生L R→南韓文(太) 底位ミガキ	外周磨化 付着		
31-79 21	SK26	埋土	II A 4 a	網上部 (28.0)		砂粒1mm 多量	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	原生L R、指標庄底(「丁酉 年」) 底位、鏡位ミガキ	外周磨化 付着		
31-80 21	SK29	埋土	III B 9	22.5	19.2	7.6	砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	黄 黄	底部下端1条凹部、見 縫位ナデ、透孔部位ミガキ	外周磨化 付着	
31-81 32-1	SK30	埋土	II A 1 b			砂粒1mm ~3mm	普通	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	解体倒壊窓(櫻型)2条 縫位ミガキ	山形小安 起		
31-82 32-1	SK30	埋土	II A 1			砂粒1mm ~2mm	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	黄 黄	内・外側縫位ミガキ、口解 縫位網目形成			
31-83 32-1	SK30	埋土	II A 3 a			砂粒1mm 多量	良好	2.5YR 5/6 2.5YR 5/6	黄 黄	原生L R→南韓文(太) 縫位ミガキ	84万個		
31-84 32-1	SK30	埋土	II A 3 a			砂粒1mm 多量	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	原生L R→沈地文(太) 縫位ミガキ	83と同一		
31-85 32-1	SK30	埋土	II A 7			砂粒1mm 多量	良好	2.5YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	解体窓体L R縫位位縫及 縫位ミガキ			
31-86 32-1	SK30	埋土	II A 7			砂粒1mm 少量	良好	2.5YR 5/6 2.5YR 5/6	淡 黄 黄	解体窓体L R縫位位縫及 縫位ミガキ			
32-87 32-2	SK36	埋土	II A 1 a			砂粒1mm 無干	良好	10YR 5/6 2.5YR 5/6	淡 黄 黄	解体窓体窓一塊位1条(太) 縫位ミガキ			
32-88 32-2	SK36	埋土	II A 7			砂粒1mm 多量	良好	2.5YR 5/6 2.5YR 5/6	淡 黄 黄	透孔取抜L R縫位位縫及 縫位ナデ			
32-89 32-2	SK36	埋土	II A 1 a			砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	白 白	解体原体L R縫位位縫及 縫位ミガキ	外周磨化 付着		
32-90 32-2	SK37	埋土	II A 4 b			砂粒1mm ~4mm	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	在基底長筒窓位凹面縫及 縫位ナデ→解体ミガキ	外周磨化 付着		
32-91 32-2	SK36	埋土	II A 1 a			砂粒1mm 少量	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	解体L R→南韓文(太) 縫位ミガキ	92と同一		
32-92 31	SK36	埋土	II A 1 a	口縫部 (15.6)		砂粒1mm 少量	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	透孔L R→縫跡文→小西文 縫位ナデ	外周磨化 付着		
32-93 32-2	SK36	埋土	II A 1 a			砂粒1mm 少量	良好	10YR 5/6 7.5YR 7/6	淡 黄 黄	透孔L R→沈地文(太) 縫位ミガキ	92と同一		
32-94 32-2	SK36	埋土	II A 3 a			砂粒1mm ~3mm	良好	2.5YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	透孔L R→南韓文(太) 縫位ミガキ	外周磨化 付着		
32-95 32-2	SK38	埋土	II A 4 b			砂粒1mm ~2mm	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ナデ	96~98と 同一		
32-96 32-2	SK36	埋土	II A 4 b			砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	白 白	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ミガキ	95~97、 98と同一		
32-97 32-2	SK38	埋土	II A 4 b			砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	白 白	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ミガキ	95~96、 98と同一		
32-98 32-2	SK38	埋土	II A 4 b			砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	白 白	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ミガキ	95~97と 同一		
32-99 32-2	SK38	埋土	II A 4 b			砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	白 白	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ミガキ	95~97と 同一		
32-100 32-2	SK38	埋土	II A 1 a	網上部 (22.4)	6.8	砂粒1mm 少量	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	L R→区溝→凸段ヌード 縫位ミガキ	内・外周 磨化物		
32-101 32-2	SK38	埋土	II A 6		12.4	砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR 7/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ナデ	内周磨化 付着		
32-102 32-2	SK38	埋土	II A 6		12.0	砂粒1mm ~3mm	良好	10YR 5/6 7.5YR 7/6	淡 黄 黄	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ナデ→透孔ミガキ	外周磨化物		
32-103 32-2	SK38	埋土	II A 3 a			砂粒1mm 少量	良好	10YR 5/6 7.5YR 7/6	淡 黄 黄	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ナデ→透孔ミガキ	外周磨化物		
32-104 32-2	SK38	埋土	II A 3 a			砂粒1mm ~3mm	良好	2.5YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ミガキ	内盤状土 質品		
32-105 32-2	SK40	埋土	II A 7			砂粒1mm ~5mm	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	透孔原体L R L L	織紋土器		
32-106 33-1	SK69	確認面	II A 2 a			砂粒1mm 多量	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ナデ	104と 同一		
32-107 33-1	SK69	確認面	II A 7			砂粒1mm ~2mm	良好	2.5YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ミガキ	102と 同一		
33-108 22	SK69	確認面	II A 2 a	網上部 (22.0)		砂粒1mm 多量	良好	7.5YR 7/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ミガキ	外周磨化 付着		
33-109 33-1	SK69	確認面	II A 2 a			砂粒1mm ~2mm	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ミガキ	外周磨化 付着		
33-110 33-1	SK69	確認面	II A 7	網上部 (22.0)		砂粒1mm 多量	良好	7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	淡 黄 黄	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ミガキ	103と 同一		
33-111 33-2	SK58	解剖面	II A 7			砂粒1mm ~3mm	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黄 黄	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ミガキ	113と 同一		
33-112 33-2	SK70	埋土	II A 3 a			砂粒1mm ~4mm	良好	7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	淡 黄 黄	透孔原体L R縫位位縫及 縫位ナデ、ミガキ	113と 同一		

第5表 土器觀察表(4)

法観()は推定値

標 目	出土地点	層 級	分類	法 蓋 (cm)		胎 土	傾 向	色 調	外 面 内 面	文 様・調 理	外 面 内 面	編 号	
				高 度	大 底								
33-113	S K70	堆 上	H A 3 a					砂粒 1mm ~ 3mm	良好 良好	7.5Y R 5/4 7.5Y R 5/4	に深い に深い	ER L (誤認)・沈没文(?) 模様ナメ	112と 同一
33-114	S K70	堆 上	H A 3 a					砂粒 1mm ~ 3mm	良好 良好	16Y R 7/2 10Y R 7/2	灰 白	陶文模様 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	内・外面 変形物
33-115	S K70	堆 上	H A 7					砂粒 1mm ~ 4mm	良好 良好	7.5Y R 5/4 7.5Y R 5/4	緑 緑	陶文原体 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	
33-116	S K70	堆 上	H A 3 a					砂粒 1mm ~ 少量	良好 良好	16Y R 7/2 10Y R 7/2	黄 黄	陶文模様 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	
33-117	S K70	堆 上	H A 6		(7.2)			砂粒 1mm ~ 3mm	良好 良好	5 Y R 5/2 7.5Y R 5/4	灰 灰	陶文模様 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	
34-118	S 128	床 面	N E 2	透視面	口縁部	合 離	砂粒 1mm ~ 2mm	良好 良好	5 Y R 5/4 10Y R 7/2	綠 綠	美し(誤認)、変形文字文(?) 模様ナメ	内・外面 変形物	
34-119	S 128	床 面	N E 2	側 部	(26.0)		砂粒 1mm ~ 3mm	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 5/4	灰 灰	陶文模様 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ		
34-120	S 128	堆 上	N E 1			5.0	砂粒 1mm ~ 3mm	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	灰 白	陶文原体 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	内・外面 変形物	
34-121	S 128	床 面	N E 1	界 限	0.6	3.2	砂粒 1mm ~ 2mm	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	黄 白	彫文無文、工字文 模様地裏、ナメ	凹輪土 器物	
34-122	S 128	床 面	N H 6			4.8	砂粒 1mm ~ 3mm	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	灰 黄	彫文無文、改変 模様ナメ		
34-123	S 128	堆 上	N E 5				砂粒 1mm ~ 少量	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	灰 黄	彫文無文、ナメ 模様ナメ		
34-124	S 128	床 面	N C 11				砂粒 1mm ~ 少量	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	灰 黄	L K (誤認)、J H 文 模様ナメ		
34-125	S 128	床 面	N E 5	明 暗	(16.4)		砂粒 1mm ~ 2mm	良好 良好	7.5Y R 5/4 10Y R 7/2	绿 黄	尾丸、平行波線、彫刻文 模様ナメ		
34-126	S 128	堆 上	N E 7	附上部	(9.0)	3.3	砂粒 2mm ~ 3mm	良好 良好	10Y R 7/2 7.5Y R 5/4	赤 红	彫文無文、次第に上昇ナメ 模様ナメ	外輪赤色 陶器	
34-127	S 128	堆 上	N E 9		21.8	3.8	砂粒 砂粒	良好 良好	5 Y R 7/2 10Y R 7/2	绿 绿	陶文模様 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	墨色・赤 色底有	
34-128	S 128	堆 上	N C 11				砂粒 1mm ~ 少量	良好 良好	7.5Y R 5/4 7.5Y R 5/4	绿 黄	彫文無文、平凹持 3 点 模様ナメ		
34-129	S 128	床 面	N E 1			5.4	砂粒 1mm ~ 少量	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	灰 黄	湖文原体 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	凹輪土 陶器	
34-130	S 128	床 面	N E 1			5.4	砂粒 1mm ~ 少量	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	灰 黄	湖文原体 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	凹輪土 陶器	
34-131	S 128	堆 上	N E 1			5.4	砂粒 1mm ~ 少量	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	灰 黄	湖文原体 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	129と 同一	
34-132	S 128	堆 上	N C 5				砂粒 1mm ~ 2mm	良好 良好	7.5Y R 5/4 7.5Y R 5/4	绿 绿	湖文模様 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	内・外面 変形物	
35-133	S 134	床 面	N E 4	附上部	(6.4)	7.5	砂粒 1mm ~ 2mm	良好 良好	7.5Y R 5/4 7.5Y R 5/4	绿 绿	100L L (誤認)・彫刻地 模様ナメ	内・外面 変形物	
35-134	S 134	堆 上	N E 6				砂粒 1mm ~ 1mm	良好 良好	10Y R 5/2 10Y R 5/2	黄 黄	彫文模様 L R (誤認)		
35-135	S 134	堆 上	N C 11				砂粒 1mm ~ 2mm	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	灰 黄	100L L (誤認)・彫刻地 模様ナメ		
35-136	S 134	堆 上	N C 11				砂粒 1mm ~ 3mm	良好 良好	7.5Y R 5/4 7.5Y R 5/4	绿 绿	彫文原体 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	141と 同一	
35-137	S 134	堆 上	N A 2 a				砂粒 1mm ~ 2mm	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	灰 黄	彫文模様 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	J K 下接 底付	
35-138	S 134	堆 上	N C 11				砂粒 1mm ~ 2mm	良好 良好	7.5Y R 5/4 7.5Y R 5/4	绿 绿	湖文原体 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	外輪化 物付着	
35-139	S 134	堆 上	N A 7				砂粒 1mm ~ 少量	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	黄 黄	湖文模様 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	外輪化 物付着	
35-140	S 134	堆 上	N A 7				砂粒 1mm ~ 2mm	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	灰 黄	湖文原体 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ		
35-141	S 134	堆 上	N A 4 b				砂粒 1mm ~ 4mm	良好 良好	7.5Y R 5/4 7.5Y R 5/4	绿 绿	湖文原体 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	136と 同一	
35-142	S 134	堆 上	N A 5		(8.2)		砂粒 1mm ~ 3mm	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	黄 黄	模様ナメ		
35-143	S 134	床 面	N E 6			(8.2)	砂粒 1mm ~ 2mm	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	灰 黄	模様ナメ		
35-144	S 160	附 面	N E 3	附上部	29.4	7.6	砂粒 1mm ~ 2mm	良好 良好	5 Y R 5/4 5 Y R 7/2	绿 黄	青褐色ナメ、U 型溝 模様ナメ	内・外面 変形物	
36-145	S 160	附 面	N E 3		25.9	8.8	砂粒 1mm ~ 3mm	良好 良好	2.5Y R 5/4 10Y R 7/2	绿 黄	口沿糊文、湖文原体 L R 模様ナメ	湖文原体 物付着	
36-146	S 160	附 面	N E 1			8.3	砂粒 2mm ~ 3mm	良好 良好	10Y R 7/2 10Y R 7/2	绿 黄	湖文原体 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ		
36-147	S 160	附 面	N E 1			10.2	砂粒 1mm ~ 5mm	良好 良好	10Y R 7/2 7.5Y R 5/4	灰 灰	湖文原体 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ		
36-148	S 160	附 面	N E 6	附上部	(26.4)	8.6	砂粒 1mm ~ 3mm	良好 良好	5 Y R 5/4 10Y R 7/2	绿 黄	湖文原体 L R 模様(?)・模様文 模様ナメ	内・外面 変形物	
36-149	S 160	附 面	N E 6				砂粒 1mm ~ 2mm	良好 良好	2.5Y R 5/4 10Y R 7/2	绿 黄	口沿糊文、沈没文(?)、LR 模様ナメ		

第6表 土器觀察表(5)

法號()は推定値

編 號	出土地點	層 位	分 類	法 號	高 度	底 徑	所 在	地 質	色 調	外 觀	文 様・圖 案		外 觀 備 考
											內 面	外 面	
37-150 23	S 169	床 底	W B 6		網上部 (18.4)		砂壁 1mm 多量	良好	3 YR 7/4 5 YR 7/4	に 赤褐色 有斑點	口縫文化、LR 横位輪文	炭化物赤 色陶器	
37-151 23	S 160	埋 土	W C 10		網底部 11.9	14.0	砂壁 1mm 石子	良好	10 YR 7/4 10 YR 7/4	浅 黃 青	表毛→沈縫→點縫→沈縫→ ミガキ 沈縫 1 条→ミガキ	無縫 (?) 赤色顔料	
37-152 23	S 160	床 底	N D 1		網上部 (14.4)	5.8	砂壁 1mm ~ 4mm	良好	10 YR 7/4 2.5 YR 7/4	灰 青 褐	LR、斜形文字→點縫→沈縫→ 沈縫 1 条→良質	外・内 外陶物	
37-153 23	S 160	床 底	N D 2		網上部 (10.3)	15.8	砂壁 1mm 多量	良好	10 YR 7/4 10 YR 7/4	浅 黃 青	底部文字→點縫→沈縫 1 条→良質	無縫 (?) 赤色顔料	
37-154 35-1	S 160	埋 土	N H 6		網壁 1mm 多量		砂壁 1mm 多量	良好	10 YR 7/4 10 YR 7/4	に 赤褐色 有斑點	沈縫又 1 条、RL 肩彌→ ミガキ	外・外陶 物化物	
37-155 35-1	S 160	埋 土	N H 6		砂壁 1mm 石子		砂壁 1mm 多量	良好	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	沈縫又 2 条、RL 肩彌→ ミガキ	154と 同一	
37-156 35-1	S 160	埋 土	N C 11		砂壁 1mm ~ 2mm		砂壁 1mm 多量	良好	7.5 YR 7/4 7.5 YR 7/4	灰 青 褐	沈縫又 1 条、口唇部膨厚 横位ミガキ	157と 同一	
37-157 35-1	S 160	埋 土	N C 11		砂壁 1mm ~ 2mm		砂壁 1mm 多量	良好	7.5 YR 7/4 7.5 YR 7/4	に 赤褐色 有斑點	口唇部を平腹に變じたした め等に付着	156と 同一	
37-158 35-1	S 160	埋 土	N C 11		砂壁 1mm 多量		砂壁 1mm 多量	良好	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	R L、沈縫 3 条→ミガキ	無縫 (?)	
37-159 35-1	S 160	フク土	N C 11		砂壁 1mm 多量		砂壁 1mm 多量	良好	7.5 YR 7/4 7.5 YR 7/4	に 赤褐色 有斑點	R L、沈縫 4 条→ミガキ	赤色顔料	
37-160 35-1	S 160	フク土	N C 11		砂壁 1mm ~ 2mm		砂壁 1mm 多量	良好	10 YR 7/4 7.5 YR 7/4	灰 青 褐	表毛→沈縫 3 条→ミガキ	外周化 物化物	
37-161 35-1	S 160	フク土	N C 11		砂壁 1mm 多量		砂壁 1mm 多量	良好	7.5 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	底部文字→點縫→沈縫→ ミガキ	無縫 (?)	
37-162 35-1	S 160	床 底	W F 2		網上部 (11.3)	8.7	砂壁 1mm 多量	良好	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	R L、沈縫 3 条→ミガキ	無縫 (?)	
37-163 35-1	S 160	床 底	W F 3		網上部 (11.0)	6.8	砂壁 1mm 多量	良好	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	R L、沈縫 1 条、表毛	赤色顔料	
38-164 23	S 161	床 底	W A 1		網上部 (13.9)		砂壁 1mm 多量	普通	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	口縫小字 (L)、L 及横位 斜位輪文	可窓性	
38-165 23	S 161	床 底	W A 2		網上部 (11.9)		砂壁 1mm 多量	良好	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	口縫文字 (L)、L 及横位 斜位輪文	口縫部小 底状	
38-166 23	S 161	床 底	W A 2		砂壁 1mm 多量		砂壁 1mm 多量	普通	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	口縫文字 (L)、L 及横位 斜位輪文	口縫部小 底状	
38-167 23	S 161	床 底	N C 11		網上部 (10.2)		砂壁 1mm 多量	普通	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	口縫文字 (L)、L 及横位 斜位輪文	口縫部小 底状	
38-168 23	S 161	床 底	N C 11		網上部 (11.0)		砂壁 1mm 多量	普通	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	口縫文字 (L)、L 及横位 斜位輪文	口縫部小 底状	
38-169 35-2	S 161	床 底	W C 11		網上部 (15.6)		砂壁 1mm 多量	普通	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	口縫文字 (L)、L 及横位 斜位輪文	口縫部小 底状	
38-170 23	S 161	床 底	W A 3		砂壁 1mm 多量		砂壁 1mm 多量	普通	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	口縫文字 (L)、L 及横位 斜位輪文	口縫部小 底状	
38-171 23	S 161	床 底	N C 11		網上部 (23.0)		砂壁 1mm 多量	普通	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	口縫文字 (L)、L 及横位 斜位輪文	表毛 6 条 等。斜口	
38-172 23	S 161	床 底	N C 1 b		網上部 (9.6)		砂壁 1mm 多量	普通	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	口縫文字 (L)、平行沈縫	表毛 6 条 等。斜口	
39-173 24	S 161	床 底	N C 1 a		網上部 (7.0)	2.8	砂壁 1mm 多量	黃褐	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	地文顔文、平行沈縫	地文顔文、U 文字 4 単位	
38-174 35-2	S 161	床 底	N C 11		砂壁 1mm 多量		砂壁 1mm 多量	黃褐	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	口縫部小底狀、平行沈縫	171と 同一	
38-175 35-2	S 161	床 底	N C 11		砂壁 1mm 多量		砂壁 1mm 多量	普通	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	山形小尖底、平行沈縫	171と 同一	
38-176 35-2	S 161	床 底	N C 11		砂壁 1mm 多量		砂壁 1mm 多量	普通	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	山形小尖底、平行沈縫	171と 同一	
38-177 35-2	S 161	床 底	N B 6		砂壁 1mm 多量		砂壁 1mm 多量	普通	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	山形小尖底、平行沈縫	171と 同一	
38-178 35-2	S 161	床 底	N C 11		砂壁 1mm 多量		砂壁 1mm 多量	普通	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	山形小尖底、平行沈縫	171と 同一	
39-179 24	S 161	床 底	N C 11		網上部 (13.0)		砂壁 1mm 多量	黃褐	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	地文顔文、平行沈縫文 沈縫 1 条	地文顔文、平行沈縫文 沈縫 1 条	
39-180 24	S 161	埋 土	N C 2		網上部 (12.0)	5.4	砂壁 1mm 多量	黃褐	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	地文顔文、平行沈縫文 沈縫 1 条	地文顔文、平行沈縫文 沈縫 1 条	
39-181 24	S 161	埋 土	N 1			10.2	砂壁 1mm ~ 1mm	良好	7.5 YR 7/4 10 YR 7/4	赤 褐	L R 横位→L R 横位輪文 輪文ナメ	地文顔文、L R 横位輪文 輪文ナメ	
39-182 24	S 161	床 底	N B 2 a		網上部 (23.5)	8.8	砂壁 1mm ~ 4mm	良好	7.5 YR 7/4 7.5 YR 7/4	灰 青	突起 7 缝隙、原体 L R 横位 輪文ナメ、ミガキ	内・外陶 物化物	
39-183 24	S 161	床 底	N A 4 a		網上部 (25.1)	8.2	砂壁 1mm ~ 2mm	良好	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	原体 L R 横位輪文ナメ、 U 文字	地文顔文	
39-184 24	S 161	床 底	N A 4 a		網上部 (22.7)	8.3	砂壁 1mm ~ 2mm	良好	10 YR 7/4 10 YR 7/4	灰 青 褐	原体 L R 横位輪文ナメ、 U 文字	地文顔文	
40-185 24	S 161	埋 土	H 1			8.2	砂壁 1mm ~ 2mm	良好	7.5 YR 7/4 7.5 YR 7/4	赤 褐	地文顔文、平行沈縫文 沈縫 1 条	地文顔文	
40-186 24	S 161	床 底	H 1			8.2	砂壁 1mm ~ 2mm	良好	5 YR 7/4 7.5 YR 7/4	赤 褐	地文顔文、L R 横位輪文 輪文ナメ	地文顔文	
40-187 24	S 161	床 底	H 1			8.2	砂壁 1mm ~ 2mm	良好	7.5 YR 7/4 7.5 YR 7/4	赤 褐	地文顔文、L R 横位輪文 輪文ナメ	地文顔文	

第7表 土器觀察表(6)

法量()は推定値

拂 造 成 形 式	出土地點	層 位	分 類	出 量 (cm)		胎 土	施 工	色 調	外 形 内 面	文 様 圖 案	各 部 箇 所
				廣 度	最 大 厚 度						
49-187 24	S 161	床 底	N C 6	銅上部 15.4	砂粒1 mm ~2 mm	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	明 黃 褐	L.R. 平行波紋2条+ミガキ 横位ミガキ	7個位の 小凹起 内面	
49-188 24	S 161	床 底	N C 6	銅下部 15.6	7.3	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	明 黃 褐	L.R.光端、波紋+動輪+沈 窓+ミガキ 横位ミガキ	内面内 斜面	
49-189 24	S 161	床 底	N B 6	銅上部 (15.6)	砂粒1 mm ~2 mm	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	明 黃 褐	良し(強度)→波紋+動輪+沈 窓+ミガキ 沈窓+ミガキ	6單位の 小凹起	
49-190 24	S 161	床 底	N C 3	銅上部 (14.2)	7.0	砂粒1 mm ~2 mm	良好	5YR 5/6 5YR 5/6	明 黃 褐	良し+ミガキ(強度)=吹硝1 吹硝+ミガキ	内面
49-191 24	S 161	埋 土	N C 4	銅上部 15.4	8.5	砂粒1 mm ~2 mm	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	明 黃 褐	L.R.光端、平行波紋2条+ミガ キ 横位ミガキ	表面ミガ キ
41-192 24	S 161	埋 土	N E 1	銅頂部 上部 12.0	6.0	砂粒1 mm ~2 mm	良好	7.5YR 5/6 10YR 5/6	綠 黃	L.R.+平行波紋2条+ミガ キ 横位ミガキ	内面ミガ キ
41-193 25	S 161	埋 土	N D 6	銅上部 金銀部	9.0	砂粒1 mm ~2 mm	良好	5YR 5/6 5YR 5/6	綠 黃	L.R.+平行波紋、ミガキ 横位ミガキ	内面
41-194 25	S 161	埋 土	N F 1	銅 部 10.0	砂粒1 mm 少々	良好	10YR 5/6 5YR 5/6	明 黃 褐	ハケ延長=頭部+平凹斜面 横位ミガキ	内面	
41-195 25	S 161	床 底	N F 4	銅 部 12.0	6.4	砂粒1 mm 少々	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	明 黃 褐	吹硝+横位+ミガキ	内面
41-196 25	S 161	床 底	N F 5	銅 部 19.3	6.4	砂粒1 mm 少々	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	明 黃 褐	深掘吹硝1条+ミガキ 横位、細縫底直	内面
41-197 25	S 161	床 底	N H 4	銅上部 8.0	5.2	砂粒1 mm 少々	風紋	10YR 5/6 10YR 5/6	淺 黃 褐	吹硝接合部+吹硝+ミガ キ 横位ナメ	内面
41-198 25	S 161	床 底	N H 5	銅上部 7.0	4.5	砂粒1 mm 少々	良好	7.5YR 5/6 10YR 5/6	綠 黃	L.R.+平行波紋5条+ミガ キ 横位ナメ	成形型 上部
41-199 25	S 161	床 底	N G 2	銅 部 19.6	10.9	砂粒1 mm 少々	良好	7.5YR 5/6 10YR 5/6	明 黃 褐	L.R.完焼、直線4、文字+E ガッタ+吹硝1条、縫合面内 斜面	内面
41-200 25	S 161	埋 土	N B 6			砂粒1 mm 少々	良好	5YR 5/6 10YR 5/6	綠 黃	良し+吹硝+ミガキ	189と 同一
41-201 25	S 161	埋 土	N H 6			砂粒1 mm 少々	良好	7.5YR 5/6 10YR 5/6	綠 黃	良し+吹硝+ミガキ 吹硝+ミガキ+吹硝1条	189と 同一
41-202 25	MA52	I	N F 6			砂粒1 mm 少々	良好	7.5YR 5/6 10YR 5/6	淺 黃	良し+吹硝+ミガキ 横位ナメ、ミガキ	遺傳外
41-203 25	S 161	埋 土	N C 11			砂粒1 mm 少々	風紋	5YR 5/6 7.5YR 5/6	綠 黃	吹硝+吹硝+吹硝+ミガ キ 横位ナメ	189と 同一
41-204 25	S 161	埋 土	N B 6			砂粒1 mm 少々	良好	5YR 5/6 10YR 5/6	綠 黃	吹硝+吹硝+ミガキ 横位ナメ	189と 同一
41-205 25	S 161	床 底	N A 2 a			砂粒1 mm ~3 mm	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	明 黃 褐	地文無地+R+吹硝文(大) 横位ナメ	内面
42-206 25	SN47	埴土下	N B 1 b	15.1 (14.0)	6.6	砂粒1 mm 少々	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	明 黃 褐	平行波紋→吹硝+L.R.充燒 +ミガキ 横位ミガキ	213と 同一
42-207 25	SN47	埴土下	N A 4 b	21.5 (17.6)	7.6	砂粒1 mm 少々	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淺 黃 褐	地文無地+R+吹硝位粗粒文 横位ミガキ	内面ミガ キ
42-208 25	SN47	確認面	N D 4 a	5.5 口縁部 13.6	6.4	砂粒1 mm ~2 mm	良好	7.5YR 5/6 7.5YR 5/6	綠 黃	L.R.充焼、泥糊→吹硝+沈 窓+ミガキ 泥糊+ミガキ	内面
42-209 25	SN52	確認面	N H 1 a	21.2 24.4	9.0	砂粒1 mm 少々	良好	2.5YR 5/6 2.5YR 5/6	淡 黃	L.R.+口縁ナメ(無文) 横位ナメ、ミガキ	内面
42-210 25	SN52	確認面	N I			砂粒1 mm ~2 mm	風紋	7.5YR 5/6 7.5YR 5/6	綠 黃	地文無地+R+位粗粒施文 ミガキ	地文ミガ キ
42-211 25	SN52	確認面	N A 7			砂粒2 mm 少々	良好	7.5YR 5/6 7.5YR 5/6	綠 黃	地文無地+R+吹硝位粗粒施文 横位ナメ	内面
43-212 25	SN52	確認面	N F 5	25.6 銅 部 19.0	6.0	砂粒1 mm 少々	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黃 褐	吹硝+吹硝+吹硝+ミガ キ 吹硝1条、横位ナメ	内面無地 吹硝位
43-213 26	SN56	埴土下	N B 1 b			砂粒2 mm ~2 mm	良好	10YR 5/6 7.5YR 5/6	灰 黃	地文無地+R+横位位粗粒施文 横位ミガキ	内面無地 吹硝位
43-214 26	S Q49	埋 土	N A 3 a			砂粒1 mm ~2 mm	良好	7.5YR 5/6 10YR 5/6	淡 黃 褐	地文無地、赤陶文(大) 横位ミガキ	外表面化 物付着
43-215 26	S Q49	埋 土	N A 3 a			砂粒1 mm 少々	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黃 褐	L.R.+平行波紋→曲維文 横位ミガキ	外表面化 物付着
43-216 25	S Q49	埋 土	N C 8	銅 部 (41.0)	6.0	砂粒2 mm ~3 mm	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黃 褐	地文無地+R+方彌瓦面→曲維 文→L.R.充燒+吹硝位粗粒ナ メ	構造済 4単位
43-217 26	S Q50	埋 土	N D 8			砂粒1 mm 少々	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黃 褐	吹硝+動輪+吹硝+ミガ キ 口縁1条、内面2条の比較	吹起削削
44-218 26	S 116 カマ?	埋 土	V A 1	(32.2)	7.0 21.3	砂粒2 mm ~3 mm	良好	7.5YR 5/6 7.5YR 5/6	淡 黃 褐	地文+カマ?→國ナメ(口縁) 横位ナメ、頭部+口縁+口縁	表面火燒 内面
44-219 26	S 132	埋 土	N C 8	底底部 9.1	4.4	砂粒2 mm 少々	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黃 褐	平行波紋+L.R.充燒+ミガ キ 横位ナメ、ミガキ	内面
44-220 26	S 132	埋 土	N D 8			砂粒2 mm 少々	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黃 褐	吹硝+吹硝+吹硝+ミガ キ 吹硝+ミガキ	内面
44-221 26	S 132	埋 土	N F 5	底底部 6.6	8.0	砂粒1 mm 少々	良好	7.5YR 5/6 7.5YR 5/6	淡 黃 褐	吹硝+吹硝+吹硝+ミガ キ 吹硝+ミガキ	内面ミガ キ
44-222 26	S 132	埋 土	N C 11			砂粒2 mm 少々	良好	10YR 5/6 10YR 5/6	淡 黃 褐	平行波紋+L.R.充燒+ミガ キ 吹硝位ナメ、ミガキ	外表面化 物付着
44-223 26	S 132	埋 土	N F 5			砂粒2 mm ~2 mm	良好	7.5YR 5/6 10YR 5/6	淡 黃 褐	吹硝3条+壁部の強度 位位ナメ、ミガキ	内面無地 斜面

第8表 土器観察表(7)

注釈()は推定値

器種 目	出土地点	層位	分類	寸法 (cm)			胎土	焼成	色	質	外面		文様・調査	外觀 面	備考
				基高	最大径	厚度					西	東			
44-224 36-2	S 132	埋土	NG 5				砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR ^{4/2}	燒	泥理3系1單位の板状文	228と 同一			
44-225 36-2	S 132	埋土	H A 1c				砂粒1mm ~3mm	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	砂粒ナメ・ミガキ				
44-226 36-2	S 132	埋土	H F	1.0	3.6		砂粒1mm ~7mm	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文原体LRL-1次焼成(赤)	外觀化 物質			
44-227 36-2	S X51	埋土	T			4.4	砂粒1mm ~3mm	良好	7.5YR ^{4/2}	赤土・黃褐色	地文原体LRL-1次焼成(赤)	外觀化 物質			
44-228 36-2	S X51	埋土	H A 1a				砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	外觀化 物質			
44-229 36-2	S X51	埋土	F				砂粒1mm 多量	良好	2.5YR ^{5/2}	黃	平行施墨・薄肉LRL厚塗				
44-230 36-2	S X51	埋土	H A 1a				砂粒1mm ~3mm	良好	2.5YR ^{5/2}	黃	施墨体LRL厚塗施墨文	外觀化 物質			
45-231 37-1	MA59	N	I A a				砂粒1mm 少量	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-232 37-1	MA59	N	I A a				砂粒1mm 少量	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-233 37-1	MA59	N	I A a				砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-234 37-1	MA59	N	I A a				砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-235 37-1	MA59	N	I A a				砂粒1mm 少量	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文原体LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-236 37-1	MA59	N	I A a				砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-237 37-1	MA59	N	I A a				砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-238 37-1	MA59	N	I A a				砂粒1mm 少量	良好	7.5YR ^{4/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-239 37-1	MA59	N	I A a				砂粒2mm 少量	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-240 37-1	MA59	N	I A a				砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-241 37-1	MA59	N	I A a				砂粒1mm 少量	良好	7.5YR ^{4/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-242 37-1	L T62	N	I A a			(7.2)	砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR ^{4/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-243 37-1	MA56	N	I A b				砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体	241~246 と同		
45-244 37-1	MA56	N	I A b				砂粒1mm 少量	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-245 37-1	MA56	N	I A b				砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-246 37-2	MA56	N	I A b				砂粒1mm 少量	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-247 37-2	L T46	N	I A b				砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR ^{4/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-248 37-2	MA58	N	I A b				砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-249 37-2	MA57	N	I A b				砂粒1mm ~3mm	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-250 37-2	L T58	N	I A b				砂粒1mm ~4mm	良好	2.5YR ^{5/2}	淡黃	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体	252と 同一		
45-251 37-2	MA56	N	I A b				砂粒1mm ~2mm	良好	7.5YR ^{4/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-252 37-2	L T58	N	I A b				砂粒1mm ~5mm	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-253 37-2	MA57	N	I A b				砂粒1mm ~2mm	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-254 37-2	MA57	N	I A b				砂粒1mm 少量	良好	10YR ^{5/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-255 37-2	MA47	N	I A b			(6.0)	砂粒1mm ~3mm	良好	7.5YR ^{4/2}	赤土・黃褐色	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-256 38-1	L T63	N	H A 1a				砂粒1mm ~3mm	普通	10YR ^{5/2}	淡黃	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-257 38-1	L T63	N	H A 1a				砂粒1mm 少量	普通	10YR ^{5/2}	淡黃	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-258 38-1	L T62	N	H A 1a				砂粒1mm ~2mm	普通	10YR ^{5/2}	淡黃	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-259 38-1	L S63	N	H A 1a				砂粒1mm ~2mm	普通	10YR ^{5/2}	淡黃	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			
45-260 38-1	L T42	N	H A 1a				砂粒1mm 少量	普通	10YR ^{5/2}	淡黃	地文LRL-1次焼成(赤)	地文原体			

第9表 土器観察表(8)

法號()は推定値

井 因	出土地点	器 位	分 類	直 径 (cm)		胎 土	成 型	色 、 級	名 面	文 織・調 整	外 面	内 面	備 考
				直	高								
46-261	L.S51	W	II A 1 c			砂粒 1 mm 少量	良好	10YR 5/2 10YR 5/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	房起原頭 朝美		
46-262	MA51	I	II A 1 a			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	褐	地文し R → 沈織文(大) → ト ガキ	小型紀上 横位ミガキ		
46-263	L.T62	W	II A 1 a			砂粒 1 mm 少量	良好	10YR 5/2 2.5YR 1/2	褐 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) → ト 横位ミガキ	横位ミガキ		
46-264	L.S58	I	II A 1 a			砂粒 2 mm 多量	良好	10YR 5/2 10YR 5/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	内面炭化 物付着		
46-265	MA45	I	II A 1 a			砂粒 2 mm 少量	良好	10YR 5/2 2 mm	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ		
46-266	L.T62	W	II A 1 a			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	褐 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ		
46-267	MA29	I	II A 1 a			砂粒 2 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	褐 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ		
46-268	MA46	W	II A 1 a			砂粒 2 mm 少量	良好	10YR 5/2 10YR 5/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ		
46-269	MA42	W	II A 1 a			砂粒 2 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	外面炭化 物付着	
46-270	MA46	I	II A 1 a			砂粒 2 mm 少量	良好	2.5YR 1/2 2.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ		
46-271	L.S57	W	II A 1 a			砂粒 2 mm 多量	良好	10YR 5/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	内面炭化 物付着	
46-272	L.T40	W	II A 1 a			砂粒 1 mm 少量	良好	2.5YR 1/2 2.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ		
46-273	L.S48	W	II A 1 a			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	外面炭化 物付着	
46-274	L.S51	W	II A 1 a			砂粒 2 mm 少量	良好	10YR 5/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	外面炭化 物付着	
46-275	L.S51	W	II A 1 a			砂粒 2 mm 少量	良好	10YR 5/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	2747 同上	
46-276	L.R51	W	II A 1 a			砂粒 2 mm 少量	良好	10YR 5/2 10YR 5/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	外面炭化 物付着	
46-277	L.S60	W	II A 1 a			砂粒 1 mm 多量	良好	10YR 5/2 2.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	外面炭化 物付着	
46-278	L.T50	W	II A 1 a			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	外面炭化 物付着	
46-279	L.T62	W	II A 1 a			砂粒 2 mm 少量	良好	10YR 5/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	内・外面 皮膜	
46-280	MA46	I	II A 1 a			砂粒 2 mm 少量	良好	5YR 7/4 10YR 5/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	外面炭化 物付着	
46-281	L.S57	W	II A 1 a			砂粒 1 mm 少量	良好	2.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	L.R 剥離側面圧痕、側面擦 痕位ミガキ	小切記上 剥離L.R	小切記上 剥離位ミガキ	
46-282	MA56	W	II A 1 b	削 削 (32.4)		砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	L.R 剥離側面圧痕+側面擦 痕位ミガキ	側面擦 痕位ミガキ	側面擦 痕位ミガキ	
46-283	MA56	W	II A 1 b			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	L.R 剥離側面圧痕+側面擦 痕位ミガキ	側面擦 痕位ミガキ	2828 同上	
46-284	L.S59	W	II A 1 b			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	L.R 剥離側面圧痕、側面擦 痕位ミガキ	側面擦 痕位ミガキ	2828 同上	
46-285	MA56	W	II A 1 b			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	L.R 剥離側面圧痕+側面擦 痕位ミガキ	側面擦 痕位ミガキ	2828 同上	
46-286	MB50	W	II A 1 c			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	口絞語添 付實文	
46-287	L.T60	W	II A 1 c			砂粒 1 mm 少量	良好	10YR 5/2 10YR 5/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	
46-288	L.R51	W	II A 1 c			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	口絞語添 付實文	
46-289	L.S57	W	II A 1 c			砂粒 1 mm 少量	良好	10YR 5/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	口絞語添 付實文	
46-290	MA53	W	II A 1 c			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	内側頭 部	
46-291	MA50	W	II A 2 a			砂粒 1 mm 少量	良好	10YR 5/2 10YR 5/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	外側頭 部	
46-292	MA58	W	II A 2 a			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	2911 同上	
46-293	MA56	W	II A 2 a			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	2911 同上	
46-294	L.S52	W	II A 2 a			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	外側頭 部	
46-295	MA42	W	II A 2 a			砂粒 1 mm 少量	良好	10YR 5/2 10YR 5/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	外側頭 部	
46-296	MA53	W	II A 2 a			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 10YR 5/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	外側頭 部	
46-297	MA58	W	II A 2 a			砂粒 1 mm 少量	良好	7.5YR 1/2 7.5YR 1/2	灰 黄褐色 に赤い斑	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	地文し R → 沈織文(大) 横位ミガキ	外側頭 部	